

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（143）

県道曾津高崎線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

や どん い せき
屋 鈍 遺 跡

（大島郡宇検村）



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（143）

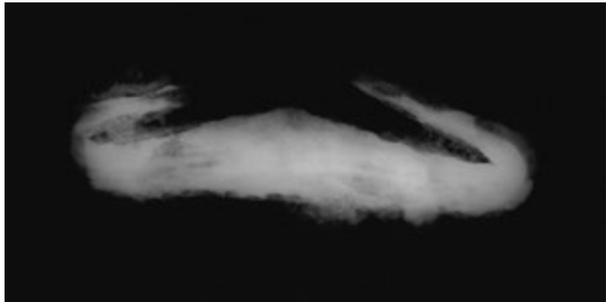
屋
鈍
遺
跡

二〇〇九年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2009年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





序 文

この報告書は、県道曾津高崎線の改築事業に伴い平成18年度に実施した大島郡宇検村に所在する屋鈍遺跡の発掘調査の記録です。

調査の結果、弥生時代・古墳時代・古代の各時代の遺物が出土し、多くの成果を収めました。

特に、墨書のある貝製品や貝符の未製品、牛の骨は、これまで奄美大島で発見例が少なく、当時の人々の交流を知る上で貴重な資料として注目されています。

本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たり県土木部道路建設課をはじめ、宇検宇検村教育委員会及び地域の発掘調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年 3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 宮原 景信

報 告 書 抄 録

ふりがな	やどんいせき							
書名	屋 鈍 遺 跡							
副書名	県道曾津高崎線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	143							
編著者名	西園勝彦							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899 - 4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号							
発行年月日	西暦2008年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。	東経 。	調査期間	調査面積 m ²	調査起因
		市町村	遺跡番号					
やどんいせき 屋鈍遺跡	おおしまくん 大島郡 うけんそん やどん 宇検村屋鈍 あざわきだ 字脇田	85	85.1	129° 11 30	28° 15 30	確認調査 2004 .11 9～11 試掘調査 2006 2 .15 本調査 2007 .1 .15～3.9 整理作業・報告書 作成 平成20年度	1,200m ²	県道曾津高崎線 改築事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主 　　な 　　遺 　　物			特記事項	
屋鈍遺跡	貝塚 散布地	弥生・古墳時代		弥生系土器，貝製品				
		古墳時代・古代		兼久式土器，土師器，須恵器，輸入陶器，鉄器，墨書貝製品，貝符，その他の貝製品（イモガイ類，ヤコウガイ，マガキガイ，二枚貝など），猪牙，食糧残滓〔獣骨（リュウキュウイノシシ，ウシ），魚骨（ブダイ，ハリセンボンなど），貝類（マガキガイ，サラサバテイ，チョウセンサザエ，イモガイ類，ヤコウガイ，シャコガイ，タカラガイ，クモガイ，マイマイ類など）〕			土師器， 須恵器， 輸入陶器， 鉄器， 墨書貝製品， 貝符， 貝符未製品， 磨製石鏃	
遺跡の概要	<p>屋鈍遺跡は，土器や石器と共に貝や獣魚骨などの食糧残滓が多量に出土する貝塚的な遺跡である。</p> <p>遺構は発見していないが，古墳時代～古代の遺物と弥生時代～古墳時代の遺物が無遺物層を挟んで出土した。土師器，須恵器，輸入陶器，鉄器，墨書貝製品，貝符，貝符未製品，磨製石鏃等の出土遺物は，九州・沖縄，遠くは東南アジアとの関連を示している。</p> <p>今後，奄美大島での弥生時代から古代にかけての歴史の解明作業に大きく寄与する資料である。</p>							



瀬戸内町

大島海峡

遺跡位置図 (1:50,000)

例 言

- 1 本書は、県道曾津高崎線改築事業に伴う「屋鈍遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県大島郡宇検村屋鈍に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、鹿児島県土木部道路建設課（大島支庁瀬戸内事務所）から委託を受け鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成19年1月15日から平成19年3月9日まで、整理作業・報告書作成は平成20年度に埋文センターが実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本報告書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面による海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における実測及び写真撮影は、全て調査担当者が行った。
- 9 遺物実測は担当者が行い、一部を(株)九州文化財研究所、(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託し、監修については、青崎和憲、長野真一、西園勝彦が行った。
- 10 遺物に関する写真撮影は、鶴田、吉岡、西園が行った。
- 11 自然化学分析のうち、動物骨・魚骨の同定については、西中川駿氏に依頼した。
本報告書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い、西園、岩屋、岩澤が担当した。
- 12 発掘調査において出土した遺物、実測図、写真並びに本報告書に掲載した図面・写真等は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、活用する予定である。なお、遺物等の注記は、ヤドン・層・取上 とする。

目 次

第 章 はじめに	1
第 1 節 調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査の概要	1
第 章 発掘調査の経過	2
第 1 節 調査の経緯	2
第 2 節 調査の組織	2
第 3 節 調査の経過	2
第 章 遺跡の位置と環境	4
第 1 節 地理的環境	4
第 2 節 歴史的環境	4
第 章 調査の概要	6
第 1 節 調査の方法	6
第 2 節 遺跡の層位	6
第 3 節 遺跡の残存範囲	6
第 4 節 発掘調査の成果	9
第 章 自然化学分析	36
宇検村屋鈍遺跡出土の動物遺体	36
第 章 まとめ	40
第 1 節 土器	40
第 2 節 土師器・須恵器・陶器・鉄器	41
第 3 節 貝製品	42

挿 図 目 次

第1図	確認調査及び試掘調査トレンチ位置図	1	第13図	第2文化層出土土師器・須恵器・陶器実測図	18
第2図	周辺遺跡地図	5	第14図	第2文化層出土石器実測図(1)	19
第3図	遺跡の残存範囲・土層断面	7	第15図	第2文化層出土石器実測図(2)	20
第4図	調査グリッド図	8	第16図	第2文化層出土石器実測図(3)	21
第5図	第1文化層出土甕形土器分類概念図	9	第17図	第2文化層出土鉄器実測図	23
第6図	第1文化層出土甕形土器・類実測図	10	第18図	第2文化層出土貝製品実測図	24
第7図	第1文化層出土甕形土器・類実測図	11	第19図	第2文化層出土ヤコウガイ製品実測図	26
第8図	第1文化層出土甕形土器類・甕形土器底部実測図	12	第20図	第2文化層出土ヤコウガイ螺蓋製貝斧実測図	28
第9図	層出土土器実測図	13	第21図	第2文化層出土貝玉実測図	29
第10図	第1文化層出土石器実測図	13	第22図	第2文化層出土巻貝製品及び用途不明品実測図	31
第11図	第2文化層出土甕形土器分類概念図	15	第23図	第2文化層出土有孔貝製品実測図	33
第12図	第2文化層出土甕形土器～類・甕形土器底部・壺形土器実測図	16			

表 目 次

表1	周辺遺跡・指定文化財等	4	表7	第2文化層出土貝製品観察表	25
表2	第1文化層出土石器観察表	13	表8	第2文化層出土ヤコウガイ製品観察表	27
表3	第1文化層出土土器観察表	14	表9	第2文化層出土ヤコウガイ螺蓋製貝斧観察表	27
表4	第2文化層出土土器・土師器・須恵器・陶器観察表	17	表10	第2文化層出土貝玉製品観察表	30
表5	第2文化層出土石器観察表	22	表11	第2文化層出土巻貝製品及び用途不明品観察表	32
表6	第2文化層出土鉄器観察表	23	表12	第2文化層出土有孔貝製品観察表	34

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景	43	図版9	第2文化層出土の陶器(2)	51
図版2	遺跡近景	44	図版10	第2文化層出土の石器・鉄器	52
図版3	調査前風景・基本層序	45	図版11	第2文化層出土の貝製品・鉄器	53
図版4	第1文化層(層)出土状況・貝符(層)出土状況	46	図版12	第2文化層出土のヤコウガイ製品	54
図版5	第2文化層出土状況	47	図版13	第2文化層出土の貝玉	55
図版6	第1文化層出土の土器・石器	48	図版14	第2文化層出土の巻貝製品及び用途不明品	56
図版7	第2文化層出土の土器・土師器・須恵器	49	図版15	第2文化層出土の有孔貝製品	57
図版8	第2文化層出土の陶器(1)	50	図版16	第2文化層出土のその他の遺物	58

本文中写真目次

現地説明会の様子	3
墨書貝製品赤外線写真	24
第2文化層出土貝 , ~	35

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（大島支庁瀬戸内事務所）（以下土木部）は、県道曾津高崎線改築工事の計画に基づいて、大島郡宇検村において計画した事業に先立って対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化財課（以下文化財課）に照会した。これを受けて文化財課、宇検村教育委員会が分布調査を実施したところ、事業区域内に、周知の遺跡として、弥生時代から中世にかけての遺物が採集されている「屋鈍遺跡」が所在することが判明した。分布調査の結果を受けて、土木部、文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域内において確認調査を実施することとし、調査は宇検村教育委員会が担当することとした。

平成16年11月9日から平成16年11月11日まで予定地で確認調査を実施した結果、工事予定地において約1,200㎡の範囲に弥生時代の遺跡が残存していることが確認された。

そこで、県土木部、文化財課、埋文センターは再度協議し、屋鈍遺跡については、現状保存や設計変更が不可能であることから、記録保存のための緊急発掘調査（本調査）を実施することとなった。

その後、事業区域内の設計変更に伴い平成18年2月15

日に文化財課、宇検村教育委員会が試掘調査を行ったが、遺構・遺物ともに発見されなかった。

本調査は、1,200㎡を対象として平成19年1月15日から平成19年3月9日まで、整理作業・報告書作成は平成20年度に埋文センターが実施した。

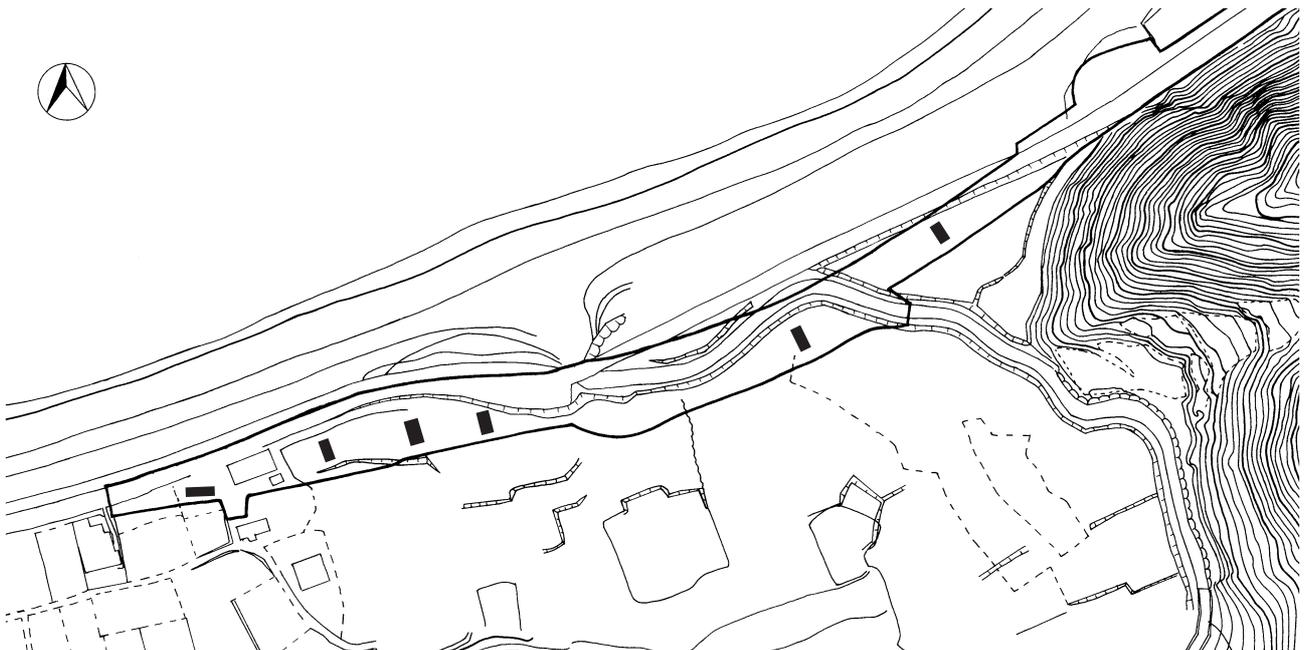
第2節 調査の概要

今回の調査で、弥生時代に相当する遺物と古墳時代～古代に相当する遺物の出土があったが、遺構は検出されなかった。

層からの出土遺物が少なく、層を境にして上層の層からは、古墳時代～古代に相当する兼久式土器、貝製品、食糧残滓と少量の土師器、須恵器、輸入陶器、鉄器等が出土し、下層の層からは、弥生時代～古墳時代に相当する弥生系土器、石器、貝製品、食糧残滓等が出土した。

主な出土遺物

- 1 層（第1文化層・弥生時代～古墳時代）
弥生系土器、磨製石鏃、貝製品（ヤコウガイ、マガキガイ）
- 2 層（第2文化層・古墳時代～古代）
兼久式土器、土師器、須恵器、輸入陶器、鉄器、貝符、貝符未製品、その他の貝製品（イモガイ類、ヤコウガイ、マガキガイ、二枚貝など）、猪牙、食糧残滓〔獣骨（リュウキュウイノシシ?）、魚骨（ブダイ、ハリセンボンなど）、貝類（マガキガイ、サラサバテイ、チョウセンサザエ、イモガイ類、ヤコウガイ、シャコガイ、タカラガイ、クモガイ、マイマイ類など）〕



第1図 確認調査及び試掘調査トレンチ位置図（1：2,000）

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査の経緯

本調査は、1,200㎡を対象として平成19年1月15日から平成19年3月9日まで、整理事業・報告書作成は平成20年度に埋文センターが実施した。

第2節 調査の組織

1 確認調査（平成16年度）

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
（大島支庁瀬戸内事務所）

調査主体 宇検村教育委員会

調査総括 宇検村教育委員会
教育長 岩本 岩壽

調査企画・担当 文化振興室室長 元田 信有

調査協力 笠利町歴史民俗資料館
館長 中山 清美

2 試掘調査（平成17年度）

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
（大島支庁瀬戸内事務所）

調査主体 宇検村教育委員会・鹿児島県
教育委員会

調査総括 宇検村教育委員会
教育長 岩本 岩壽

調査企画・担当 文化振興課長 石原 将央
生涯学習課長 元田 信有

調査担当 鹿児島県教育委員会文化財課
文化財研究員 横手浩二郎

3 本調査（平成19年度）

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
（大島支庁瀬戸内事務所）

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
調査企画 所長 宮原 景信
次長兼総務課長 有川 昭人
次長兼南の縄文調査室長
新東 晃一

調査担当 調査第一課長 池畑 耕一
主任文化財主事兼第一調査係長
兼南の縄文調査室長補佐
長野 眞一
文化財主事 岩澤 和徳
文化財主事 岩屋 高広
文化財研究員 西園 勝彦

調査事務 総務係長 寄井田正秀
主 査 蒲地 俊一

4 報告書作成（平成20年度）

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
（大島支庁瀬戸内事務所）

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
調査企画 所長 宮原 景信
次長兼総務課長 平山 章
次長兼南の縄文調査室長
池畑 耕一

調査担当 文化財主事 西園 勝彦
調査事務 総務係長 紙屋 伸一
主 査 鳥越 寛晴

企画担当者 岩屋 高広

報告書作成指導委員会

平成20年12月8日 池畑次長ほか5名

報告書作成指導委員会

平成20年12月11日 所長ほか12名

指導者 西中川 駿

その他本報告書をまとめるに当たり、元田信有、直美希（宇検村教育委員会）、宇検村教育委員会、中山清美、高梨修、松本信光（名瀬市教育委員会）、松村智之（龍郷町教育委員会）、重久淳一（霧島市教育委員会）、矢島律子（東京都町田市教育委員会）、徳田有希乃（南種子町教育委員会）、本田道輝、中村尚子、新里貴之（鹿児島大学）、池田栄史、後藤雅之（琉球大学）、中村浩（大谷女子大学）、山本信夫（早稲田大学）、永山修一（ラ・サール高校）、木下尚子、山野ケン陽次郎（熊本大学）、中原一成（大島北高校）、竹中正巳（鹿児島女子短期大学）、黒住耐二（千葉県立中央博物館）、田畑幸嗣（上智大学）（順不同・敬称略）の多くの方々にご教示頂いた。

第3節 調査の経過

調査の経過については、日誌抄をもって記載する。

1月15日（月）

調査区内除草及び表土剥ぎ

大島土木瀬戸内事務所と工事計画の杭等を確認する
プレハブ・トイレ等設置完了

1月16日（火）

前日に引き続き表土剥ぎ・環境整備を行う

作業員調査開始 層・層掘り下げ

兼久式土器・土師器・須恵器・陶器・貝製品・獣骨

等出土

1月17日～19日

層・層掘り下げ

兼久式土器・土師器・須恵器・陶器・貝製品・獣骨・墨書貝製品・鉄器出土

19日大島新聞社，南海日々新聞社取材

1月22日～26日

層・層掘り下げ

・層出土状況写真撮影

ヤコウガイ製匙未製品・螺蓋製貝斧出土

2月5日～9日

層・層・層掘り下げ

弥生時代相当器の土器，磨製石鏃等出土

層遺物出土状況写真撮影

8日阿室小中学校20名見学

9日宇検村教委，越間プロダクション取材

2月12日～16日

層・層・層掘り下げ

2月20日～24日

層・層掘り下げ

22日大島新聞取材

24日現地説明会開催 約200名来跡

新聞掲載

平成19年2月22日 大島新聞

2月23日 南海日々新聞

2月25日 大島新聞・南海日々新聞

3月5日～9日

層掘り下げ

土層断面図作成

調査終了

プレハブ・トイレ等撤去完了



現地説明会のようす

第Ⅲ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

屋鈍遺跡の存在する宇検村は、奄美大島南西部に位置しており、北に大和村、東に奄美市住用（旧住用村）、南は瀬戸内町に接している。

土地構成は90%以上が山地で占められ、標高約690mの湯湾岳を最高峰に東西を走る連峰と焼内湾の湾口に浮かぶ枝手久島が焼内湾を囲み、冬季に吹き込む寒風を遮っている。焼内湾はリアス式海岸であり、その入り組んだ形状は天然の良港として遠近海漁船の避難港としても知られる。

地質は村全域を通じて中生代の湯湾層で奄美大島では最も古い地層をなし、頁岩、砂岩等からなる。

平均気温は約22度あり、年間を通じて降雨量が多く、温帯植物、熱帯植物が生育しており、湯湾岳頂上一帯の国有林の一部は、昭和49年2月国定公園に指定され、その他の山岳地帯や河内川も含め村内にはアマミノクロウサギ、ケナガネズミ、ルリカケスといった天然記念物、イシカワガエルやリュウキュウアユなどの希少種等の学術上貴重な動植物が群生している。

遺跡は、宇検村屋鈍字脇田に所在し、焼内湾に臨み、湾口から横当島を眺望できる場所にある。

遺跡の背後には標高約410mの戸倉山、標高約390mの高バチが連なり、この二つの山から湾に向かう扇状地上の標高1～3mの砂丘上に立地する砂丘遺跡である。現在は住宅や畑地として利用されているが、二つの扇状地には川が存在し、過去には水田としても利用されていたようである。

第2節 歴史的環境

宇検村のこれまでに作成された遺跡分布地図を見ると、中世（グスク時代）の遺跡が5遺跡掲載されているのみで、古代以前の遺跡は名柄集落で採取された磨製石斧（村指定文化財）や分布調査で得られた少量の遺物以外はほとんどみられない。急峻な山地が多く平地や大地が少ないことや、今回の屋鈍遺跡の発掘調査が宇検村において陸地の初めての本格的な発掘調査であり、発掘調査件数が少ないこともその要因であると思われる。

中世とされる遺跡もその一つは沈没船の積荷の可能性のある海底遺跡で陸地の遺跡は4遺跡である。表1の6は、屋鈍遺跡とは岬を隔てて東シナ海に臨む遺跡である。宇検村教育委員会の踏査により近年発見された中世の遺跡である。

宇検村内の多くの集落には琉球王朝との関係を示すノ口に関連する辞令書や衣装、扇、漆器をはじめとする調度品などが現在も大切に保管されており、現在集落が営まれているか所を中心に中世頃から集落が形成され、近世に琉球王朝へ編入したことが伺える。

表1 周辺遺跡・指定文化財等

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物	備考
1	屋鈍	大島郡宇検村屋鈍	低地・砂丘	中世 古代 古墳 弥生		本報告、鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（54）
2	部連	部連	低地	中世（グスク）	青磁、内面布圧痕土器	同報告書（54）
3	倉木崎海底	宇検	海底	12～13世紀	中国産陶磁器	宇検村文化財報告書（1）（2）
4	宇検	宇検	山地・低地	中世（グスク）	青磁	
5	田検	田検	低地	中世（グスク）	青磁	
6	屋鈍外浜	屋鈍	低地・砂丘	中世（グスク）	青磁、カムイ焼	
番号	件名	所在地	区分	時代	物件	備考
	大型石斧	大島郡宇検村名柄	村指定	中世（グスク）	石斧	
	佐念モーヤ	佐念	村指定	中世（グスク）	古墓	
	碇石	宇検		中世（グスク）	碇石	
	ノ口関連	宇検、芦検、 田検、湯湾、 部連、名柄、 阿室、屋鈍	村指定	中世～近世 （グスク）	衣類、扇、調度品など	



第2図 周辺遺跡地図 (1 : 100,000)

第Ⅳ章 調査の概要

第1節 調査の方法

1 確認調査

平成16年11月9日から11日に宇検村教育委員会が工事予定地にトレンチを5箇所設定し、層位と遺構・遺物の有無を確認するため重機と人力により掘り下げを行った。

その結果、5トレンチで遺物の出土がみられたため、地形等を考慮し約1,200㎡を本調査の対象とした。

2 試掘調査

平成18年2月15日に事業区域内の設計変更に伴い文化財課、宇検村教育委員会が平成16年度の確認調査で遺物の出土のみられた地点の隣接地に重機による試掘調査を行ったが、遺構・遺物ともに発見されなかった。

3 本調査

平成19年1月15日から平成19年3月9日まで（実働29日）本調査を実施した。作業員数は、延べ394名であった。調査区域は、約1,200㎡である。

調査は、工事計画図面の引照点2（国土座標X = 525163.745, Y = 30514.228）と引照点3（X = 525170.768, Y = 30583.070）を結ぶ線を基準として引照点3を起点に10mごとに北（海）側からA, B, C...東側から1, 2, 3...と調査区を設定して実施した。

また、平成19年2月24日に宇検村教育委員会の協力のもと現地説明会を実施した。参加者数は約170名であった。

4 整理作業・報告書作成

出土遺物の水洗いについては平成18年度の本調査時に終了させ、注記・接合などの整理作業と報告書作成を平成20年度に実施した。

第2節 遺跡の層位

本遺跡の基本層位及び遺物包含層は以下の通りである。

層は現表土で、層はシルト質で旧耕作土である。発掘調査地点は、現在畑地であるが、かつては集落内で水田耕作が行われており、その時期の耕作土であると思われる。層～層は貝やサンゴの小片が混じる砂質土で出土遺物の大半を貝が占める。層は貝やサンゴの小片はほとんどみられず、出土遺物のなかに貝、獣魚骨の占める割合が低い。

また、確認調査、試掘調査時の層位と本調査を実施したか所の層位を比べると、調査区の西側と調査区内の一部には砂礫を多く含んだ川床や川の氾濫、土石流を思わせる土が堆積している。調査区の東側は、基本層位とした土壌ではなく、層とは別の白砂層が表土下に厚く堆積しており様相が異なるようである。

また、先述した土石流を思わせる堆積物中には、貝類

や土器片等が混ざり、調査区の南側への遺跡の広がりが想定される。

基本層序

- 層 表層
- 層 旧耕作土
- 層 貝・サンゴ混じり灰褐色砂質土
（古墳時代・古代包含層）
- 層 貝・サンゴ混じり淡褐色砂質土
（古墳時代・古代包含層）
- 層 貝・サンゴ混じり黄色砂層
（弥生時代・古墳時代包含層）
- 層 褐色砂層
（弥生時代包含層）

基本層序は上記の通りであったが、整理作業を行った結果、出土遺物の質や量などから、層を第1文化層、層を第2文化層ととしてとらえ、層をその中間的な層とした。

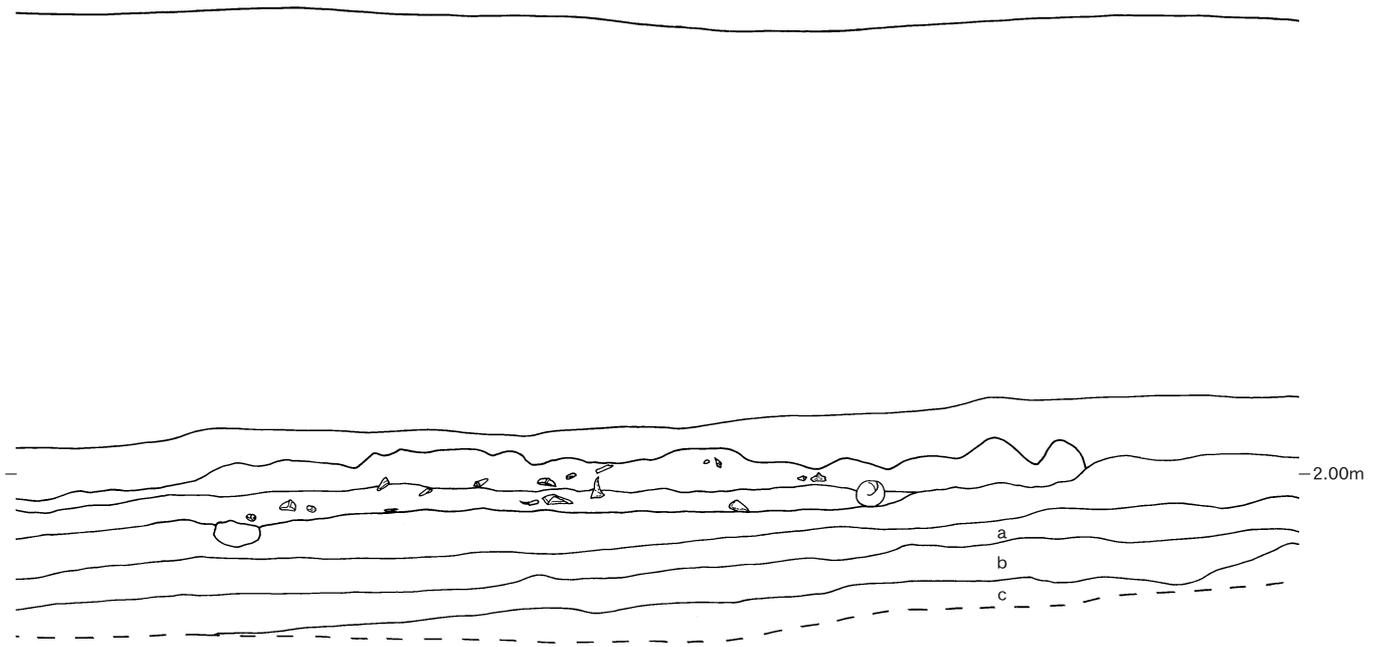
第3節 遺跡の残存範囲

今回、遺跡の北端部分を発掘調査し北側へは遺跡の残存はないが、調査区の南側には遺跡が続いている。

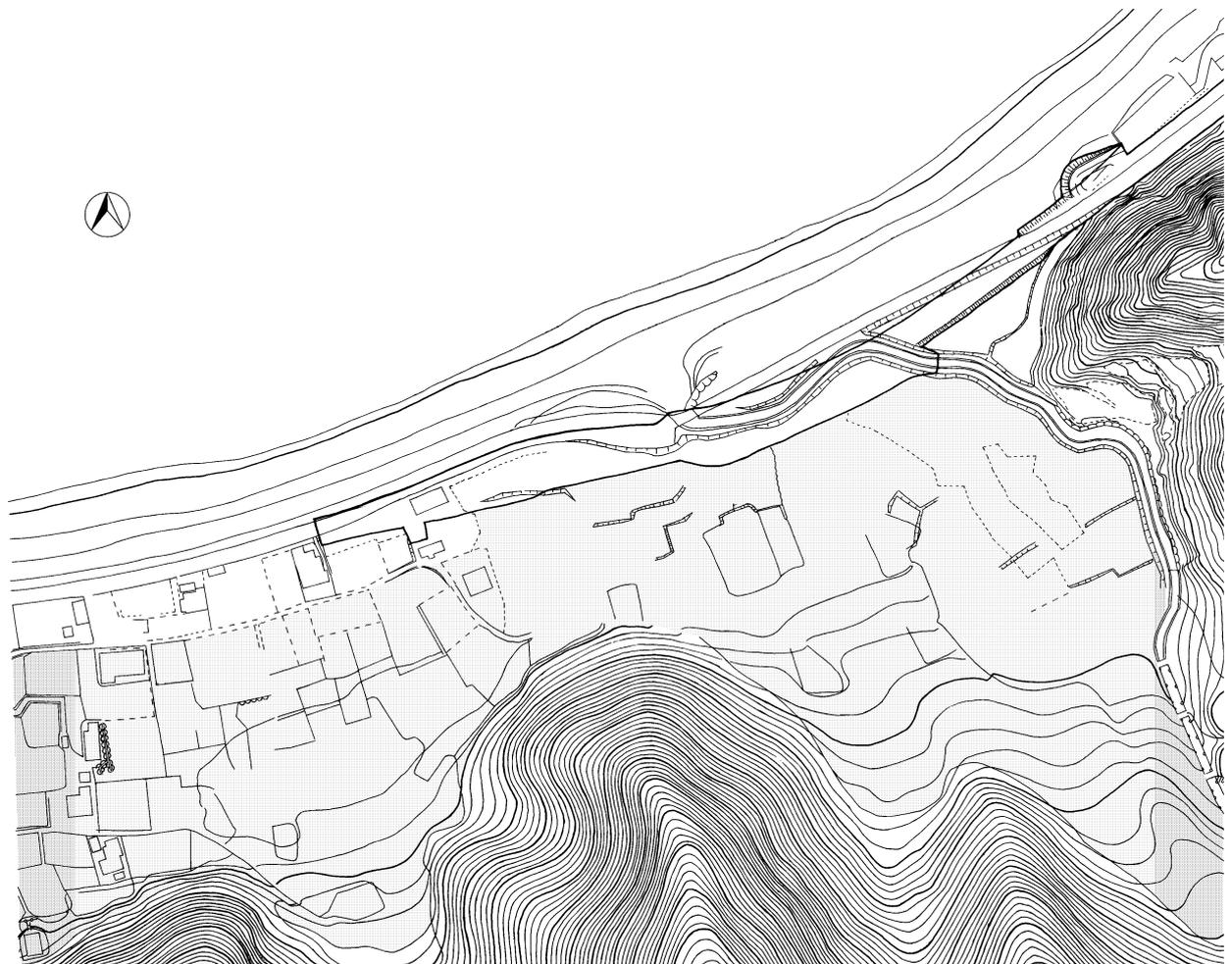
屋鈍遺跡は、宇検村埋蔵文化財分布地図の1番目に中世の遺跡として登録されており、今回の調査区周辺が遺跡範囲とされているが、宇検村教育委員会が周辺を踏査したところ、遺跡範囲とされていない調査区よりも西側の現在の集落で遺物を発見し、集落内の水道工事に立会した際には土器片等を採取しており、この周辺も遺跡であると思われる。

奄美大島では急峻な山地から等高線の間隔が広がる海へと広がる扇状地上の場所に多くの遺跡を見ることができ、第2図の宇検村内の遺跡や瀬戸内町西古見等の遺跡の立地も同様である。これらを考えると屋鈍遺跡の範囲は大きく広がると思われ、第3図にその範囲を示した。

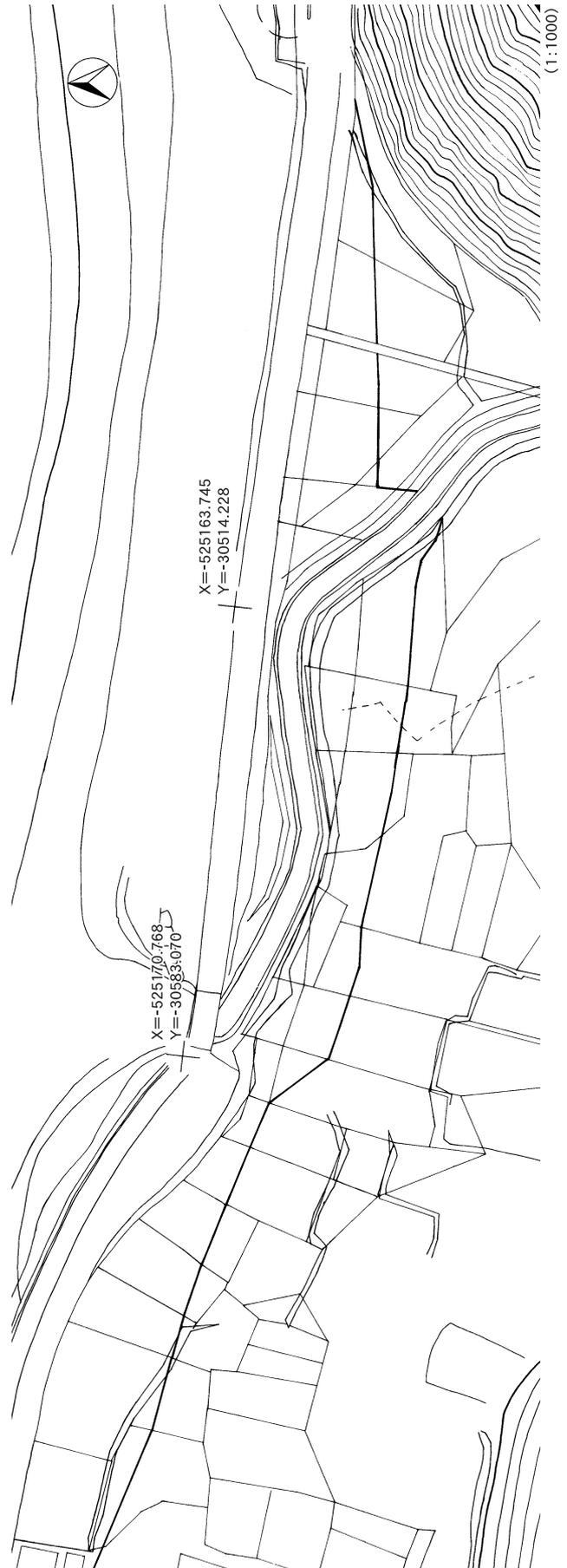
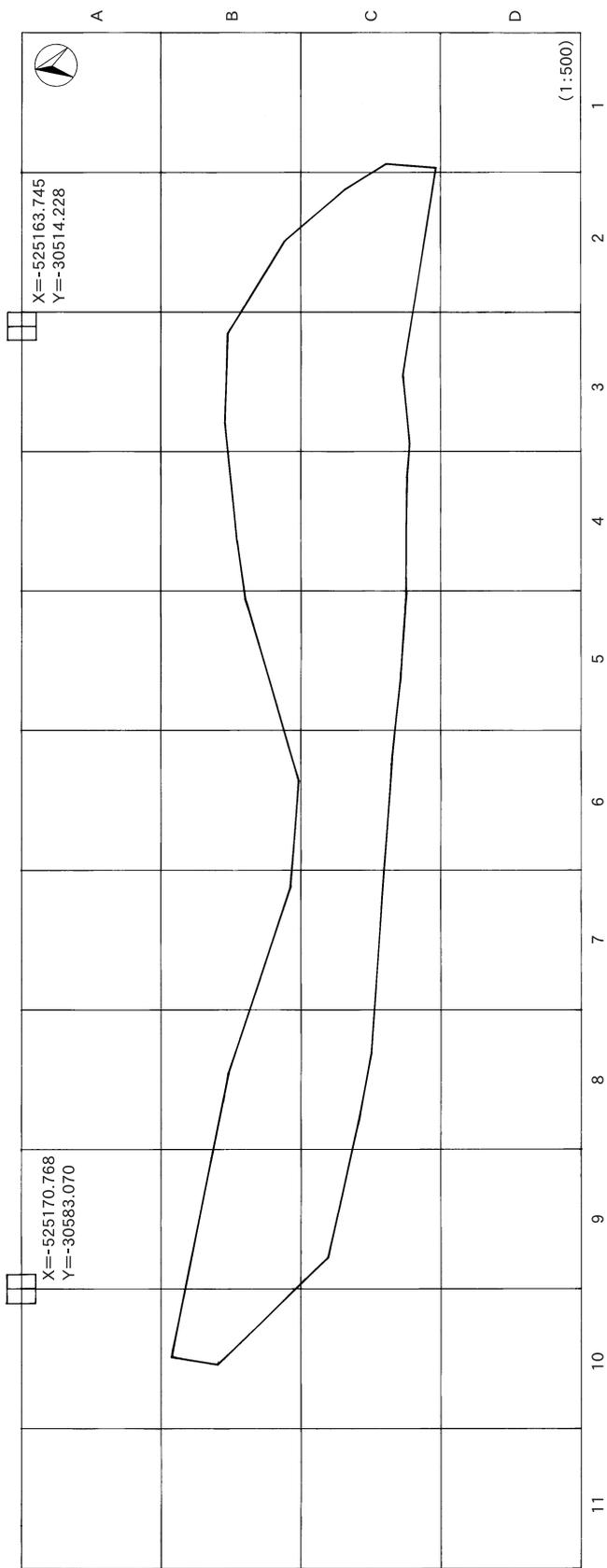
また宇検村内には同様の地形が多く見られ、遺跡として扱われていないが、これらも遺跡である可能性が高いと思われる。



第3図 土層断面 (1 : 40)



遺跡の残存範囲 (1 : 2,500)



第4図 調査グリッド図

第4節 発掘調査の成果

今回の発掘調査で、層からは出土遺物が少なく、層を境にして上層の・層からは、古墳時代～古代に相当すると思われる遺物が出土し、下層の層からは、弥生時代～古墳時代に相当すると思われる遺物が出土した。

上記に基づき、層を弥生時代に相当する第1文化層、層・層を古墳時代から古代に相当する第2文化層に大別し、以下述べていく。なお、いずれの文化層も貝塚の様相を強く感じる。

第1文化層の調査では、弥生系土器と呼ばれている弥生時代相当の土器を中心とした遺物が出土した。出土した土器は文様や器形が多様であり、今後、奄美大島での土器の編年作業に大きく寄与する資料である。一方、その他の石器や貝製品などは第2文化層に比して少ない。

以下文化層ごとに調査の成果についてまとめていく。

1 第1文化層の調査

第1文化層から遺構は検出されなかった。出土遺物の量や種類も第2文化層に比して少ない。特に貝製品の少なさに注目できる。

(1) 土器

出土土器は、全て甕形土器である。口縁部形態をから類に分け、類についてはa、b類に細別した。各類の特徴は、第5図に示した。

底部は、径が小さく脚台状を呈するものと、径が大きく平底を呈するものとに分けられるが口縁部との相互関係はつかめなかった。

類土器（第6図1～3）

3点を図化した。

1は、口縁部内面が張り出し、内外面共に横位のナデと指頭圧により調整される。

2は、外傾して立ち上がったのち、口縁部付近で直立する器形である。外面には、断面三角形の突帯が1条廻らされ、口縁部と突帯とを結ぶ縦位の突帯も施される。口縁部下の外面には刺突が施されている。

3は口唇部に沈線が施され、「」の字状を呈する口縁部下の外面には刺突文が施される。刺突は3カ所確認でき、全て貫通していない。うち一つが先端のとがった棒状のものを回転させることにより施され、残り二つが工具を刺突するだけで施されている。

類土器（第6、7図4～9）

4と5は同一個体と思われる。外傾して立ち上がった後、内傾して口縁部に至る器形である。胴部最大径は、1条の突帯を廻らす付近であり、器形の上位にある。外面の突帯と口縁部の間には貫通しない刺突が施される。

6は無文の土器である。

7も5同様の器形が推定される。口縁部内面にある稜線より上位に内外面共に「八」の字状に沈線を施している。

9は、口径37.4cmを測る。口唇部には1条の沈線を廻らし、口縁部がくの字に折れ曲がるところの外面に2条の沈線を廻らしている。この沈線の上下に2本の沈線で下のあいた半円を描き、また廻らされる沈線の直上には刺突が施される。口縁部内面には4本を単位とする「八」の字状の沈線が施されている。

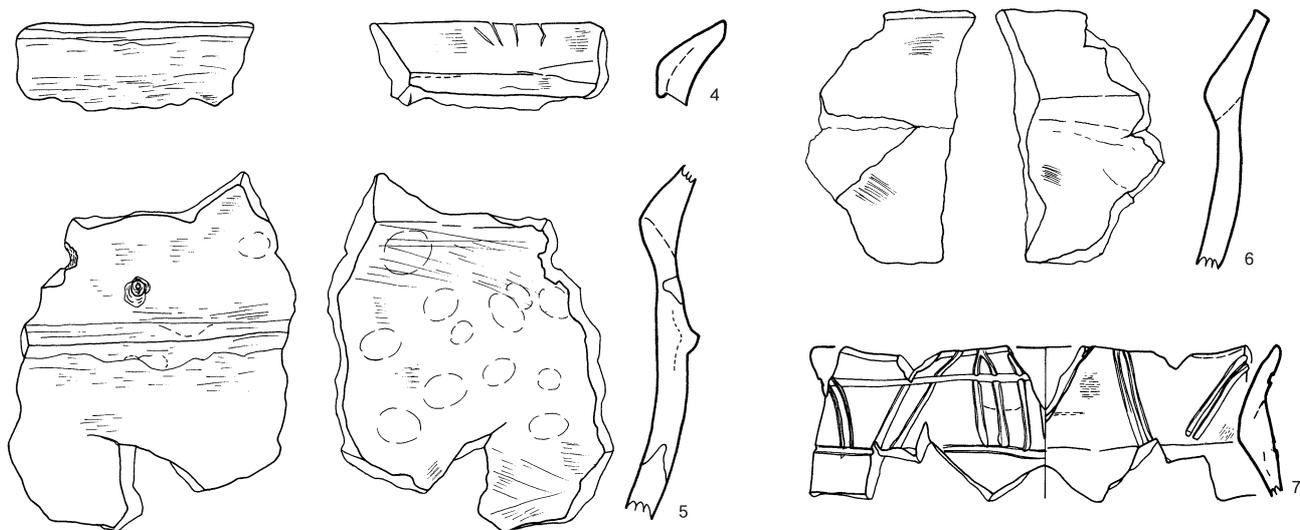
8も9同様の沈線が施される土器であるが、口縁部外面に2条廻らせる沈線上位に施される半円形の沈線がほぼ円に近いものであることが推定され、小片ではあるが刺突がないことが9と異なっている。

類		口縁部が「字状を呈するもの
類		口縁部がくの字状を呈し、内面の稜線が明瞭なもの
a類		外反する口縁部が強く内湾するもの
b類		外反する口縁部の内湾が弱いもの
類		口縁部が緩やかに外反し、内面の稜線が明瞭でないもの

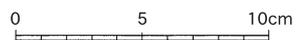
第5図 第1文化層出土甕形土器分類概念図



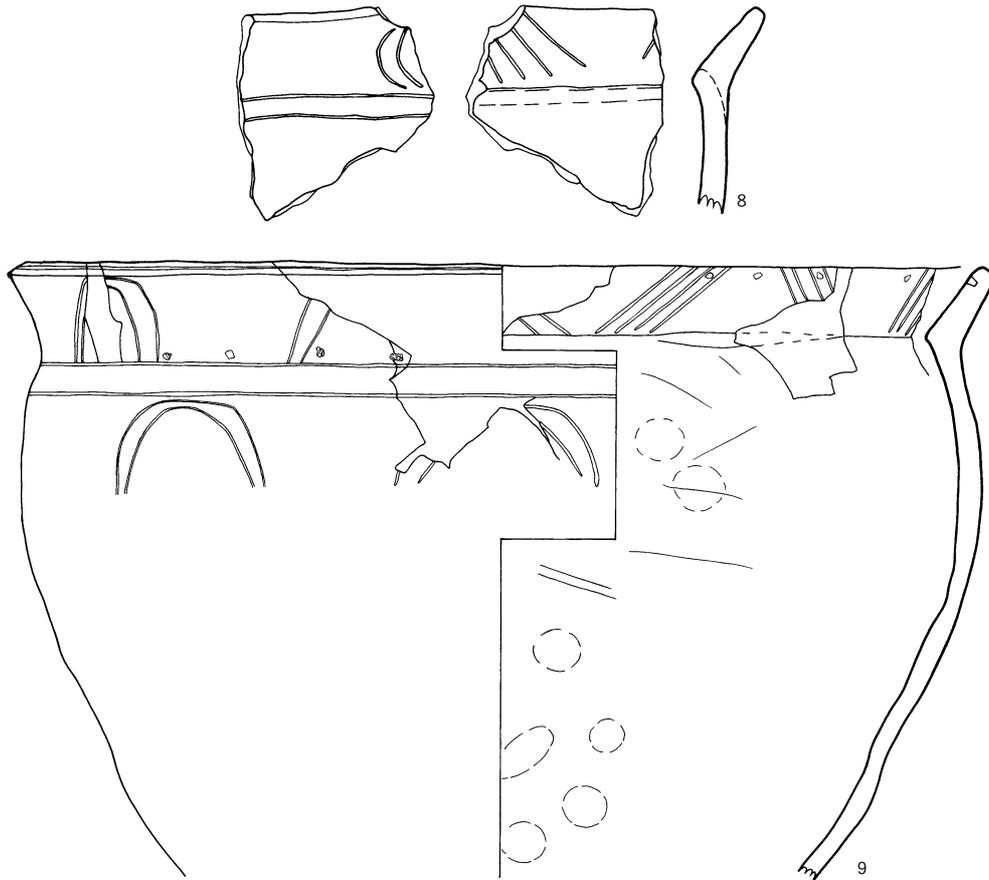
第1文化層 類



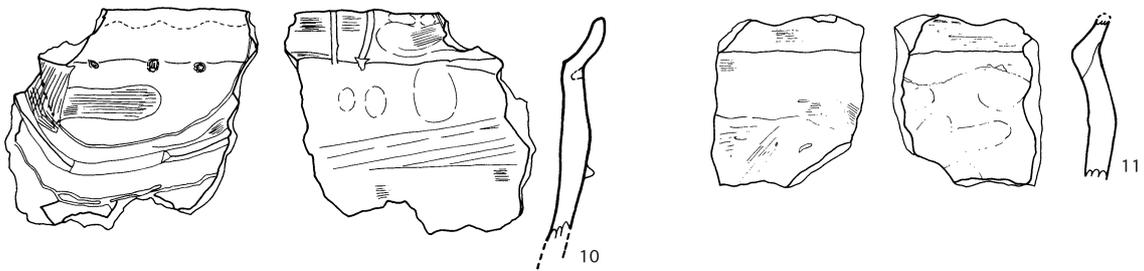
第2文化層 類



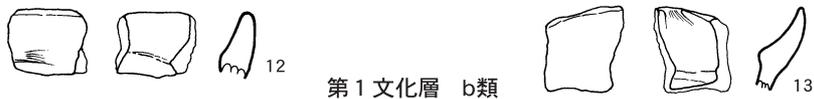
第6圖 第1文化層出土甕形土器Ⅰ・Ⅱ類實測圖



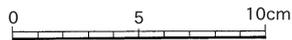
第1文化層 類



第1文化層 a類



第1文化層 b類



第7図 第1文化層出土甕形土器Ⅱ・Ⅲ類実測図

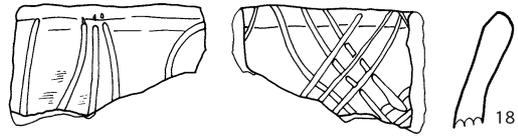
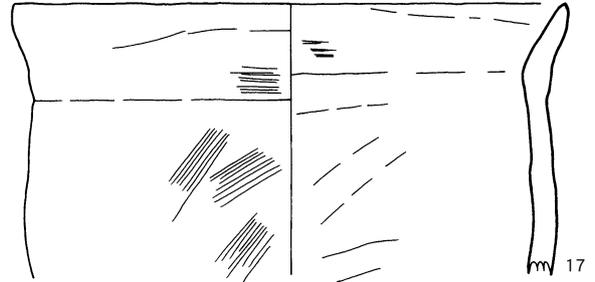
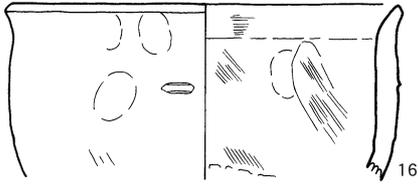
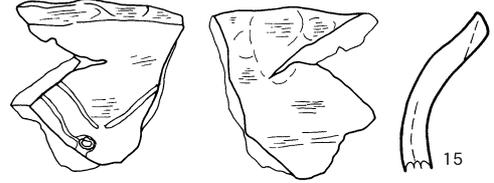
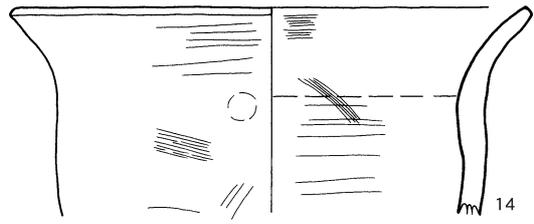
a類土器 (第7図10・11)

10は、口縁部内面に縦位の2条の沈線が施され、外面には貫通しない刺突と上開きの断面三角形の突帯の上下に1条ずつ突帯と平行に沈線を施している。

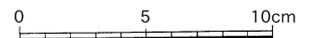
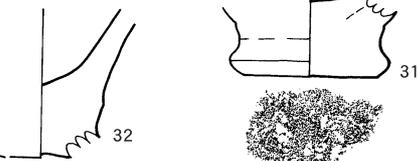
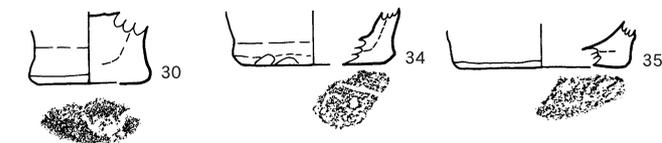
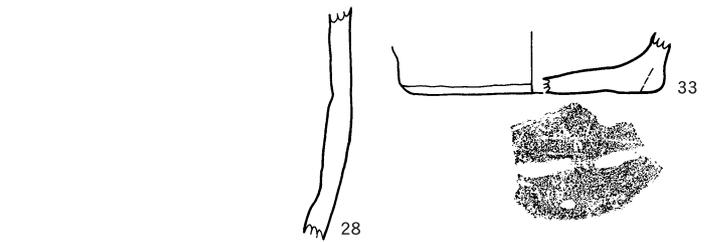
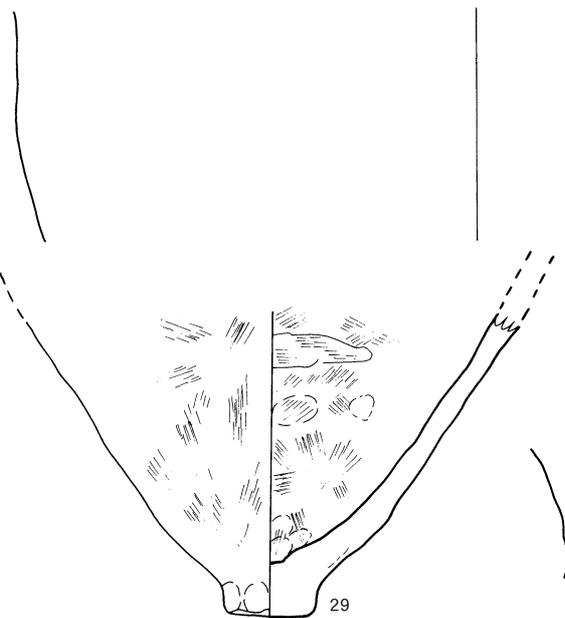
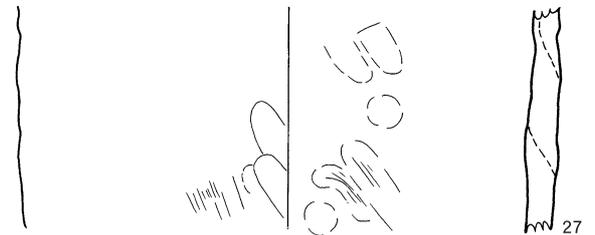
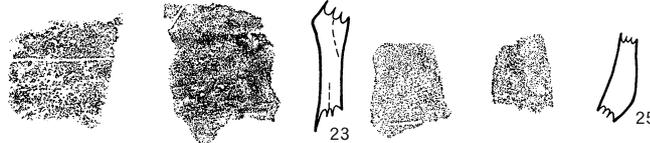
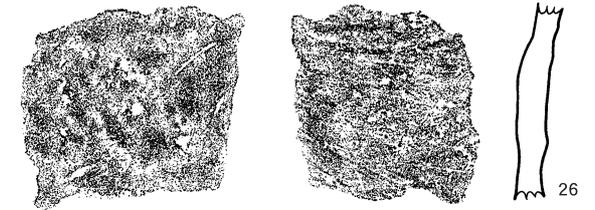
11は、無文である。

b類土器 (第7図12・13)

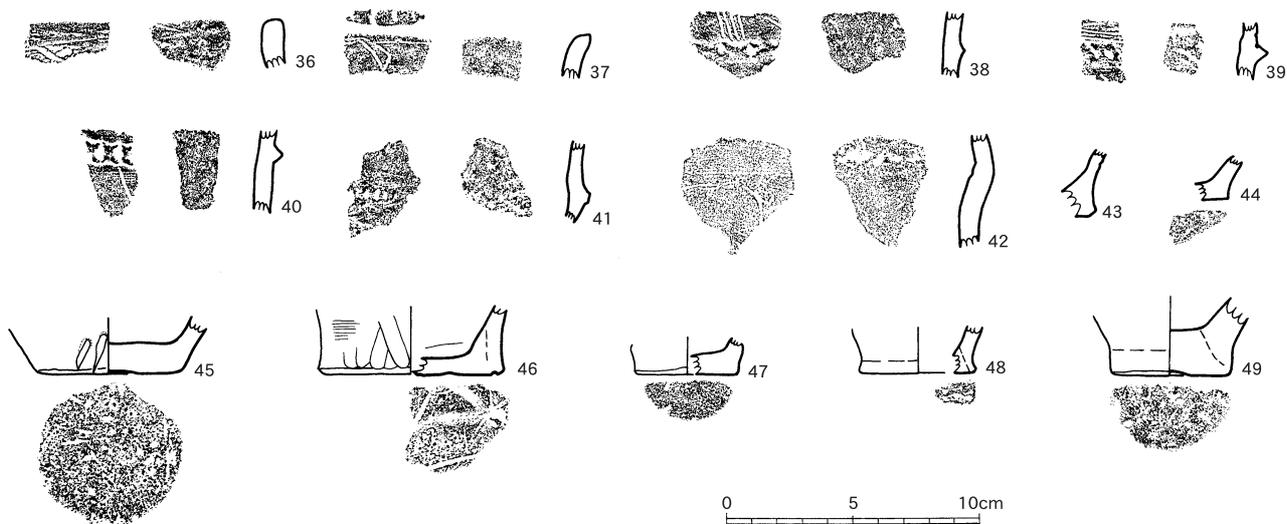
12・13は、10・11よりも口縁部の内湾が弱いものである。小片であるため沈線等が施されるかは不明である。



第1文化層類



第8圖 第1文化層出土甕形土器Ⅳ類土器・甕形土器底部実測図



第9図 V層出土土器実測図

類土器（第8図14～18）

14・16・17は、無文である。3点とも口縁部は、内外面共に横位のナデ、口縁部下は、横位と斜位のナデ・指頭圧により仕上げられている。

14は口径20cm、16は口径15.1cm、17は口径21.6cmを測る。

15は、口縁部外面に「V」字状の2条の沈線を施しており、刺突も見られる。

18は、口縁部の外面内面共に3条を単位とした沈線を施している。外面は縦位と下に開く半円形、内面は格子状に施される。

底部（第8図29～35）

29～32は、29が円柱状の形状で、30～32が少しふくれた形状の小さな脚台状を呈する底部である。

33～35は、平底の底部である。33・34には底面に葉痕と思われる圧痕がある。

これらは、全て 層からの出土であるが、32のみが上層の 層と接合している。

層出土の土器（第9図36～49）

層出土の土器で主だったものを上に掲載した。

42・49などは下層の第1文化層（ 層）のもと思われる。

底部については平底のものは第1文化層・第2文化層共に出土しているものの底部の葉痕は第2文化層に多いため第2文化層のもと思われる。

38～41の口縁部の形状は、第2文化層のもと思われる。

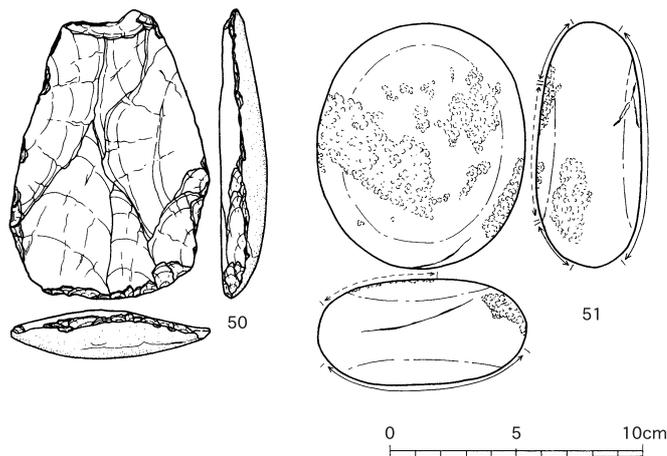
このように 層出土土器は、その上下層のどちらの土器もでているため、分けて掲載した。

石器（第10図50・51）

第1文化層から出土した石器のうち図化できたものは、50・51の2点である。

50は、輝緑岩製の石斧または礫器である。長さ11.4cm、幅7.9cm、厚さ1.9cm、重量180gを測る。表面には剥離があるが、裏面は自然面を残す。

51は、砂岩製の磨石・敲石として使用したものである。長さ9.7cm、幅8.2cm、厚さ4.15cm、重量530gを測る。円礫を用い、側面・正面・裏面全てに敲打痕・磨痕がみられる。実線の矢印で磨面を示し、点線の矢印で敲打面を示した。



第10図 第1文化層出土石器実測図

表2 第1文化層出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	取上	層位	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
10	50	897		礫器(石斧)	輝緑岩	11.4	7.9	1.9	180	
	51	1466		磨石・敲石	砂岩	9.7	8.2	4.15	530	

表3 第1文化層出土土器観察表

挿図番号	文化層	遺物番号	層位	取上	器種・分類	調整		胎土					法量	備考	
						外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	石粒等			
6		1		1401,1402	甕形土器	ナデ	指頭	ナデ	指頭						
		2			甕形土器	ナデ		ナデ							三角突帯
		3		1374	甕形土器	ナデ		ナデ	指頭						刺突, 沈線
		4		1375	甕形土器	ナデ		ナデ							刺突
		5		1380,1376,1377	甕形土器	ナデ		ナデ	指頭						刺突, 三角突帯
		6		1473	甕形土器	ナデ		ナデ							
		7		1345,1358,1359	甕形土器	ナデ		ナデ							沈線
7		8		1352	甕形土器	ナデ		ナデ	指頭					沈線	
		9		400	甕形土器	ナデ		ナデ	指頭				口縁37.4cm, 胸部37.8cm	沈線, 刺突	
		10		1316	甕形土器 a	ナデ	指頭	ナデ	指頭					刺突, 沈線, 三角突帯	
		11			甕形土器 a	ナデ		ナデ	指頭						
		12		415	甕形土器 b	ナデ		ナデ							
8	第1文化層	13		1389	甕形土器 b	ナデ		ナデ							
		14			甕形土器	ナデ		ナデ					口縁20.0cm, 胸部16.9cm		
		15		250,1251	甕形土器	ナデ		ナデ	指頭					沈線	
		16		1360	甕形土器	ナデ	指頭	ナデ	指頭				口縁15.1cm, 胸部15.3cm	沈線?	
		17		1356,1357,1358	甕形土器	ナデ		ナデ				金雲母	口縁21.6cm, 胸部20.9cm		
		18		1449	甕形土器	ナデ		ナデ						沈線	
		19		1431	甕形土器	ナデ		ナデ						沈線	
		20		1298	甕形土器	ナデ		ナデ						沈線	
		21		1394	甕形土器	ナデ		ナデ						沈線	
		22		1353	甕形土器	ナデ		ナデ						沈線, 刺突	
		23		1405	甕形土器	ナデ		ナデ							
		24		1266	甕形土器	ナデ		ナデ						刻目三角突帯	
		25		1395	甕形土器	ナデ		ナデ							
		26			甕形土器	ナデ		ナデ	指頭						
		27		1441,1446	甕形土器	ナデ		ナデ	指頭				胸部21.4cm		
		28		1364,1365,1369	甕形土器	ナデ		ナデ				赤色粒	胸部36.0cm		
		29		1247,1248	甕形土器	ナデ		ナデ	指頭				底径3.6cm		
		30		1406	甕形土器	ナデ		ナデ					底径4.8cm		
31			甕形土器	ナデ		ナデ					底径6.3cm				
32		171,174,205,1346	甕形土器	ナデ		ナデ					底径8.8cm				
33		1436	甕形土器	ナデ		ナデ					底径10.4cm	葉痕?			
34		1301	甕形土器	ナデ		ナデ	指頭				底径6.4cm	葉痕			
35		1302	甕形土器	ナデ		ナデ					底径7.0cm				
9	層	36		319	甕形土器	ナデ		ナデ					沈線		
		37		1121	甕形土器	ナデ		ナデ					沈線, 刺突		
		38			甕形土器	ナデ		ナデ					沈線, 刻目三角突帯		
		39			甕形土器	ナデ		ナデ					沈線, 刻目三角突帯		
		40		225	甕形土器	ナデ		ナデ					刻目三角突帯		
		41		216	甕形土器	ナデ		ナデ					刻目三角突帯		
		42		1137	甕形土器	ナデ		ナデ	指頭				沈線		
		43			甕形土器	ナデ		ナデ							
		44		261	甕形土器	ナデ		ナデ							
		45		1136	甕形土器	ナデ		ナデ				底径5.6cm	葉痕		
		46		1110	甕形土器	ナデ		ナデ				底径7.4cm	葉痕		
		47		270	甕形土器	ナデ		ナデ				底径4.1cm			
		48		1200	甕形土器	ナデ		ナデ				底径4.6cm			
		49		247	甕形土器	ナデ		ナデ				底径4.7cm			

2 第2文化層の調査

第2文化層の調査では、兼久式土器を中心にさまざまな遺物が出土している。土師器、須恵器、輸入陶器、鉄器、貝符、その他の貝製品が多数出土し、マガキガイを主体に様々な種類の貝、動物の食料残滓も出土した。

主な出土遺物

兼久式土器、土師器、須恵器、輸入陶器、鉄器、貝符、その他の貝製品（イモガイ類、ヤコウガイ、マガキガイ、二枚貝など）、猪牙、食糧残滓〔獣骨（リュウキュウイノシシ、ウシ）、魚骨（ブダイ、ハリセンボンなど）、貝類（マガキガイ、サラサバテイ、チョウセンサザエ、イモガイ類、ヤコウガイ、シャコガイ、タカラガイ、クモガイ、マイマイ類など）〕

(1) 土器

第2文化層から出土した土器のほとんどが兼久式土器である。うち甕形土器が大勢を占め壺形土器は少量出土したのみである。

甕形土器を口縁部形態から3類に分類した。分類の基準を第11図に示す。

<p>類</p> 	<p>開きながら立ち上がる胴部が口縁部付近で内傾し、口縁部がくの字状を呈するもの。</p>
<p>類</p> 	<p>開きながら立ち上がる胴部が口縁部付近で内傾し、口縁部が緩やかにくの字状を呈するもの。</p>
<p>類</p> 	<p>開きながら立ち上がる胴部が口縁部付近で内傾し、口縁部が緩やかなS字状を呈するもの。</p>

第11図 第2文化層出土甕形土器分類概念図

甕形土器 類（第12図52）

類土器は、52の1点のみ図化できた。開きながら立ち上がる胴部が口縁部付近で内傾し、口縁部がくの字状を呈し、無文である。

甕形土器 類（第12図53～56）

53～56は、断面三角形の突帯を口縁部が内傾し始

めるか所に1条廻らせている。突帯上位には沈線文が施される。器面はナデ調整により仕上げられているが、突帯を貼り付ける際に内面に強く指押さえた跡が残される。

甕形土器 類（第12図57, 58）

57・58の2点を図化した。

底部から開きながら立ち上がる胴部が口縁部付近で内傾し、口縁部が緩やかなS字状を呈するものである。器面はナデ調整により仕上げられているが、突帯を貼り付ける際に内面に強く指押さえた跡が残される。

その他、59～66は小片のため分類できなかったものである。

甕形土器底部（第12図67～78）

底部は、大きく分けて横に張り出す平底のもの、あまり横に張り出さない平底のものがある。しかし、口縁部との相関関係については不明である。粘土紐を積み上げて造った痕跡がみられ、それらから判断するとまず円盤を造り、そこに粘土紐を積み上げていったものと思われる。

また、すべてに葉痕が残されている。

壺形土器（第12図79, 80）

壺形土器は、79, 80の2点のみが図化できた。

全体の器形は不明であるが、口縁部の立ち上がりは短く、頸部に刻目突帯を1条廻らしている。

(2) 土師器

埴形土器（第13図81・82）

層から少量の出土があったが接合後図化できたのは81・82の2点でその他はごく小さい破片である。これらの破片は全て胎土・色調・焼成がよく似ており、同一個体と思われる。

82は、高台のつく部分が径7.5cmを図る。その他の法量は、不明である。

(3) 須恵器

壺（第13図83～86）

層から4点のみの出土である。83が口縁部で、84・85は肩部、86が底部である。

83は回転ナデ調整で仕上げられている。

84・85は、外面は格子のタタキ目で仕上げ、内面は指押さえ、指ナデにより調整されている。

86は、底径12.2cmをはかり、外面は篋削り、回転ナデ、内面は指ナデ調整、底面は篋削りにより調整されている。これも全て胎土・色調・焼成がよく似ており、同一個体と思われる。

(4) 陶器

壺（第13図87）

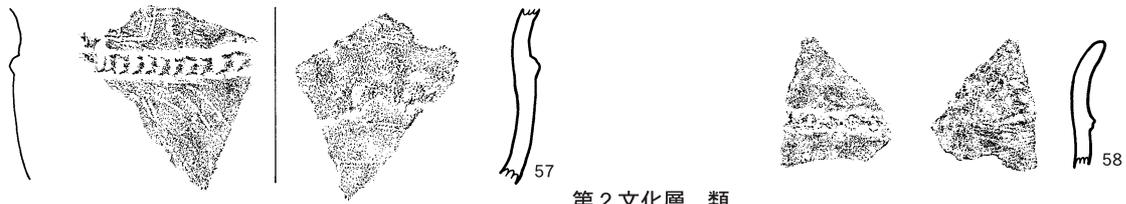
層・層にまたがり約40点ほどの破片が出土した。接合を試みたところ、幾つかの大きな破片に接



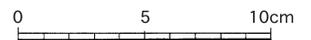
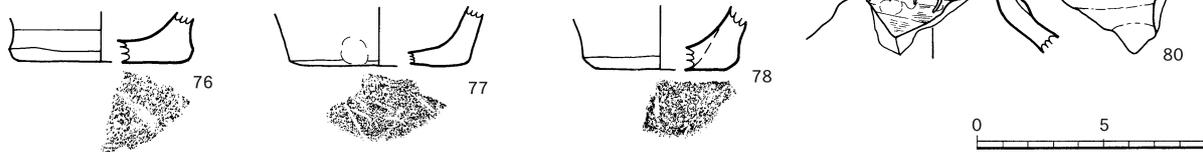
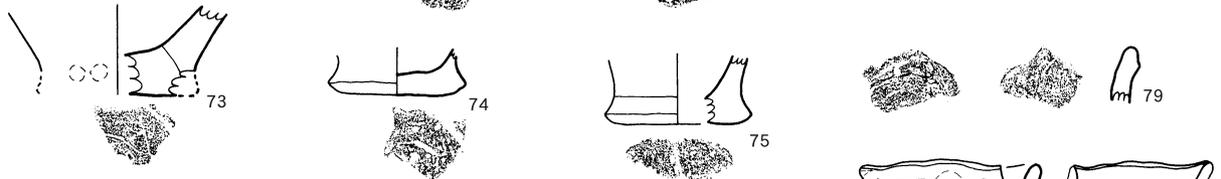
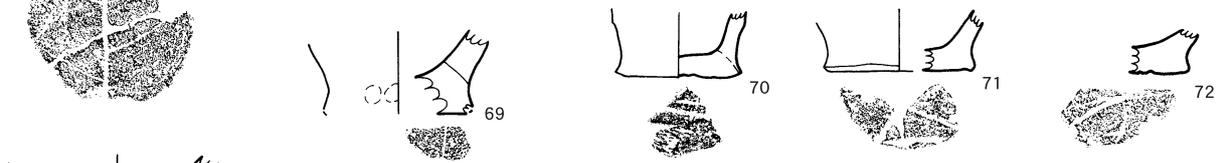
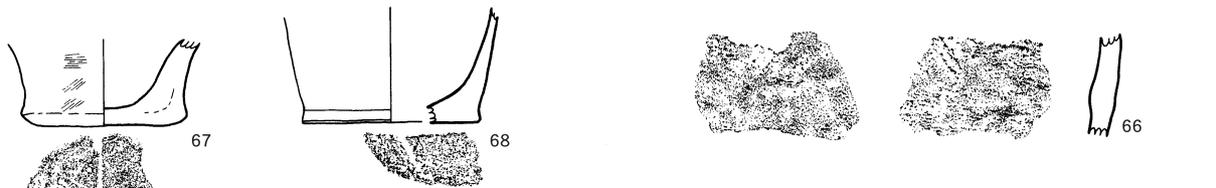
第2文化層 類



第2文化層 類



第2文化層 類



第12図 第2文化層出土甕形土器Ⅰ～Ⅲ類・甕形土器底部・壺形土器実測図

合した。口縁部だけが一周する。これらは全て胎土、色調、釉薬、焼成がよく似ており、同一個体と思われる。

口縁部は、鐔が付き、鐔になる部分には折り曲げて鐔を作成した痕跡が認められる。口唇部で径10.2cmを測り、鐔の外径が15.8cm、内径が9.8cmを測る。頸部は肩部より内傾したのち頸部中央付近で外反し口縁部に至る。頸部と肩部の境となるあたりに回転ナデにより造られた微隆起突帯が廻らされる。頸部径は、微隆起突帯部で11.2cm、最小径9.0cmを測る。胸部最大径は、肩部下位にあり37.3cmを測り、肩が張る器形である。口縁部から胸部にかけては、回転

ナデ調整により仕上げられ、頸部から口縁部にかけてはより丁寧に仕上げられ、肩部から胸部にはナデ調整時の痕跡がよく残っている。釉薬は、外面が口唇部から胸部下半まで内面が肩部付近まで施されている。

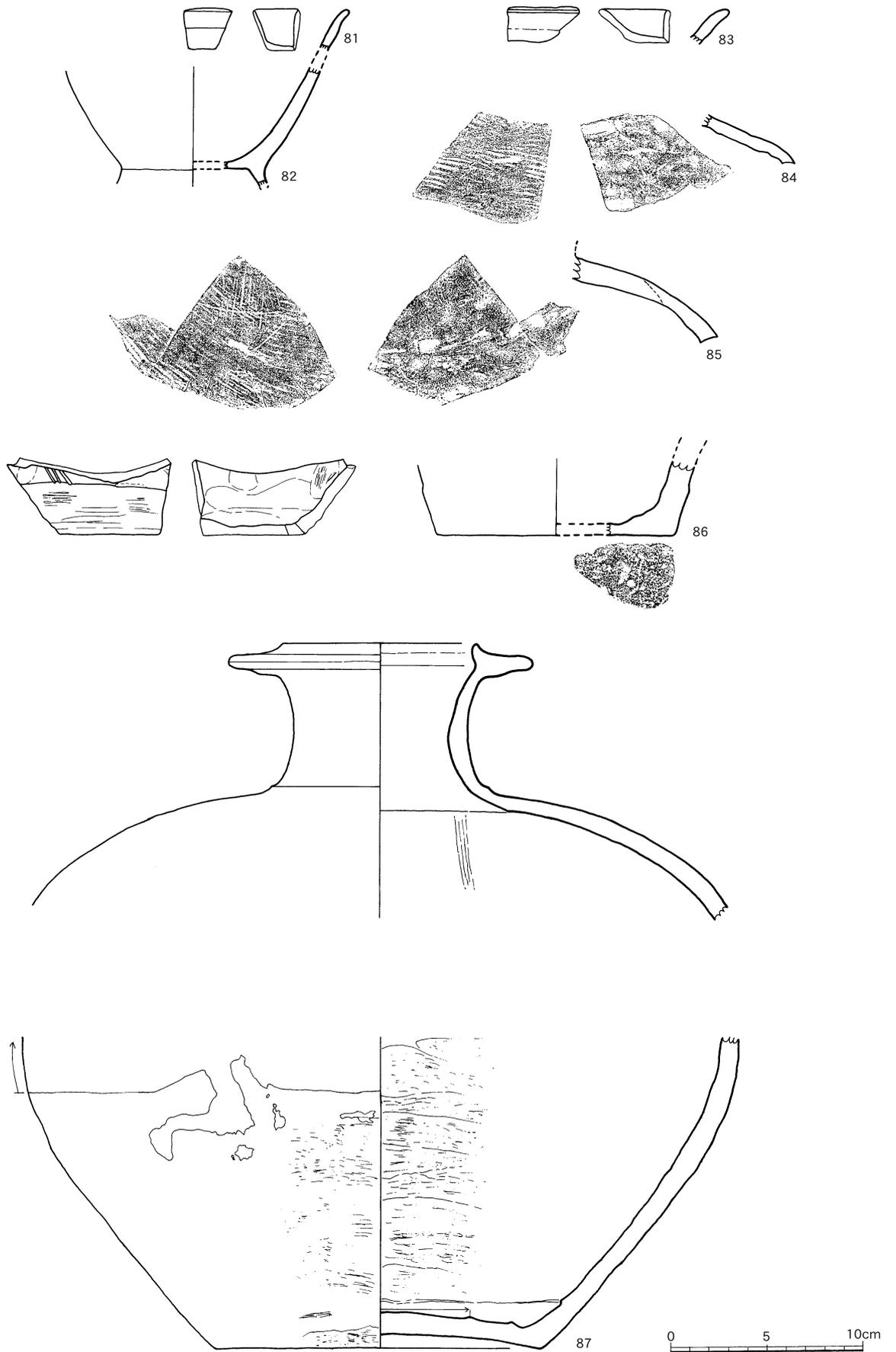
底部は、内面を回転ナデ、削り、指ナデ調整により仕上げられ、外面は、ナデ、削り、底面は削りのみで調整されている。底径は、17.0cmを測る。

焼成は、堅緻に焼かれているが焼き歪みが激しく同一個体と思われる破片でありながら器高を推定するに至らなかった。

表4 第2文化層出土土器・土師器・須恵器・陶器観察表

挿図 番号	文化 層	遺物 番号	層位	取上	器種・分類	調整		胎土					法量	備考	
						外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	石粒等			
12	第 2 文 化 層	52	,	1426	甕形土器	ナデ	ナデ 指頭							口縁16.6cm 胸部16.5cm	
		53		404	甕形土器	ナデ	ナデ 指頭						赤		沈線
		54	,		甕形土器	ナデ	ナデ 指頭								沈線, 刻目突帯
		55		1,2	甕形土器	ナデ	ナデ 指頭								沈線, 刻目突帯
		56		632	甕形土器	ナデ	ナデ 指頭								沈線, 刻目突帯
		57		1057	甕形土器	ナデ	ナデ							胸部20.8cm	沈線, 刻目突帯
		58		1313	甕形土器	ナデ	ナデ								
		59		1072	甕形土器	ナデ	ナデ								
		60		602	甕形土器	ナデ	ナデ								沈線
		61		710	甕形土器	ナデ	ナデ								沈線, 刻目突帯, 口唇刺突
		62		770	甕形土器	ナデ	ナデ								
		63		396	甕形土器	ナデ	ナデ								口唇刺突, 沈線
		64		1233	甕形土器	ナデ	ナデ 指頭								
		65		539	甕形土器	ナデ	ナデ								沈線
		66		653	甕形土器	ナデ	ナデ 指頭								
		67	,	1141,1195	甕形土器	ナデ	ナデ 指頭							底径6.6cm	葉痕
		68	,		甕形土器	ナデ	ナデ 指頭							底径7.1cm	葉痕
		69		94	甕形土器	ナデ	ナデ							底径5.5cm	葉痕
		70		350	甕形土器	ナデ	ナデ							底径5.0cm	葉痕
		71		384	甕形土器	ナデ	ナデ							底径6.0cm	葉痕
		72		29	甕形土器	ナデ	ナデ								葉痕
		73		74	甕形土器	ナデ	ナデ							底径6.1cm	葉痕
		74		1078	甕形土器	ナデ	ナデ							底径5.4cm	葉痕
		75		612	甕形土器	ナデ	ナデ							底径5.8cm	葉痕
		76		461	甕形土器	ナデ	ナデ							底径7.3cm	葉痕
		77		33	甕形土器	ナデ	ナデ							底径7.1cm	
		78		447	甕形土器	ナデ	ナデ							底径6.2cm	葉痕
		79		120	壺形土器	ナデ	ナデ								刻目突帯
80		65	壺形土器	ナデ	ナデ							口径6.9cm	刻目突帯		
13		81		1230	土師器椀	回転ナデ	回転ナデ								
		82		20,323	土師器椀	回転ナデ	回転ナデ							口径7.5cm	
		83			須恵器壺	回転ナデ	回転ナデ								
		84		12,18	須恵器壺	平行タキ	ナデ 指頭								
		85		17	須恵器壺	平行タキ	ナデ 指頭								
		86		19	須恵器壺	ケズリ	ナデ 指頭							底径12.2cm	
		87	,		陶器壺	回転ナデ, ケズリ	回転ナデ, ナデ 指頭							口径10.2cm	36片

23, 31, 41, 4044, 47, 48, 51, 52, 339, 349, 376, 377, 378, 381, 406, 427, 434, 435, 437, 438, 448, 518, 530, 533, 534, 535, 536, 537, 674, 862, 886, 1051, 1093, 1355



第13図 第2文化層出土土師器・須恵器・陶器実測図

(5) 石器

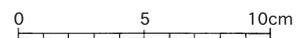
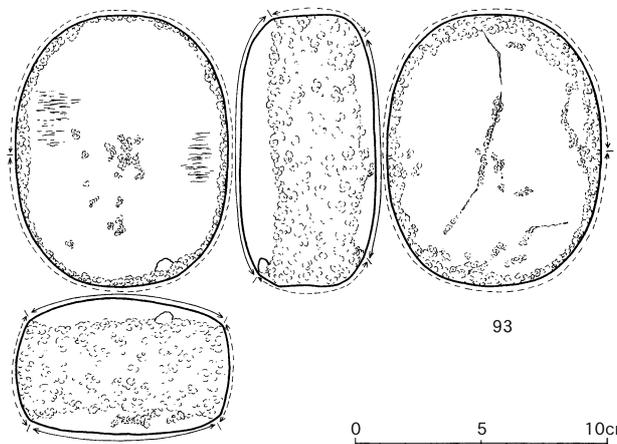
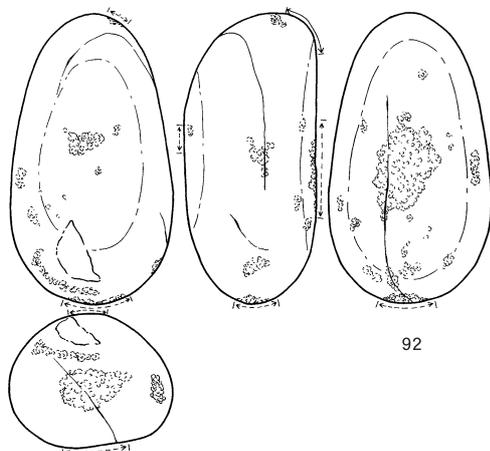
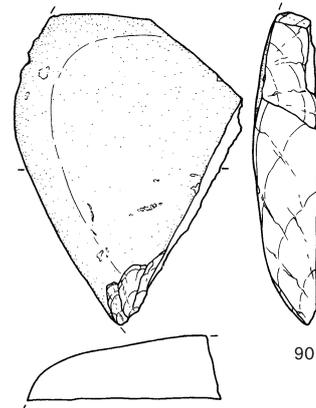
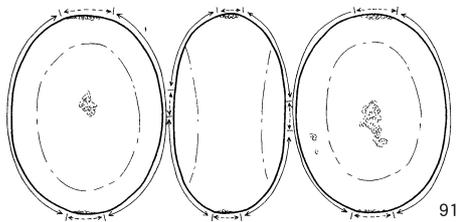
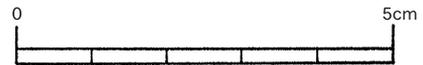
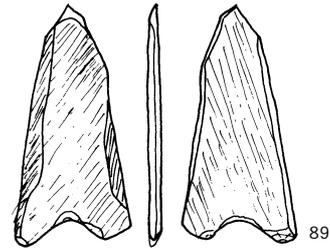
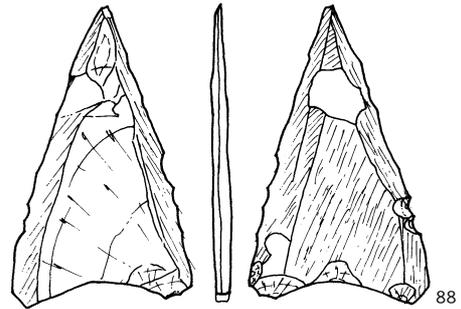
第2文化層からは磨製石鏃、礫器、磨石、敲石、台石が出土している。第1文化層と比して多い。

磨製石鏃（第14図88・89）

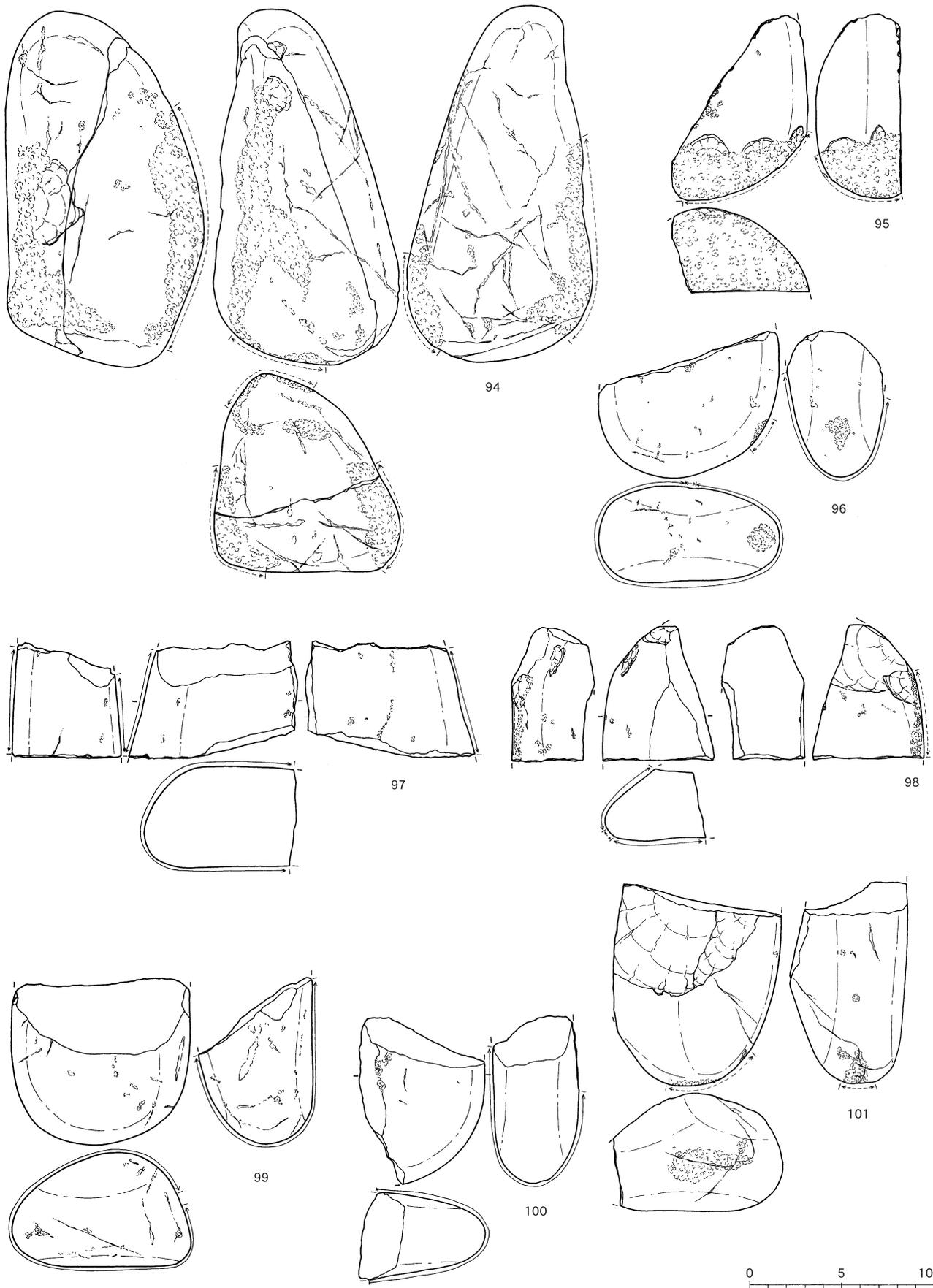
88・89の2点が出土した。共に粘板岩製である。また2点とも 層からの出土である。第1文化層と第2文化層のいずれか検討した結果、土器や貝符などの出土状況が 層の遺物がより第2文化層（ 層）の様相を呈するため本報告書では、第2文化層のものとして取り扱った。しかし、第1文化層のものである可能性も完全には否定できない。

88は、長さ4.05cm、幅2.35cm、厚さ0.2cm、重量2.54gを測る。まず押圧剥離により成形し、研磨により仕上げられたものと思われる。表には剥離痕も残る。基部は凹基である。

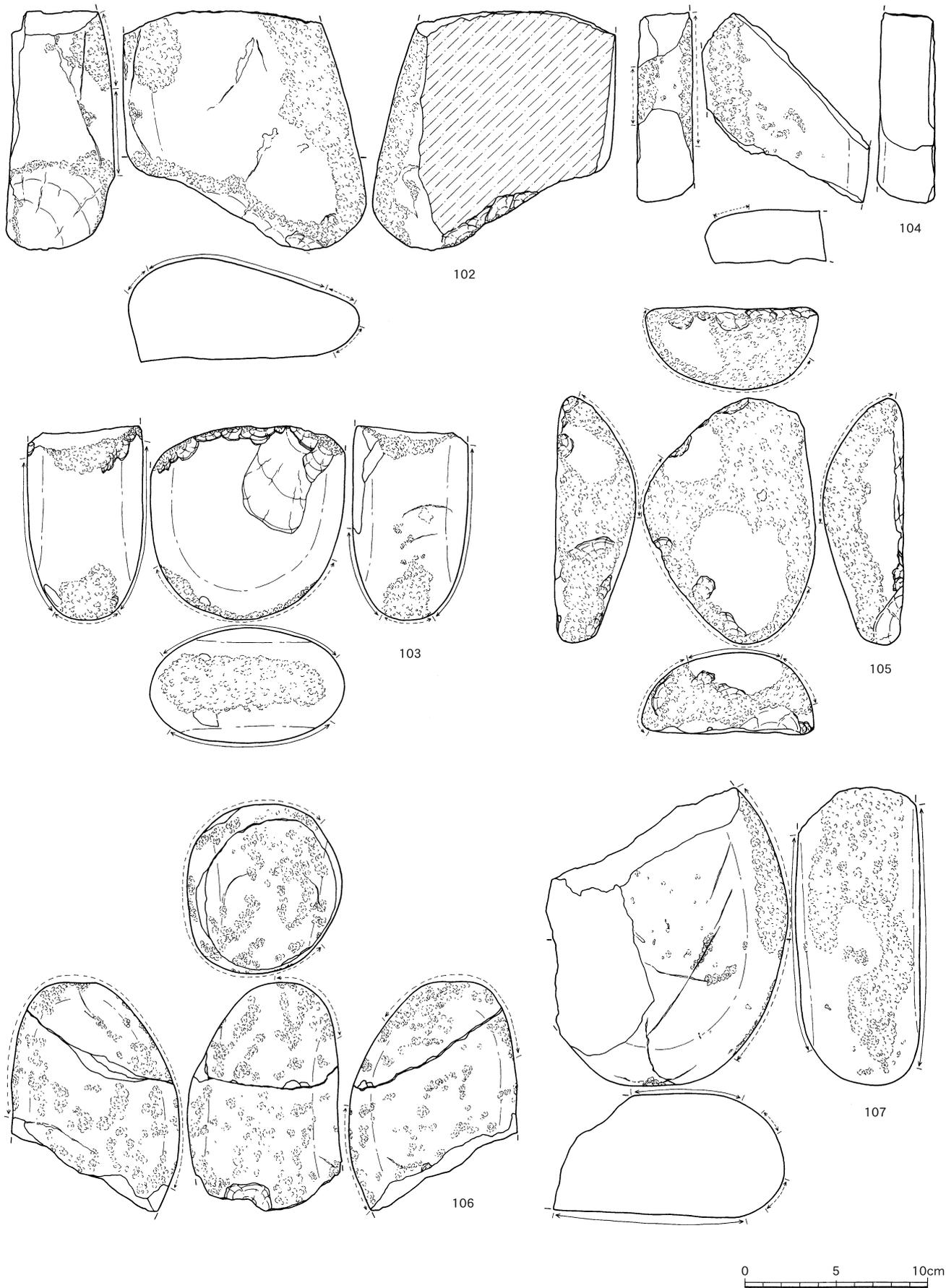
89は、先端部を欠損しており、残存長3.2cm、幅1.55cm、厚さ0.1cm、重量0.83gを測る。剥離後基部加工をした後、側縁部を磨り仕上げている。基部は凹基である。



第14図 第2文化層出土石器実測図(1)



第15図 第2文化層出土石器実測図(2)



第16图 第2文化層出土石器実測図(3)

礫器（第14図90）

90の1点のみである。剥離したもしくは破損した後にとがった先端部を利用したものである。砂岩製で長さ19.2cm，幅10.0cm，厚さ10.65cm，重量2,500gを測る。

磨石・敲石（第14・15・16図91～106）

16点を図化し、実線の矢印で磨面を、点線の矢印で敲打面を示した。石材は全て砂岩である。

石材の使い方によりa類：自然礫を成形しているもしくは形状を意識して使用しているものと思われるもの（91～93），b類：自然礫をそのまま使用しているもの（94），c類：礫を割ってもしくは割れた礫を使用しているもの（95～106）の3つに分けられる。

a類 91・92は、表裏両面の中央部とその上下面に敲打痕がよく残っている。92は側面にも敲打痕が残る。

93は、側面によく敲打痕が残っている。表面には磨痕も残る。

b類 94は、礫の角が鋭角になる部分で敲打している。

c類 96は、b類である可能性もある。

95，101は、礫下面のみを使用し，97，98，

104は、側面のみを使用している。

99は、使用頻度が少なかったものと思われるが若干磨った跡が残る。

100，102，103は、割れた面にも敲打痕が残る。

103は、表裏面に磨痕が残り，側面，上下面には敲打痕が残り，上面の割れ面の鋭角になる部分にも敲打痕が残る。

105，106は割れ面以外に広く敲打痕が残る。

台石（第16図107）

107の1点のみの出土である。礫の使用法は，のc類にあたる。側面の鈍角な部分には広く敲打痕が観察でき，表裏面には磨痕が残る。

以上，で磨石・敲石・台石について述べてきたが，さらに礫の形状で分けると，97，104が扁平な礫側面の鈍角な部分で敲打していることに對し，その他は，厚みのある礫を使用している。また，厚みのある礫を使用する際に敲打を行うか所は，鈍角なか所を使用する場合と鋭角なか所を使用する場合とがある。

これが敲打する対象物や目的等何に起因しているかは不明だが，第1文化層の出土量に比して著しく多いこととヤコウガイ螺蓋製貝斧が第1文化層に皆無であり，第2文化層にのみ見られることは，石の重量も併せてその他の遺跡の状況も考える必要がある。

表5 第2文化層出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	取上	層位	器種	石材	長 cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	備考
14	88	445		磨製石鏃	粘板岩	4.05	2.35	0.2	2.54	
	89	1347		磨製石鏃	粘板岩	3.2	1.55	0.1	0.83	
	90	368		礫器	砂岩	12.35	9.05	2.6	310	
	91	75		磨石・敲石	砂岩	7.8	6.0	4.4	310	
	92	671		敲石・凹石	砂岩	11.5	6.5	5.3	560	
	93			磨石・敲石	砂岩	10.8	8.5	5.4	900	
15	94	421・422		敲石	砂岩	19.2	10.0	10.65	2,500	
	95	903		敲石	砂岩	9.95	7.4	4.55	270	
	96	1294		磨石	砂岩	7.9	10.2	5.2	440	
	97	825		磨石	砂岩	6.3	9.1	5.5	500	
	98	472		敲石・磨石	砂岩	7.3	5.95	4.5	230	
	99	792		磨石	砂岩	9.0	9.7	6.15	680	
	100	824		磨石	砂岩	9.0	6.8	4.2	340	
	101	730		敲石	砂岩	10.9	9.1	6.35	810	
16	102			磨石	砂岩	12.95	13.2	5.9	1,340	
	103			敲石	砂岩	10.65	10.6	6.35	1,130	
	104			敲石	砂岩	10.3	9.1	2.9	300	
	105	337		敲石	砂岩	13.4	9.4	4.4	690	
	106	679・1168		敲石	砂岩	12.4	7.9	9.2	1,170	
	107	101		台石	砂岩	16.2	13.2	6.7	2,050	

(6) 鉄器 (第17図108~110)

108~110は、鉄製品である。層~層から出土した。図化したものの他にも数点の出土があった。

108は、高さ2.1cm、幅8.3cm、厚さ0.55cmを測る。棒状の両端から鍵爪のような突起が出ている。この部分は、左が長さ1.3cm、幅0.6cm、右が長さ3.2cm、幅0.5cmを測る。

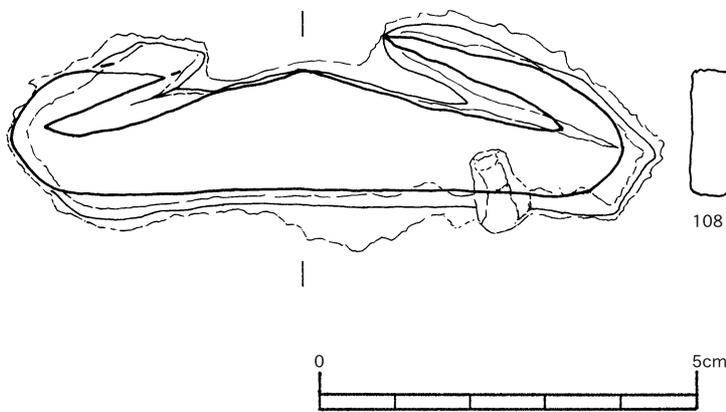
錆が進行し、非常にもろく取り上げる際には、土ごと切り取り室内において、乾燥させた後付着している土の除去を行った。その時点では、棒状の錆の激しい鉄製品という感じだったが、レントゲン写真を撮影したところ上記のような形状であることがわかった。

これまで奄美大島をはじめとする南西諸島においてこのような形状の鉄製品は出土しておらず、用途など不明であるが、鹿児島県内、国内での鉄製品の出土例を見ると火打金によく似ている。

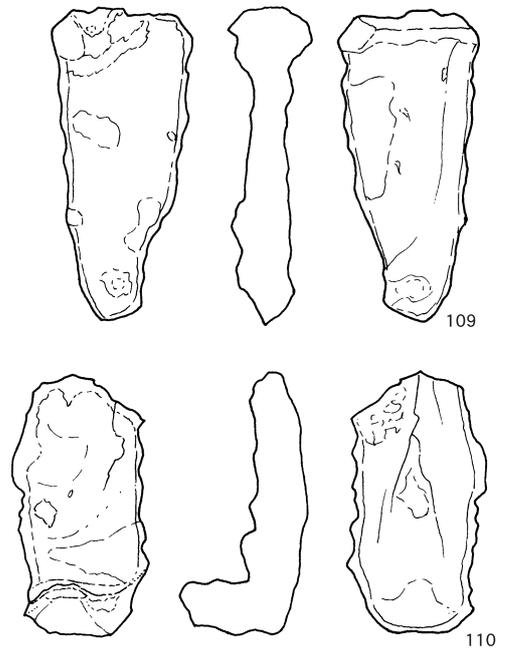
109・110は、本来の形状は不明である。厚さは5~7mm程である。錆の進行が進み非常にもろい。

表6 第2文化層出土鉄器観察表

挿図	遺物番号	取上	層	器種	長cm	幅cm	厚cm	備考
17	108	55		火打金?	2.1	8.3	0.55	
	109	1320			4.2	1.9	0.5	
	110	127			3.5	1.5	0.7	



第17図 第2文化層出土鉄器実測図



(7) 貝製品

第2文化層からは、多くの種類の貝を素材にした多岐にわたる貝製品が出土した。特に墨書貝製品、貝符、貝符未製品は、これまで奄美大島で少量の出土例しかないもの、もしくは初出土となるものである。

以下各貝製品・未製品について記載していく。第2文化層は、古墳時代から古代にかけての層と捉えているが、各遺物について明瞭に時期を特定できていない。

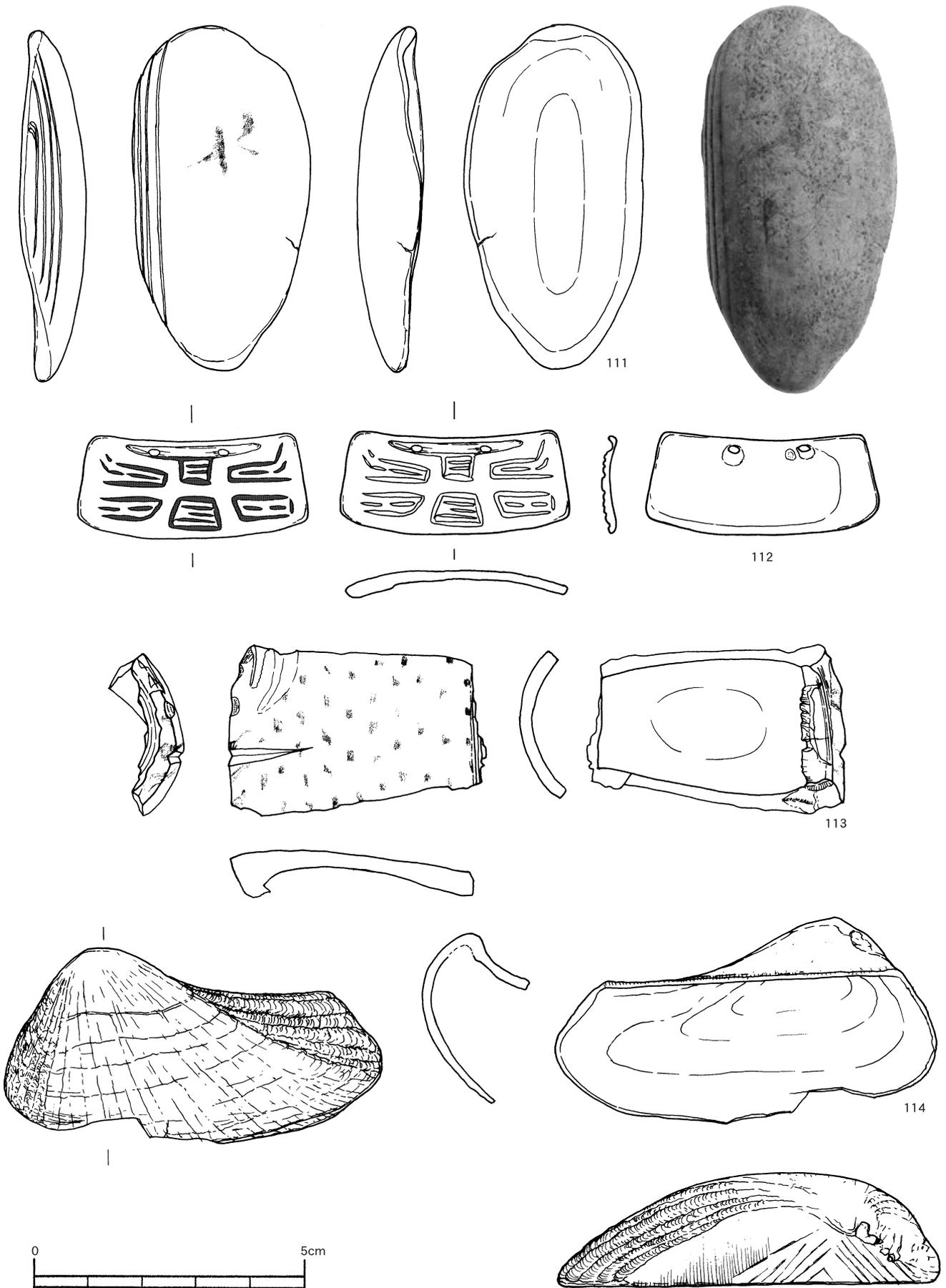
墨書貝製品 (第18図111)

111は、層からの出土で古代のものと思われる。比較的大型のイモガイ類を素材にし、高さ6.5cm、幅3.3cm、厚さ1.2cm、厚さ0.3cmを測る。貝を縦割りにし、器面全体をよく研磨してあるが、頂部には螺塔の痕跡が残る。また、左側面には鋭利な工具で施文された4条の沈線が施されている。

貝の表になる面に墨書もしくは墨書と思われる痕跡が上半、下半それぞれに1カ所ずつ計2カ所確認できる。この墨書の痕跡が見られる方を正面、更に素材となった貝の上下、以下に記載する墨書のとら

え方により上位を決定し作図した。

2つの墨書が文字であるか記号であるかは正確に判断できなかったが、上半にある墨書は、「宋」や「求」の字によく似ており、下半にある墨書と思われる部分は、非常に薄く貝の模様であるのか墨書であるのか判断しづらいものの「一」のように見える。参考に第18図に赤外線写真を掲載した。上半の墨書は、鮮明に撮影できたが、下半の墨書と思われる部分は鮮明に撮影できなかった。



第18図 第2文化層出土貝製品実測図

貝符（第18図112）

第18図に正面・断面・裏面を作図した左側に沈線のみを黒塗りしたものを図示した。112はイモガイ類を素材に制作されており、貝の表裏を遺物の表裏とし、高さ1.95cm、幅4.3cm、厚さ0.35cm、厚さ0.2cmを測る。貝の形状が器形によく反映されており、全体によく研磨されているが、裏面はあまり研磨されていない。正面上部には溝を1条入れ、そこに孔を2孔穿いている。裏面には溝は入れられていないが、孔の裏面には「すれ」と思われる痕跡が見られる。また、裏面右側の孔のそばには貫通させていない孔が一つ穿たれている。正面には鋭利な工具を使用して沈線により模様を作出している。カタカナの「ヨ」とアルファベットの「E」を1本の「-」でつないだようなH字状の幅の広い帯を中央に配し、6つの空間を作出し、この空間一つ一つにも沈線を施している。このうち左右の4つは、広田遺跡上層出土の貝符の一群を連想させる。

裏面には沈線等の模様は施されてない。図上右側には、制作時に貝の螺塔を割り取ったのち研磨した部分と思われる膨らみが残る。

層からの出土であるが、その他の貝製品の出土が第2文化層に多いため、ここに記載した。

貝符未製品（第18図113）

113は、層から出土した貝符の未製品である。高さ3.05cm、幅4.1cm、厚さ0.95cm、厚さ0.3cmを測り、アンボンクロザメを素材にしている。調査最終日に崩壊しそうな壁面に見えている遺物を採取した際に出土したものであるため正確な層位は不明であるが、112の出土層位と比べると確実に上位に位置する。

まだ研磨されておらず、貝そのものの特徴がよく残っているが、死貝が水磨されたものを使用している可能性もある（木下尚子氏教示）。また、層から大型のイモガイ類の打ち割られた破片が出土しているが、どれも水磨を受けていると思われるものばかりであることもそれを裏付けていると思われる。

正面の図上左上には貝そのものの溝があることから、後溝の部位の体層を利用していることが分かる。

正面右側には、螺塔を割り取ったか所から幅を整える際に鋭利な工具で擦り切りを行い、溝を入れ、その後、力を加えて切断した痕跡が残る。また正面左下には、割れ口を利用しながらも貝の高さと形状を揃えようと鋭利な工具で擦り切りを行っている痕跡が残っている。おそらく、素材とした貝の逆三角形に下にすばまる成長線に沿って割れたため台形状になったことからこのような工程を行ったのである

う。

この擦り切りでできたであろう破片の大きさを想定すると上記112より一回り大きい大きさとなる。

その他、このように螺塔部から体層にかけて割れている破片が多く見られたが（35頁写真）擦り切り等の見られたものはこの1点のみであった。

線刻のある二枚貝（第18図114）

114は、フネガイ科の貝を素材にしている。背面は、貝本来の後側歯が消えるほどよく研磨され、7条の沈線を型に配している。この沈線も鋭利な工具で施文されたものである。

腹縁もよく研磨されているが、殻頂部から腹縁にかけては中央部のみが磨られている。

その他、フネガイ科の貝を素材にし研磨が行われていると思われるものの出土があった。114同様に背面は、研磨されているが、貝本来の後側歯が若干残っている。沈線は施されない。殻頂部から腹縁にかけても114同様に中央部のみが研磨されており、口縁については114ほど磨かれていない。

これとは逆に、114はオオタカノハ、コベルトフネガイであり、沈線は背面にある自然の後側歯で研磨されているように見えるが死貝が水磨したものであるとも受け取れる。このようにフネガイ科などの2枚貝の殻頂部や腹縁が磨られた、もしくは水磨したものが少量出土した。

表7 第2文化層出土貝製品観察表

挿図	遺物番号	取上	層	貝種	高cm	幅cm	厚cm	厚cm
18	111	102		イモガイ類	6.5	3.3	1.2	0.3
	112	1088		イモガイ類	1.95	4.3	0.35	0.2
	113		,	イモガイ類	3.05	4.1	0.95	0.3
	114		,	ワシノハ、オオタカノハ、コベルトフネガイ?	3.9	7.2	2.1	0.2

ヤコウガイ製品・未製品（第19図115～119）

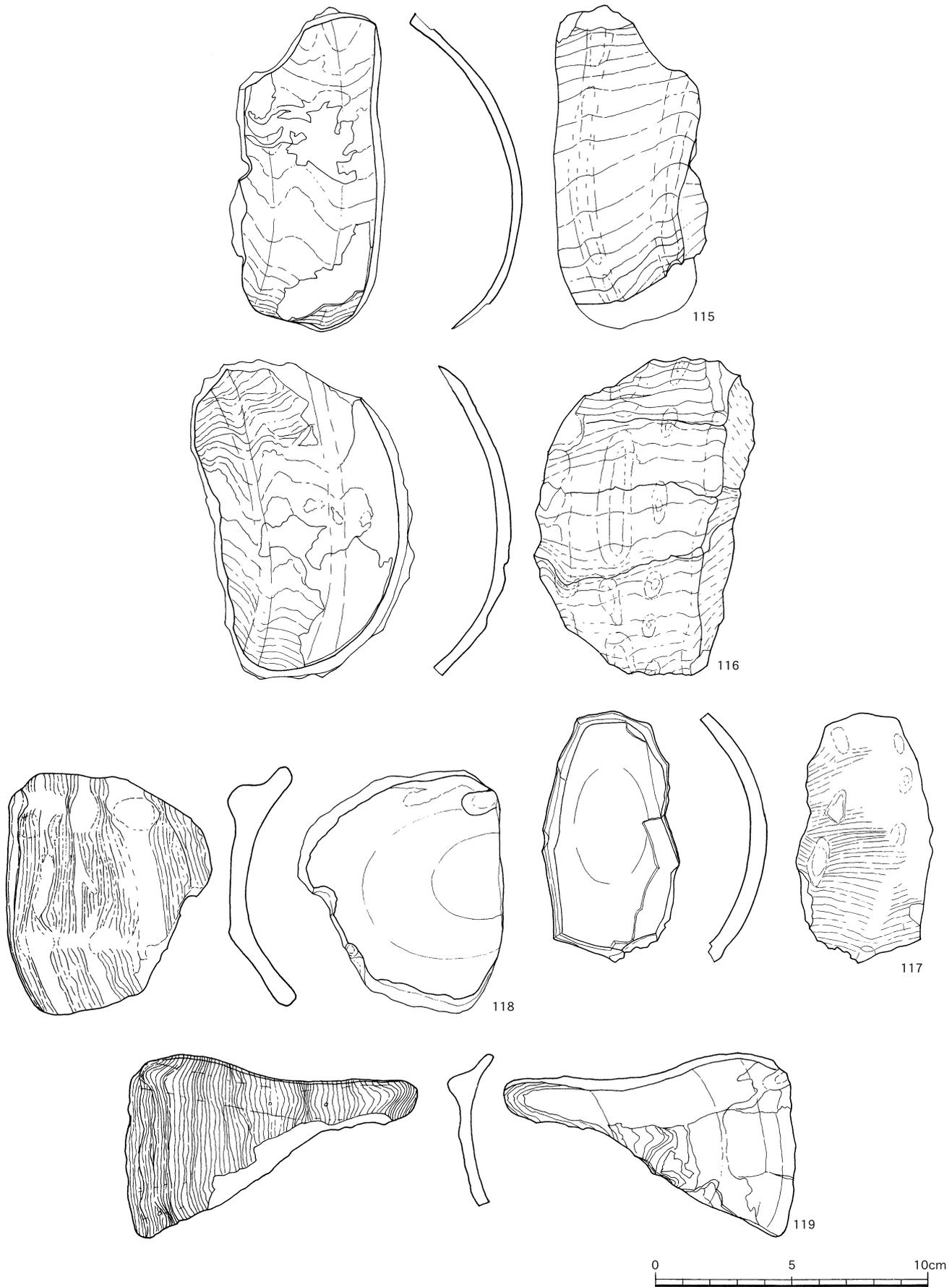
層～層で出土した。115～117は、ヤコウガイ製貝匙の未製品であると思われる。

115と116は、内面を真珠層がほぼ露出するまで研磨してあり、周縁も研磨がかかる。外面は研磨されているものの螺肋部分だけが磨かれ、まだ形状をしっかりと残している。

図化したもののほか3点の出土があり、合計6点である。

117は、層からの出土である。外面は螺肋の形状がほぼなくなるほど研磨された部分と形状をしっかりと残す部分とがあるが、内面と周縁はほとんど研磨されていない。

118、119は、ヤコウガイの殻口付近の破片を全体



第19図 第2文化層出土ヤコウガイ製品実測図

的に磨いたものである。しかし、まだ螺肋・水管溝の形状がよく残り、かつ真珠層も見えていない。貝匙とは思わず、その他の用途のものであろう。

図示したもののほかこの未製品と思われる破片が1点出土している。

そのほか、ヤコウガイが打ち欠かされているものが2点出土した。マツノト遺跡報告書（笠利町教育委員会）第4章第4節で分類されている「ヤコウガイの割取りと利用に関する分類」を参考にすると、屋鈍遺跡出土のものは、そのほとんどが「殻口から大きく欠損するもの」であり、マツノト遺跡報告書中ではこれらは、「食料残滓、製品製作残滓、交易品残滓であり、対応する製品として有効製品、貝匙」をあげている。その他にも臍孔もしくは水管溝6点、貝匙を制作できない大きさの破片が75点、次項螺蓋合計16点が出土している（図版16左上）。

また、チョウセンサザエの中にも同様な欠損をするものがあった。

表8 第2文化層出土ヤコウガイ製品観察表

挿図	遺物番号	取上	層	高cm	幅cm	厚cm
19	115	698		12.0	5.7	3.2
	116	692		11.8	7.9	2.7
	117	1126		9.2	5.0	2.3
	118	379		8.8	7.8	2.4
	119			5.6	11.0	1.7

ヤコウガイ螺蓋製貝斧（第20図120～126）

120～126は、ヤコウガイの螺蓋を利用したヤコウガイ螺蓋製利器、貝斧、敲打具、貝刃とこれまでに報告のあるものである。

120と121は、螺蓋の表左側面にも割れが及んでおり、位置も共通する。

122と123は、螺蓋の表上部にも割れが及ぶ位置が120、121共通し更に122は、裏面上部の割れも見られる。

124～126は、表には割れの見られないものである。

上記のように破損痕跡は3相認められるが、図示した7点とも裏面を見たとき、すべて120と121の表に剥離の見られる位置から時計回りに剥離の順序が見られる点が共通している。

このことは、3相の状態は、今回出土した螺蓋の用法が特定されていた可能性が高く、可塑性に富まない素材を利用したため剥離時の力の強度や、素材の強度などの要因により3相が見られることも想定できる。そのため、これらの3種類の様相が使用法により類別できるものと断定できないため分類は行

わず、3相が見られたことのみを記しておく。

また、下半の剥離の見られる位置が下半すべてに及ぶものが6点で、下半の1/2程度しか剥離の見られないもの1点である。

更に、120は、剥離下面が潰れており、ほかの6点がほとんど潰れていないことと異なっている。

図化したもののほか5点の出土があった。これらは全て8cm～10cmの範囲に収まる。これより小さい蓋は少なく、また、剥離が見られないことから大きさの選択制も感じられる。

剥離の見られないものは完全形、完全形に近いもの4点出土しており、これと合わせるとヤコウガイの蓋が16点出土したことになる（破片点数30）。

表9 第2文化層出土ヤコウガイ螺蓋製貝斧観察表

挿図	遺物番号	取上	層	高cm	幅cm	厚cm
20	120	812		8.2	8.5	2.2
	121	813		9.4	9.6	2.5
	122	996		8.3	8.7	2.4
	123	398		7.9	8.3	2.1
	124	522		7.8	8.0	2.0
	125	627		9.5	9.7	2.1
	126	132		8.7	9.2	2.2

貝玉（第21図127～150）

127～150は、貝玉で小型から中型の巻貝の螺塔を素材にしたものである。127～141がマガキガイ、142～150がイモガイ類を素材としている。

比較的小さいものはマガキガイのみであるということ以外に大きさと素材となった貝との間には関連性を見だしにくく、素材の選択制は不明である。

図示したものの他マガキガイを素材とするものが24点、イモガイ類を素材とするものが1点出土している。

図化したものと合わせ図化しなかったものも計測値を表10に示した。

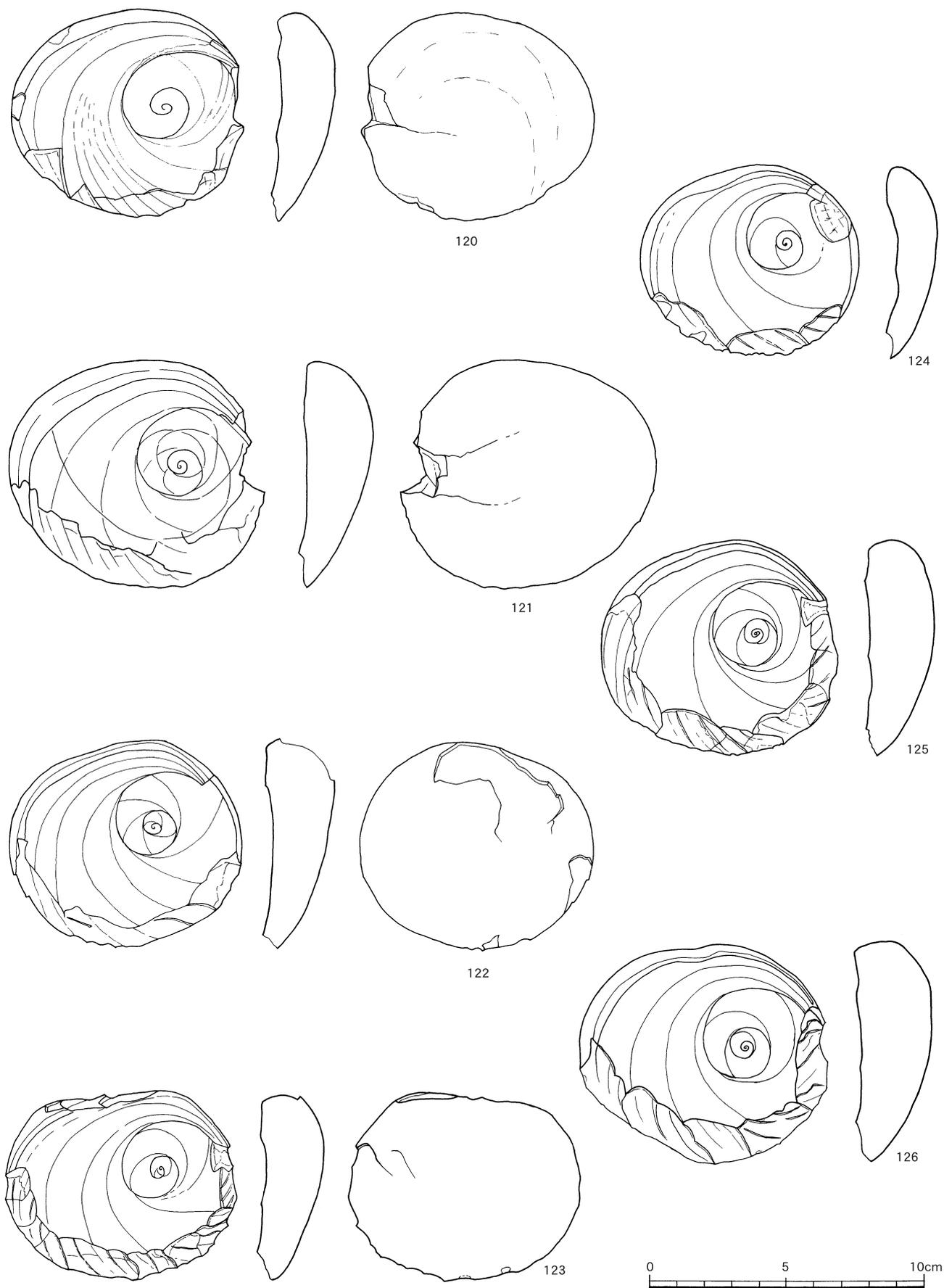
これらは体層を割りとり、孔があくまで研磨するか、孔を穿いている。外側はよく研磨されているが、内側はあまり研磨されていない。また、孔の無いものも見られた。

更にこの貝玉については、海岸からこのような形状になったものを意図的に拾ってきてそのままもしくは若干の加工を加え使用した可能性もある。

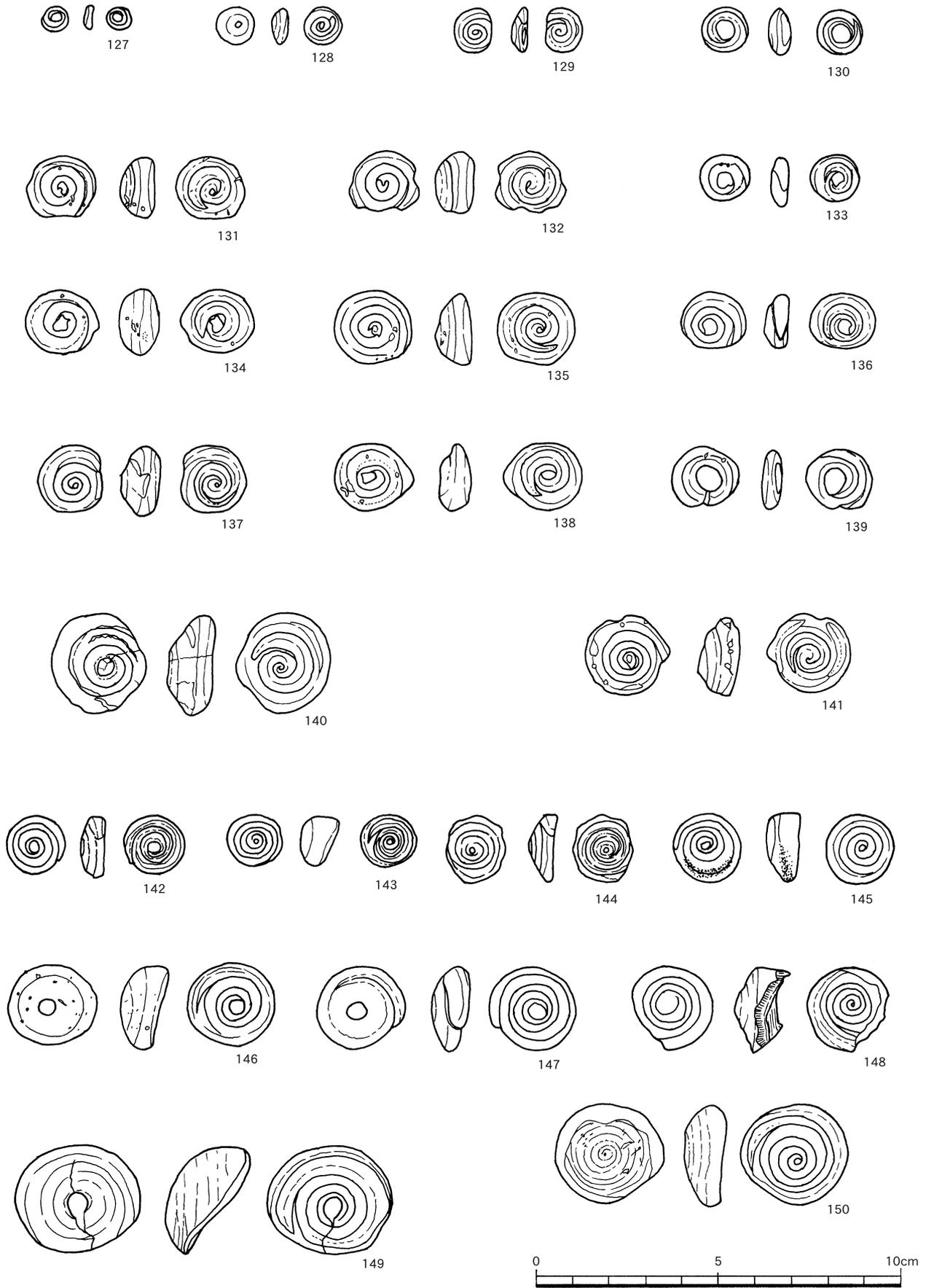
巻貝製品（第22図151～156）

151～156は、マクラガイ類やイモガイ類を素材とするものである。

これも貝玉同様に人工品であるのか海岸に打ち上



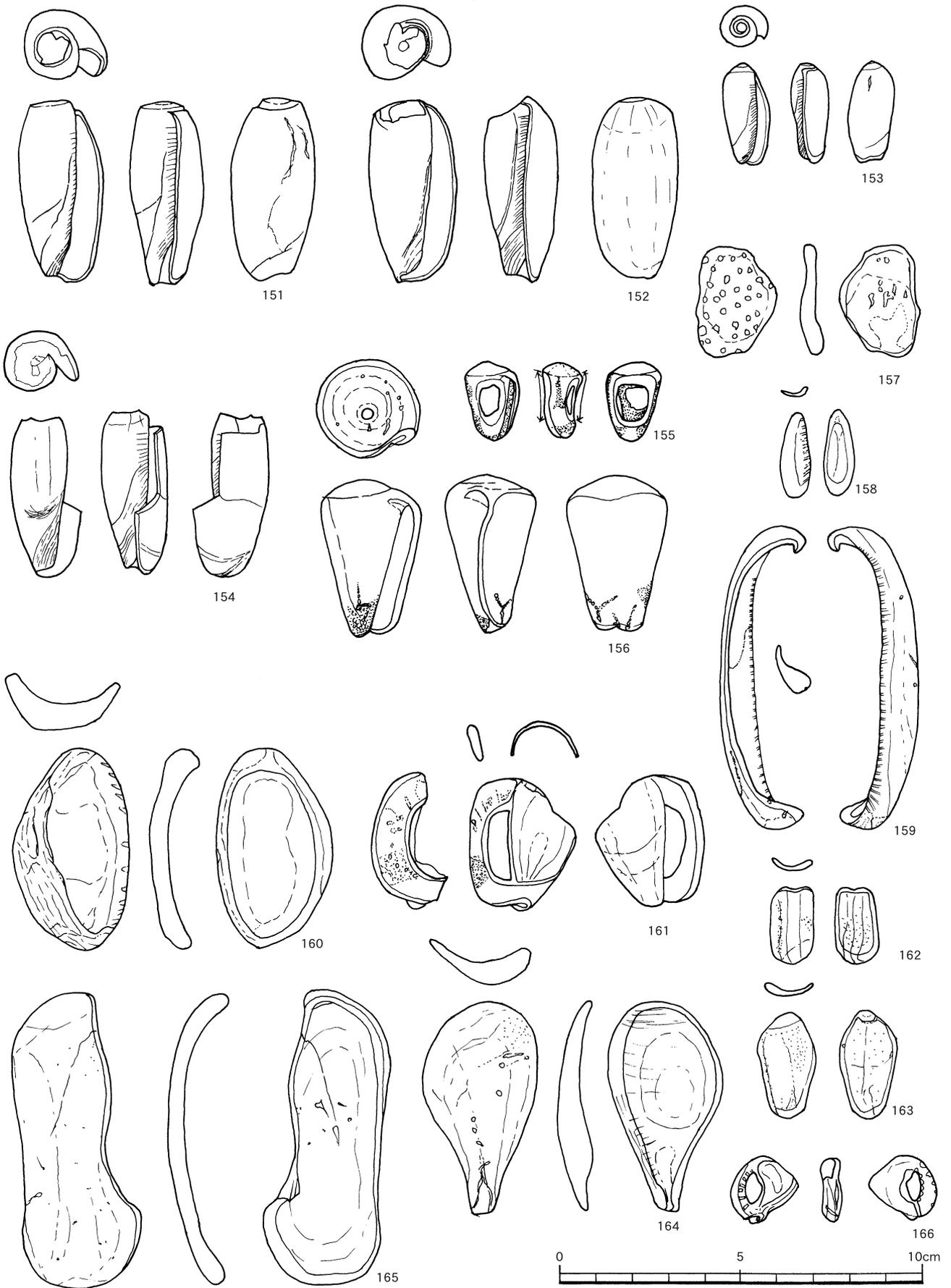
第20図 第2文化層出土ヤコウガイ螺蓋製貝斧実測図



第21図 第2文化層出土貝玉実測図

表10 第2文化層出土貝玉製品観察表

挿図 番号	遺物 番号	取上	層位	貝種	高 cm	幅 cm	厚 cm	孔	孔径 cm	摩耗	備考
21	127	694		マガキガイ	0.7	0.75	0.25	有	0.25	貝内部以外全面	孔内側摩耗
	128	694		マガキガイ	1	1	0.35	有	0.15	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	129			マガキガイ	1	1.2	0.35	有	0.2	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	130	893		マガキガイ	1.25	1.25	0.5	有	0.55	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	131	1198		マガキガイ	1.95	1.7	1	無?		貝内部以外全面	孔?小石により不明
	132	656		マガキガイ	1.7	1.9	1	無?		貝内部以外全面	孔?小石により不明
	133	712		マガキガイ	1.3	1.35	0.45	有	0.4	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	134	1197		マガキガイ	1.95	1.7	0.85	有	0.5 (0.25)	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	135	103		マガキガイ	1.95	2.05	0.95	有?	0.4 (0.05)	貝内部以外全面	孔?小石により不明
	136	655		マガキガイ	1.6	1.8	0.6	有	0.45	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	137			マガキガイ	1.8	1.75	1	無		貝内部以外全面	
	138	92		マガキガイ	1.85	2.05	0.9	有	0.6 (0.3)	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	139	733		マガキガイ	1.5	1.75	0.4	有	0.7	全面	孔内側摩耗
	140	1217		マガキガイ	2.65	2.5	1.3	無?	0.5	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	141	1315		マガキガイ	2.1	2.3	1.15	有	0.5 (0.25)	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	142	1178		イモガイ類	1.6	1.7	0.6	有	0.3	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	143			イモガイ類	1.3	1.5	1.1	有	0.08	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	144	440		イモガイ類	1.8	1.6	0.6	有	0.08	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	145	314		イモガイ類	1.8	1.75	1.05	有	0.1	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	146	558		イモガイ類	2.3	2.2	1.25	有	0.45	貝内部以外全面	孔内側小石により不明
147	1081		イモガイ類	2.3	2.3	0.9	有	0.5	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし	
148	1217		イモガイ類	2.25	2.1	1.5	無		摩耗少ない		
149	854		イモガイ類	2.6	3.1	2.15	有	0.55	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし	
150	878		イモガイ類	2.6	2.8	1.2	無		全面		
不掲載	-	424		イモガイ類	1.7	1.9	1.6	有	0.2	摩耗少ない	成形過程?玉の形状せず
	-			マガキガイ	1.45	1.9	0.75	無		貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	1133		マガキガイ	1.5	1.5	0.55	有	0.1	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	1185		マガキガイ	1.5	2	0.7	有	0.4	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	1217		マガキガイ	1.7	1.7	0.8	有	0.1	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	572		マガキガイ	2.1	1.95	0.8	無?	0.35	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	1067		マガキガイ	1.6	1.5	0.6	有	0.6	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	959		マガキガイ	1.9	1.7	0.8	有	0.7 (0.25)	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	420		マガキガイ	1.65	1.85	0.7	有	0.4	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	660		マガキガイ	1.5	1.8	0.6	有	0.5	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	861		マガキガイ	1.6	1.45	0.75	有	0.1	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-			マガキガイ	1.8	1.75	0.9	有	0.3	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	1024		マガキガイ	2.1	2	0.95	有	0.65	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	1040		マガキガイ	1.85	1.65	0.7	有	0.25	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	312		マガキガイ	1.5	1.3	0.7	有	0.15	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	760		マガキガイ	1.8	1.7	0.9	有	0.2	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	1288		マガキガイ	1.85	1.9	1	有	0.15	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	403		マガキガイ	1.7	1.6	0.5	有	0.4	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-	1339		マガキガイ	1.3	1.35	0.5	有	0.3	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-			マガキガイ	2.1	1.6	0.8	有	0.7	風化進む	風化進む
	-			マガキガイ	1.5	1.85	0.45	有	0.45	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-			マガキガイ	1.8	1.6	0.8	有	0.4 (0.05)	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
	-			マガキガイ	1.7	破損	破損	有	破損	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし
-			マガキガイ	破損	破損	破損	破損	破損	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし	
-	402		マガキガイ	破損	破損	破損	有	破損	貝内部以外全面	孔内側摩耗なし	



第22図 第2文化層出土巻貝製品及び用途不明品実測図

げられた死貝を利用したものであるのか不明なものである。

151～154, 156の殻頂部は、割れているか孔があるかし、ここから水管溝が見え、155は、小型のイモガイ類の体層の前後に孔があき、内部が見えているものである。孔付近は特によく磨られている。

用途不明品（第22図157～166）

157～166は、用途不明のものである。これも人工品であるのか海岸に打ち上げられた死貝を利用したものであるのか不明なものである。

157は、サンゴが摩耗した（を摩耗させた）ものである。このほか4点出土した。

158, 159は、タカラガイ類を摩耗した（を摩耗させた）ものである。大小様々なものが16点出土した。全体が磨れているが貝内面はさほど磨れていない。

161は、マガキガイの体層に大きな溝があくもの

である。破損していないか所はよく磨れており、孔の周縁もよく磨れている。この1点のみの出土である。

162, 163は、イモガイ類もしくはマクラガイ類を縦に割り、短冊状にし、全面を研磨した（ように見える）ものである。周縁はよく磨れているが外面、内面はあまり磨れていない。このほか11点出土した。

160, 164, 165は、貝種不明のもので、全体がよく磨られている。160, 165は体層の部分である。164は、大型の巻貝の水管溝の部分であり、匙のようなものにも思えるが貝の上下で図化した。

166は、ピワガイ科、フジツガイ科等の殻口部分である。貝の内面はあまり磨れていないがその他はよく磨れており、螺肋もよく磨れている。このほか数点の出土があった。

表11 第2文化層出土巻貝製品及び用途不明品観察表

挿 図	遺物 番号	取上	層	高 cm	幅 cm	厚 cm	備考	挿 図	遺物 番号	取上	層	高 cm	幅 cm	厚 cm	備考		
22	151	579		5.1	2.3	1.35	殻頂摩耗, 孔	22	159	796		8.5	1.4(2.2)	1.1	貝表面摩耗		
	152	399		4.9	2.3	1.3	"		160				5.5	3.0	1.4	"	
	153			2.6	1.2	0.9	"		161	667				3.4	2.3	1.4	" , 孔
	154	1315		4.3	2.0	1.5	"		162					2.1	1.2	0.3	全体摩耗
	155			2.2	1.5	1.2	全体摩耗, 孔		163	693				2.8	1.6	0.5	"
	156			4.3	2.2	2.4	殻頂摩耗, 孔		164	526				5.9	3.1	1.5	貝表面摩耗
	157	764		3.0	2.1	0.8	全体摩耗		165	715				8.2	3.5	1.8	全体摩耗
	158	736		2.9	0.8	0.4	貝表面摩耗		166					1.3	1.6	0.3	貝表面摩耗

有孔貝製品（第23図167～179）

有孔貝製品として報告したのものには、巻き貝製のものと二枚貝製のものがある。二枚貝のもの多くはこれまで貝錘などとして報告があるものである。

167は、ソメワケグリを素材とする。

孔は、中央よりも殻頂部よりにあけられている。

口径は0.5～0.7cmと小さく、貝の大きさによるようである。

内面以外の全体に摩耗が見られ、主歯も若干痕跡を残すのみであるが、全体に風化が進んでいる。

168, 169は、ホソスジイナミガイを素材とする。孔は、中央部よりも殻頂部よりにあけられ、孔径は0.6～1.7cmである。

共に円形の形状になるまで腹縁がよく磨れており、主歯もよく残っている。更に168は、閉殻筋痕・套線もよく残す。

170～177は、メンガイ類、メンガイモドキ、ホウオウガイを素材とする。

孔は、殻頂よりに開けられ孔径は、1.0～2.4cmである。171が全体に風化が進んでいるが、その他は閉殻筋痕・套線・主歯もよく残っている。

178は、タケノコガイを素材とする。殻口付近に摩耗が見られ、ヤドカリの影響も考えられるものであるが、図化した。

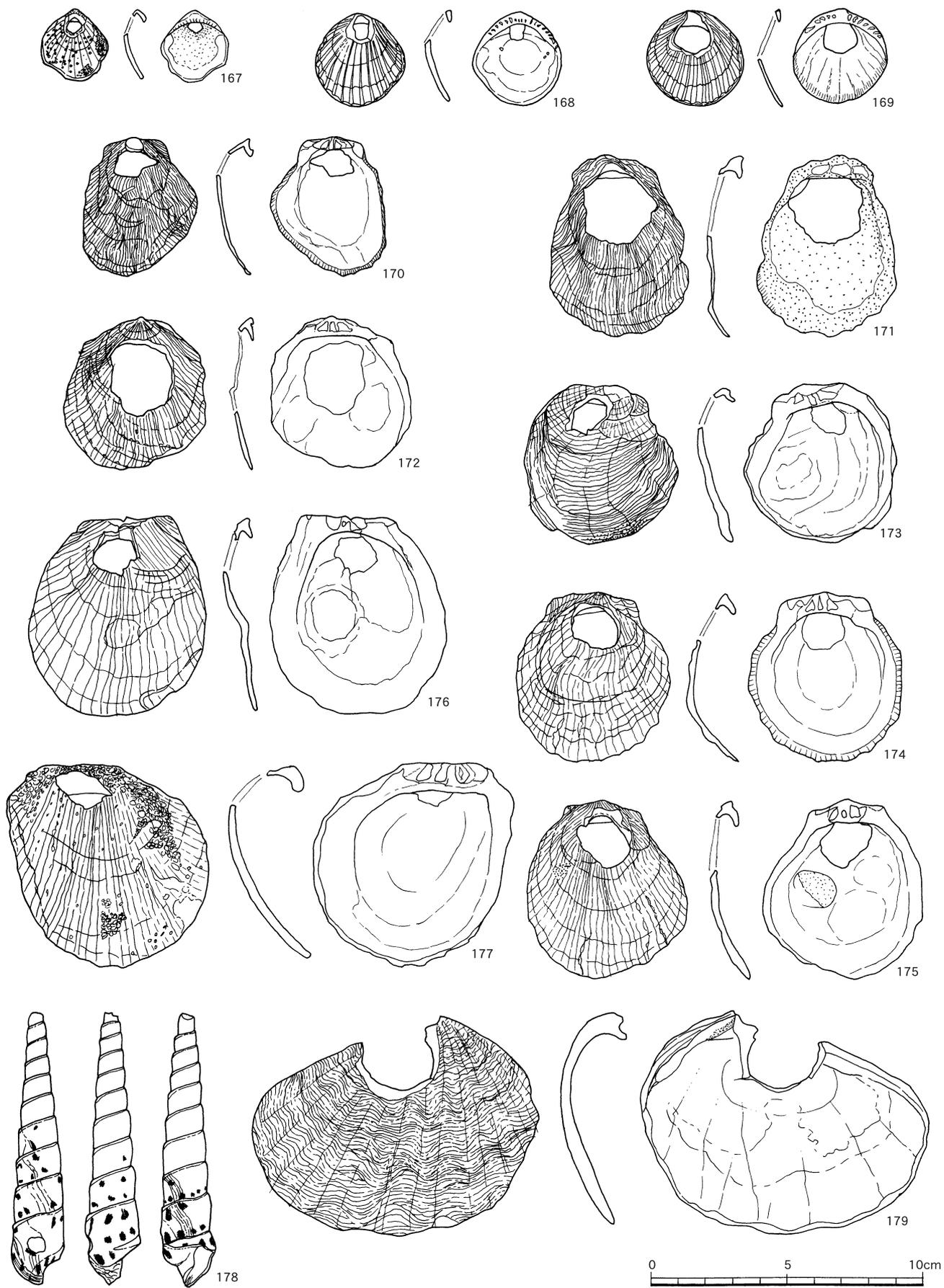
179は、ヒメシャコガイを素材とする。破損しており正確な孔径は測れない。

孔付近の放射肋には摩耗が見られ、閉殻筋痕・套線・主歯はよく残っている。

未製品

35頁写真ハ～メは、未製品であると思われる。殻頂部を先ず打ち欠き、製品を作るに適した破片を作出しようとしたと思われる。

マガキガイや中・小型のイモガイ類と大型のイモガイ類の割り方に共通点があり、貝符や のものなどを作る際の共通の技法であった可能性もある。



第23図 第2文化層出土有孔貝製品実測図

タカラガイ

35頁写真のR, Sは、タカラ貝の体層に孔をあけたものである。孔があけられた部分がよく磨られているものと、割っただけのものがある。また素材としたタカラガイ類は多くの種類を使用している。12点の出土があった。加工品であるか食するために孔を空けたのか不明である。大小とわず多くの出土があった。

螺塔・体層を摩滅させるもの

35頁写真のア~ケは小型のイモガイ類、イトマキボラ科、アッカキガイ科のレイシダマシ、レイシガイ類、チョウセンサザ工等の螺塔・体層・軸襞や殻口に摩耗が確認できるものがある。

このほか、イトマキボラ科の貝に穿孔したもののやジュセイラ、バンザイラ、ククリボラ、ミツカドボラ、サツマボラなどのピワガイ科、フジツガイ科の殻口のみのものも出土した。

腹縁・殻頂のすれた二枚貝

二枚貝の腹縁や殻頂が摩耗しているものが出土している（図版16右下）。これらは加工品であるのか、死貝であるのか、使用痕であるのか不明なものである。

また、貝皿と思われるシャコガイも1点出土している（35頁写真ユ）。腹縁は、貝本来の波状がなくなり閉殻筋痕・套線なども顕著でないためこれも死貝利用（死貝）である可能性がある。

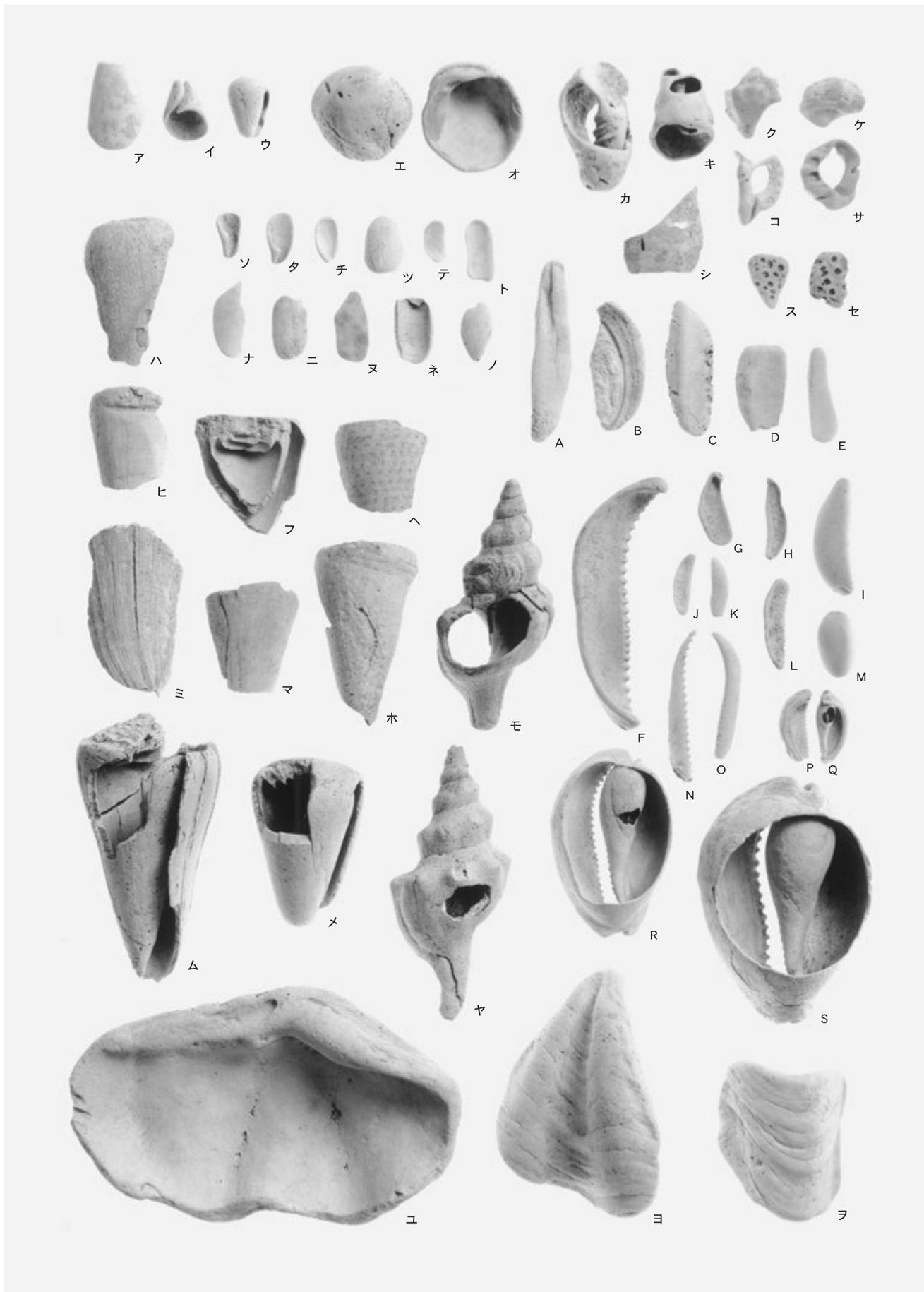
食料残滓

その他、食料残滓の貝としては、マガキガイが圧倒的に多く、その他は奄美・沖縄の遺跡に見られるように多くの貝種が見られた。

また、食料残滓としてはマガキガイが圧倒的に多いが巻貝製品としてはマガキガイの量は他を凌駕していないことが注目される。

表12 第2文化層出土有孔貝製品観察表

挿図	遺物番号	取上	層	高 cm	幅 cm	厚 cm	孔径 (タテ)cm	孔径 (ヨコ)cm	穿孔	腹縁	殻頂	放射肋	備考
23	167	647		2.5	2.4	0.8	0.7	0.5	内外	摩耗	-	-	主歯摩耗
	168	600		3.2	3.2	0.9	1.0	0.6	内外	摩耗	摩耗	摩耗	主歯摩耗(小)
	169	492		3.5	3.6	0.8	1.7	1.3	内外	摩耗	摩耗	摩耗	主歯摩耗(小)
	170	1089		4.9	4.1	1.2	1.1	1.6	内外	-	-	-	-
	171	453		6.5	4.9	1.7	2.7	2.7	内外	-	-	-	-
	172	1059		4.5	5.1	1.5	2.6	2.1	内外	摩耗	摩耗		主歯摩耗(小)
	173	477		5.3	5.5	1.8	1.4	0.9	内外	摩耗	摩耗	摩耗	主歯摩耗(小)
	174	364		6.0	5.4	1.9	1.0	1.2	内外	-	-	-	主歯摩耗(小)
	175	480		6.4	5.6	1.6	1.9	1.8	内外	摩耗	摩耗	-	主歯摩耗(小)
	176	790		7.3	6.4	1.4	0.9	1.7	内外	摩耗	摩耗	摩耗	主歯摩耗(小)
	177	1094		7.5	7.0	3.1	2.0	1.6	内外	摩耗	-	摩耗	主歯摩耗(小)
	178	965		9.8	1.9	1.9	0.7	0.7	外内	摩耗	破損	摩耗	ヤドカリの影響?
179	1117		10.8	8.0	3.0	-	2.4	内外	摩耗	破損	摩耗	孔周辺摩耗	
-	-	784		(5.5)	破損	1.7	破損	破損	内外	摩耗	摩耗	摩耗	主歯摩耗
-	-	279		破損	破損	破損	破損	破損	内外	摩耗	破損	摩耗	主歯摩耗(小)



第V章 自然科学分析

宇検村屋鈍遺跡出土の動物遺体

西中川 駿

1. はじめに

動物遺体の出土した奄美諸島の遺跡は、笠利町のサウチ遺跡や宇宿貝塚などの縄文、弥生遺跡を初めとして、これまで27ヶ所から報告されている。検出された哺乳類はコウモリ、アマミノクロウサギ、ネズミ、イヌ、イノシシ、イルカ、クジラおよびジュゴンなどであり、県本土に比べて極めて少ない動物種である。その他、爬虫類はウミガメ、魚類はタイ類が多く、ハリセンボン、ハタ、ベラ類などで出土量も多い。

今回、調査を依頼された屋鈍遺跡は大島郡宇検村屋鈍にあり、県道曾津高崎線改築工事のため、鹿児島県教育委員会が主体者となり、県立埋蔵文化財センターの指導の下に、平成19年1月15日から3月9日まで発掘調査を行い、弥生期から古代の遺物が出土した遺跡である。動物遺体は埋蔵文化財センターで説明を受けた後、当方へ持ち込まれたものである。ここでは同定可能な資料について、その概要を報告する。なお、魚類の同定には現生資料と金子や山崎らの報告書を参考にした。

2. 出土動物種と出土量

本遺跡から出土した動物遺体は、哺乳類、爬虫類および魚類であり、出土層別、動物別出土量は表1に示した。同定された総重量は368.7gで、哺乳類が192.7gで最も多く、全体の52.3%を占め、次いで魚類が130.2g、爬虫類が45.8gである。出土時代は、Ⅰ～Ⅴ層は古代（10世紀相当）で、Ⅵ層は弥生時代から古墳時代と考えられている。層別出土量はⅥ層が最も多く、全体の42.6%を占め、次いでⅤ層、Ⅳ層、Ⅲ層の順である。哺乳類の遺体はイノシシ、ウシのもので、イノシシは34骨片（104.0g）で、ウシは僅か2点（88.7g）である。爬虫類はアカウミガメと思われる背、腹甲の9点（45.8g）であり、魚類はブダイ科、ハリセンボン科、ベラ科およびフエフキダイ科のもの39点の骨片が出土している。

3. 出土層別、出土骨の概要

1) Ⅰ層（図版1の1～5, 18, 22～25参照）

Ⅰ層からはイノシシ、ウシ、ウミガメおよび魚類など33点の骨片が出土している。イノシシは幼獣の臼歯を有する左上顎骨、右上腕骨や右尺骨片、成獣の右下顎骨、右犬歯、右上腕骨、左大腿骨、左脛骨片など15点であり、大きさは現生のリュウキュウイノシシとほぼ同じ大きさである。ウシは左脛骨の遠位部で計測不能であるが、現生の在来牛程度の大き

さである。ウミガメは腹甲のみ2点、魚類はブダイ科の前上顎骨、歯骨、ハリセンボン科の上、下顎骨、ベラ科の下咽頭骨など15点が出土している。

2) Ⅱ層（図版1の6～8, 26～31参照）

Ⅱ層からはイノシシ、ウミガメおよび魚類など19点の骨片が出土している。イノシシは左肩甲骨、左右上腕骨、右尺骨、右脛骨、左右踵骨など8点であり、いずれも現生のリュウキュウイノシシ大の大きさである。魚類はブダイ科の左右の前上顎骨および歯骨、ハリセンボン科の上、下顎骨、ベラ科の右歯骨、下咽頭骨など11点が出土している。

3) Ⅲ層（図版1の9～14, 19, 20, 32～38参照）

Ⅲ層からはイノシシ、ウシ、ウミガメおよび魚類など20点の骨片が出土している。イノシシは右上顎第三後臼歯、左上腕骨、右橈骨、右寛骨、左大腿骨など7点がみられ、大きさはⅡ層出土のイノシシと同じ大きさである。ウシは右距骨1点の出土で、その内側最大長と遠位端幅は61.18×43.38mmで、筆者らの方法で体高を推定すると、121.3cmであり、これは口之島野生化牛の雄とほぼ同じの大きさである。ウミガメは左上腕骨、腹甲の2点、魚類はブダイ科の左右前上顎骨、左歯骨、ハリセンボン科の下顎骨、ベラ科の下咽頭骨、フエフキダイ科の左歯骨、ベラ科の下咽頭骨など10点が出土している。ブダイ科の中にはナンヨウブダイ、ベラ科にはカンムリベラ、フエフキダイ科にはヨコシマクロダイなどが含まれている。

4) Ⅳ層（図版1の15～17, 21, 39～41参照）

Ⅳ層からはイノシシ、ウミガメ、魚類など12点の骨片が出土している。イノシシは左右の肩甲骨、右第三中足骨、左踵骨の4点であり、大きさはリュウキュウイノシシと同じである。ウミガメは背、腹甲の5点、魚類はブダイ科の左歯骨、右上咽頭骨、ハリセンボン科の下顎骨の3点が出土している。

4. 考察

奄美諸島の動物遺体の出土例については、本島からはサウチ遺跡、宇宿貝塚、長浜金久遺跡、あやまる第2貝塚、泉川遺跡、ウフタ遺跡などから報告されており、また、喜界島からは先山遺跡、徳之島からは面縄貝塚、犬田布貝塚や塔原遺跡、沖永良部島からは中甫洞穴、神野貝塚および住吉貝塚、与論島からは上城遺跡など27ヶ所から報告されている。いずれの遺跡においても出土遺

物として魚介類とイノシシが主体をなしている。また、遺跡によってはイヌ、アマミノクロウサギ、ネズミ、イルカ、クジラ、ジュゴンなどが検出されている。

本遺跡からは出土した動物遺体は、総重量368.7gと極めて少ない出土量であるが、層～層から弥生から古代にわたってみられている。出土した哺乳類遺体は、イノシシとウシのもので、爬虫類はウミガメ、魚類はブダイ科、ハリセンボン科、ペラ科などを中心とした遺体がみられた。

イノシシの遺体は犬歯、切歯、肩甲骨、上腕骨、大腿骨など34点が出土しているが、完形骨はなく計測できなかったが、形態や大きさは県本土のイノシシとは異なり、奄美諸島の他の遺跡と同様に現生のリュウキュウイノシシによく似ており、大きさもほぼ同じである。また、本遺跡からは幼獣の上顎骨や臼歯、踵骨がみられた。これらはたまたま幼獣を狩猟されたのか、妊娠末期の胎児なのかよくわからないが、飼育していたとは考えがたい。

また、長骨は割断されていることから、骨髓食のあったことが考えられる。

ウシの出土例について、これまで奄美からは宇宿貝塚や長浜金久遺跡からの報告があるが、これらは時代が新しく、もし本遺跡のものが当時のものであれば、奄美では最も古い遺体であり興味深い。また、出土した距骨の計測値から体高を推定すると、121.3cmであり、これは日本在来牛の口之島野生化牛の雄と同じ大きさである。

一方、出土の多い魚類についてみると、種の同定までは出来ていないが、ブダイ科ではナンヨウブダイの前上顎骨、歯骨などが多く、ハリセンボン科ではハリセンボンの上顎、下顎骨、ペラ科では咽頭骨などが多く検出されている。また、珍しいものとしてカンムリペラの前上顎骨、歯骨やヨコシマクロダイの歯骨などが出土している。

以上のことから、屋鈍遺跡を遺した人々は、海に囲まれた奄美では陸生の哺乳類の生息が少ないために、動物性蛋白源としてイノシシの他に魚介類に依存していたことが想像される。

5. まとめ

大島郡宇検村屋鈍遺跡から出土した動物遺体（弥生～古代）について調査した。

1. 出土した動物遺体は、哺乳類、爬虫類および魚類であり、総重量368.7gで、哺乳類が192.7gで最も多く、次いで魚類の130.2g、爬虫類は45.8gである。
2. 哺乳類遺体は、イノシシの上顎骨や四肢骨など34点で、ウシは脛骨と距骨の2点が検出されている。出土骨の形状はイノシシでは現生のリュウキュウイノシシに類似して小型であり、ウシの推定体高は

121.3cmで、これは口之島野生化牛の雄とほぼ同じ大きさである。

3. 爬虫類はウミガメの上腕骨、背、腹甲など9点が出土している。魚類はブダイ科、ハリセンボン科、ペラ科などの前上顎骨、歯骨および上、下の顎骨や咽頭骨などが検出されている。
4. 屋鈍遺跡を遺した人々は、動物蛋白源としてイノシシを狩猟し、魚介類を採集して食していたことが想像される。

参考文献

1. Driesch, A: A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Pub. Peabody Museum, Harvard Univ., USA, pp. 1-137 (1976)
2. 伊仙町教育委員会: 犬田布貝塚, pp. 74-81 (1984)
3. 今泉吉典: 原色日本哺乳類図鑑. 保育社, 東京, pp. 1-196 (1979)
4. 鹿児島県教育委員会: 鹿児島県市町村別遺跡地名表. pp. 1-175 (1977)
5. 笠利町教育委員会: サウチ遺跡, pp. 65-66 (1978)
6. 笠利町教育委員会: 宇宿貝塚, pp. 95-96 (1979)
7. 笠利町教育委員会: あやまる第2貝塚, pp. 62-65 (1984)
8. 金子浩昌: 首里城書院・鎖之間地区出土の脊椎動物遺体, 沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書, 第28集, 17-21 (2005)
9. 金子浩昌: 天界寺跡出土の脊椎動物遺体, 沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書, 第2集, 1-23 (2001)
10. 甲元真之編: 環東中国沿岸地域の先史文化, 2, 70-151 (1999)
11. 西中川 駿他: 九州の縄文遺跡出土の哺乳類遺体, 鹿児島考古, 38, 53-64 (2004)
12. 西中川 駿他: 鹿児島の縄文, 弥生遺跡出土の自然遺物特に動物遺体について, 鹿児島考古, 33, 1-13 (1999)
13. 西中川 駿: 神野貝塚出土の自然遺物 特に出土動物骨について, 鹿大考古, 2, 45-50 (1984)
14. 西中川 駿他: 中甫洞穴出土の動物骨, 鹿児島考古, 17, 41-44 (1983)
15. 龍郷町教育委員会; ウフタ 遺跡, 龍郷町教育委員会埋蔵文化財調査報告書, 2, 93-98 (2002)
16. 山崎京美・上野輝彌: 硬骨魚類の顎と歯, 藤原ナチュラヒストリ振興財団, 第15回学術研究助成(魚類)成果報告書, pp. 1-323, (2008)

(鹿児島大学名誉教授)

表1. 屋鈍遺跡の動物別出土量

動物 層	イ ノ シ シ	ウ シ	爬 虫 類	魚 類	層 別 出 土 量
	30.5 15	42.5 1	11.5 2	72.8 15	157.3 33
	22.3 8			25.8 11	48.1 19
V	35.4 7	46.2 1	16.4 2	27.4 10	125.4 20
	15.6 4		17.9 5	4.2 3	37.9 12
動物別 出土量	104 34	88.7 2	45.8 9	130.2 39	368.7 84

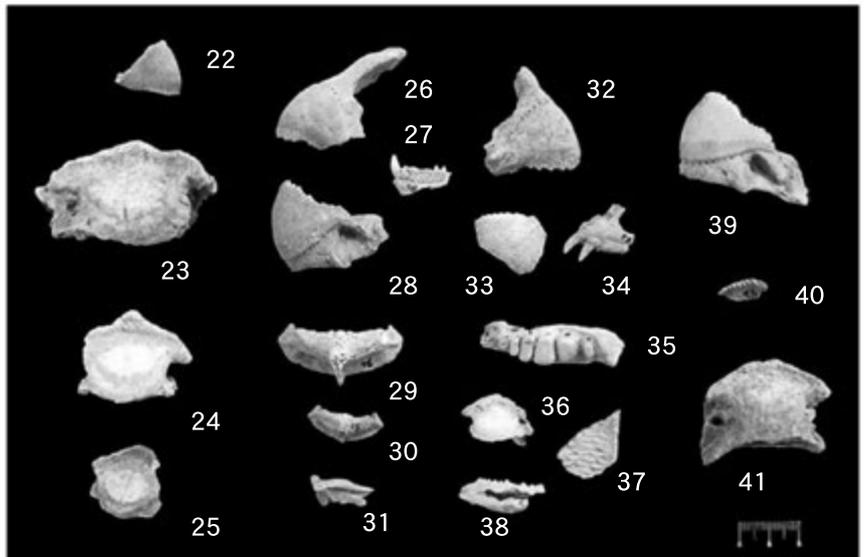
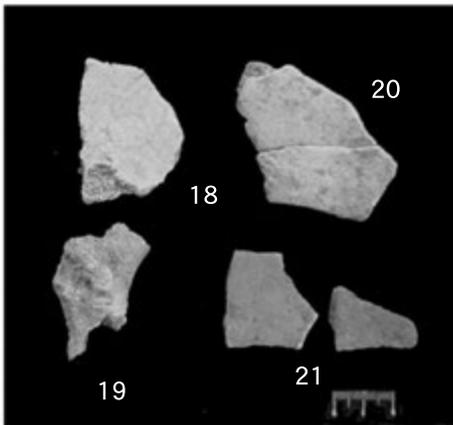
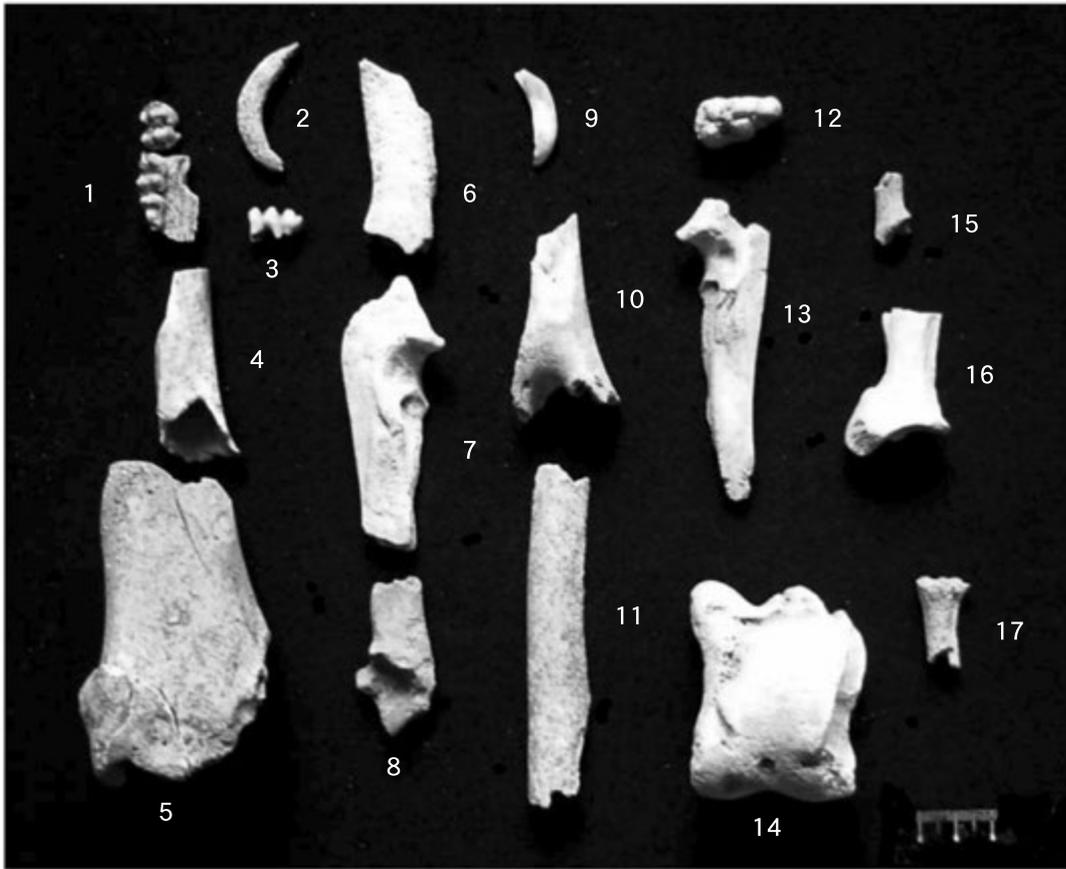
上段：重量（g） 下段：骨片数

図版の説明

層：1～5, 18, 22～25 層：6～8, 26～31 V層：
9～14, 19, 20, 32～38 層：15～17, 21, 39～41

1～4, 6～13, 15～17：イノシシ 5, 14：ウシ 18～
21：ウミガメ 22, 26, 28, 32, 33, 37, 39, 40：ブダイ科
23～25, 36, 41：ハリセンボン科 29, 30, 31：ペラ科
27, 34：カンムリベラ 35：フエフキダイ科（ヨコシマクロ
ダイ）

1 左上顎骨（乳歯） 2 右下顎犬歯 3 左下顎乳印歯 4
左大腿骨 5 左脛骨 6 右上腕骨 7 右尺骨 8 右踵骨
9 右上顎第一切歯 10 左上腕骨 11 左大腿骨 12 右上顎
第三後臼歯 13 左尺骨 14 右距骨 15 左踵骨 16 左肩甲
骨 17 第四中足骨 18 背甲 19 右上腕骨 20 21 腹甲
22 前上顎骨 23 上顎骨 24 下顎骨 25 上顎骨 26 左前
上顎骨 27 左歯骨 28 左歯骨 29 30 31 下咽頭骨 32
右上顎骨 33 左歯骨 34 左前上顎骨 35 左歯骨 36 下顎
骨 37 38 下咽頭骨 39 左歯骨 40 上咽頭骨 41 下顎骨



第Ⅵ章 まとめ

遺跡は、標高2 M程の砂丘地にあり、今回の発掘調査では、地層を ～ 層に分け調査を行った。

その結果、遺物の出土状況から第1文化層(層)と第2文化層(・ 層)に分けられ、 層は白砂層で遺物の出土は少ないが、第1文化層と第2文化層の両方の遺物と接合するものや共通する遺物の出土が見られた。

土器については、 層が中間的な様相で第1文化層と第2文化層の両方に通ぶるものがある。特に、第2文化層に特徴的な底部の形状や葉痕の残る底部の 層における出土や、刻目突帯の出土がそれである。それとは逆に第2文化層には、第1文化層的な遺物の出土は、見られなかった。

石器については、第1文化層の出土量が少なく第2文化層の方が多かった。

貝製品については、第1文化層(層)と第2文化層(層, 層, 層)との間には、大きな隔りがある。まず、出土量が違う。第2文化層の膨大な出土量に比べ、第1文化層は、図化できるものは無かった。共通することは珊瑚礁や潮間帯に生息する貝の食糧残滓が出土することぐらいである。

第2文化層の貝種は豊富で、貝製品も多く、 層から 層にかけて出土するものと 層で出土するものには出土量の差こそあれ、共通点が多い。

また、奄美大島の他の遺跡と比したとき、「マツノト遺跡」によく似た様相を見せる。

このような状況であったため、 層出土の遺物を土器については 層を分岐し、第1文化層のところで取り扱い、貝製品については第2文化層のところで取り扱った。

第1節 土器

(1) 第1文化層

多くの土器の出土があったが、甕形土器口縁部の形状を元に5類に分類した。無紋の土器と沈線などを施す土器があるが、 類よりも 類の方が装飾性に富むようである。また 類, 類は出土量が少なく小片が多いため、装飾性についてはわからない。

これらの土器は、九州島の弥生土器と共通するような形態である。大きく形態が異なるためこの5類の時期差を考えたが、どれも 層中よりの出土であり、第1文化層の 類から 類, 更に 類と変化していき、 類土器が 類に平行するのかそれとも単独の時期を形成するのか本遺跡の出土状況では積極的なことはいえないと考える。

他遺跡と比較・検討を行うことによって導き出せるかもしれないが、まだ結論づけるに至っていない。

しかし、 a, b類のような口縁部が強く屈曲す

るものについては、遠くは南さつま市の万之瀬川でも発見されていることが注目され、独立した奄美大島独自の形態のようである。

各類とも口縁部から底部まで接合できたものは皆無であり、全体の形状については不明である。

第1文化層の甕形土器の底部は、低い脚台上を呈し、底径が4 cm内外と小さいものと底径が6 cmを超え、平底になるものに分けられる。平底のものの中には、底部に葉痕が残るものが見られた。また、 層中の底部も底径が大きく底部に葉痕が残るものが見られた。平底の底部に葉痕がつくものは、第2文化層に特徴的なものであるため、低い脚台上の底部から平底への変遷が想定できる。

(2) 第2文化層

第2文化層からの土器の出土は、小片が多く接合し、図化できるものが少なかったが、これも口縁部形態を元に 類に分類した。壺形土器については、明確に壺形土器と判断できるものは2点のみと極端に少なかった。この傾向は、他の奄美大島の遺跡と同じようである。

本文中において 類～ 類としたものは中山清美氏が器形 ～ タイプとしたものの中に収まるものと思われる。

屋鈍遺跡 類は、突帯も模様も施されないもの、 類土器は、中山氏の器形 タイプ「直線の文様～曲線の文様で絡み合う」ものと思われる。 類土器は、中山氏の器形 タイプ・ タイプに属するものと思われる。その他口縁部を少量図化したが、中山氏の器形 タイプ～器形 タイプがある。底部形態については、平底あるいはくびれ平底ですべて葉痕が付くものである。

第2節 土師器・須恵器・陶器・鉄器

1 土師器・須恵器・陶器

第2文化層中からは、第1節に述べた兼久式土器と共に古代の土師器壺・須恵器壺・陶器壺が出土した。

土師器壺・須恵器壺には、同一個体のものが 層中より少量出土したという状況である。出土範囲も広くなく少量ながらまとまって出土している。

これまで奄美大島本島における古代の土師器、須恵器の出土例は、奄美市長浜金久遺跡(旧笠利町)、マツノト遺跡(旧笠利町)、フワガネク遺跡(旧名瀬市)、龍郷町手広遺跡など奄美大島本島北部の太平洋側に限られていたが、今回の発掘調査において、本島南部の東シナ海側で初めて土師器、須恵器が出土した。これらは古代において奄美大島本島南部の東シナ海側にも北部の太平洋

側と同様の遺跡が存在する可能性を示すものである。

陶器の壺は、同一個体のものが出土していると思われるという点では土師器壺・須恵器壺と同じであるが、両者と出土域を重ねながらもより広範囲から出土し、また層序も層から層にかけて出土している点が異なる。

また、陶器は日本国産のものではなく中国や東南アジア産のものと考えられ、口縁部の形状などを見ると東南アジア特にクメール陶器によく似ているように思える。しかし、原産地側の10世紀・11世紀頃の状況が詳しく分かっておらず、筆者が東南アジアの陶器類について浅学であること、屋鈍遺跡出土例が口縁部から底部まで接合し、全体の形状や器高などを把握できたものでないことなどにより、形から積極的に年代や産地について述べられない。そのため、古代の土師器壺・須恵器壺と同層から下の層で出土し、なお今回の調査地点からは、カムイ焼や青磁、白磁等の出土が皆無であるという出土状況から陶器の年代については古代が推定できるが、中世にあたる層はすでに耕作等により消滅していること、実物や写真等を見て頂いた方々に10世紀～11世紀のクメール陶器ではないかという意見と、そうではない意見があったことを記しておく。

いずれにせよ奄美大島本島において古代の陶器の出土例は皆無であり今回の調査で出土したものが初の出土例となる。

また、1点のみの出土であるためなぜ屋鈍遺跡から出土したのかも不明である。

2 鉄器

第2文化層中からは、第1節に述べた兼久式土器と共に古代のものと思われる鉄器も出土している。

火打金と思われるもの以外は、層からの出土であり古墳時代の可能性もある。

108は、棒状の両端から鍵爪のような突起が出ている。錆が進行し、非常にもろく、取り上げ時点では、棒状の錆の激しい鉄製品という感じであったが、県立埋蔵文化財センターにおいてレントゲン写真を撮影したところ上記のような形状であることがわかった。

これまで奄美大島をはじめとする南西諸島においてこのような形状の鉄製品は出土しておらず、用途など不明であるが、鹿児島県内、国内での鉄製品の出土例を見ると火打金によく似ている。

これが火打金であると仮定したとき、鹿児島県内において火打金の出土は、中世以降のものがほとんどであり、古代のものと思われるものは薩摩川内市大島遺跡の出土例のみである（中山清美氏教示）なか異色である。

屋鈍遺跡のものの出土層位は先述したが層である。屋鈍遺跡の遺物の出土層は全て砂層ではあるが、火打金と思われるものが出土した層から古代の土師器壺・須恵器壺が出土していること、陶器の出土が層から層

にまたがっているなかカムイ焼・青磁・白磁等が出土しないことを考えると火打金と思われるものは1点のみの出土であるが層位・出土状況的には古代と思われる。

第3節 貝製品

出土した貝製品には、貝符、貝符未製品、ヤコウガイ製品、貝玉、巻貝製品、二枚貝に穿孔をした製品があった。このほか特筆されるものに墨で書かれた文字若しくは模様のある貝製品が出土した。

1 墨書貝製品

111は、層からの出土で古代のものと思われる。比較的大型のイモガイ類（ニシキミナシやミカドミナシ）の死貝を素材にしている。先に「貝を縦割りにし、器面全体をよく研磨してあるが、頂部には螺塔の痕跡が残る。また、左側面には鋭利な工具で施文された4条の沈線が施されている」と記したが、ニシキミナシやミカドミナシには殻口に筋を持つものがあり、沈線である可能性が高いものの自然のものである可能性もある。また、研磨したと思われるか所も死貝利用のため、人工であるか疑問も残る（木下尚子氏教示）

貝に残された墨書については文字であるか記号であるかは正確に判断できなかったが、上半にある墨書は、「宋」や「求」の字によく似ており、下半にある墨書と思われる部分は、非常に薄く貝の模様であるのか墨書であるのか判断しづらいものの「一」のように見える。

赤外線写真も上半の墨書は、鮮明に撮影できたが、下半の墨書と思われる部分は鮮明に撮影できなかった。

このような貝に墨で文字もしくは記号の書かれたものは奄美諸島初の出土である。

2 貝符

114はイモガイ類（アンボンクロザメ・クロフモドキか？）を素材に制作されており、貝の形状が器形によく反映されている。上部には溝を1条入れ、そこに孔を2孔穿いている。裏面には溝は入れられていないが、孔の裏面には「すれ」と思われる痕跡が見られ、裏面右側の孔のそばには貫通させていない孔が一つ穿たれる。正面には鋭利な工具を使用して沈線により模様を作出している。カタカナの「ヨ」とアルファベットの「E」を1本の「-」でつないだようなH字状の幅の広い帯を中央に配し、6つの空間を作出し、この空間一つ一つにも沈線を施している。表面に施された沈線は、清水貝塚出土の一群によく似ており、古墳時代のものであると思われる。このうち左右の4つの少単位は、広田遺跡上層出土の貝符の一群を連想させる。

裏面には沈線等の模様は施されてない。図上右側には制作時に貝の螺塔を割り取ったのち研磨した部分と思われる膨らみが残る。

3 貝符未製品

アンボンクロザメもしくはクロフモドキを素材にしている。調査最終日に崩壊しそうな壁面に見えている遺物を採取した際に出土したものであるため正確な層位は不明であるが、上記貝符の出土層位と比べると確実に上位に位置する。

まだ研磨されておらず、貝そのものの特徴がよく残っているが死貝が水磨されたものを使用している可能性もある（木下尚子氏教示）。また、 層から大型のイモガイ類の打ち割られた破片が出土しているが、どれも水磨を受けていると思われるものばかりであることもそれを裏付けていると思われる。

正面の図上左上には貝そのものの溝があることから、後溝の部位の体層を利用していることが分かる。また、その他のイモガイ類の破片もこの部位を割り取ることを目的としたようなものや大きさや部位がこの未製品とよく似ていながらも非常に薄い破片も見られた。

先述したが螺塔を割り取ったか所から幅を整える際に鋭利な工具で擦り切りを行い、溝を入れ、その後力を加えて切断し、割れ口を利用しながらも貝の高さと形状を揃えようと鋭利な工具で擦り切りを行うという工程が推測できた。

更に、出土層が異なるが、貝符裏面の形状と貝符未製品の裏面の形状から両者が同じ部位であることも推測される。

4 チョウセンサザエ・摩耗のある二枚貝

(1) チョウセンサザエ（写真図版16）

主に 層からの出土であるが一部 層からの出土も見られた。これらを摩耗の度合いから、 摩耗はあまり強くなく、体層の螺肋のみに摩耗が見られ、なお肋の形状を残すもの。 螺肋が潰れ下の真珠層が見えるほど摩耗しているもの。真珠層が円形に見える摩耗のもの、真珠層が輪状に見える摩耗のものに細分できる。 、 よりも摩耗が強く露出した真珠層が割れているものの3種類がある。はじめ、何かを磨るための道具ではないかと考えたが、摩耗が、殻口や螺塔、軸襷に及んでいるため、ヤドカリの影響によるものと判断した。（木下尚子氏教示）その他、巻き貝類には同様に殻口付近に磨痕を持つものが多く、これらも同様にヤドカリの影響であると考える。

(2) 摩耗のある二枚貝（写真図版16）

114は、フネガイ科の貝を素材に背面の貝本来の後側歯が消えるほどよく研磨し、7条の沈線を 型に配し、腹縁もよく研磨されているが、殻頂部から腹縁にかけては中央部のみが磨られているものであるのか、死貝であり、人工品ではないのか不明である。

その他にも研磨が行われていると思われるものの出土があった（写真図版16）。貝本来の後側歯が若干残

り、沈線は施されない。殻頂部から腹縁にかけても114同様に中央部のみが研磨されており、口縁については114ほど磨かれていない。その他、ハマグリ等の二枚貝の殻頂と腹縁の一部に摩耗が見られるものもあった。いずれも人工品であるのか不明であるが、これも死貝の持ち込みであるようである。

その他、貝玉については、全て死骸の利用の可能性が強く孔のあくものとあかないものがあった。全体の大きさに規則性はなく、また孔の大きさにも規則性がなかった。

巻貝製品として記載したものは、全て孔があき、有孔製品とした方が良かったのかもしれない。これも全て死貝の利用の可能性のあるものである。

用途不明品として第22図に掲載したもののうち161、166は、孔があることに意義があると思われるがこれも死貝の利用であり、また人工物もしくは遺物として掲載すべきか否か不明なものである。166についてはこのほかよく似たものの出土もあった（35頁写真）。

その他の用途不明品についても死貝の利用であり、また人工物もしくは遺物として掲載すべきか否か不明なものである。35頁の写真に代表的なものを掲載した。

このように、屋鈍遺跡の今回の発掘調査地点の出土した貝製品のうちヤコウガイを除く多くの貝製品や人工物であるか不明なものは、死貝を素材にしたものが多く、身を食した後に貝殻で製品を作るのではなく、海岸から拾ってきた貝で製品を作るという傾向が強いという結果を得た。

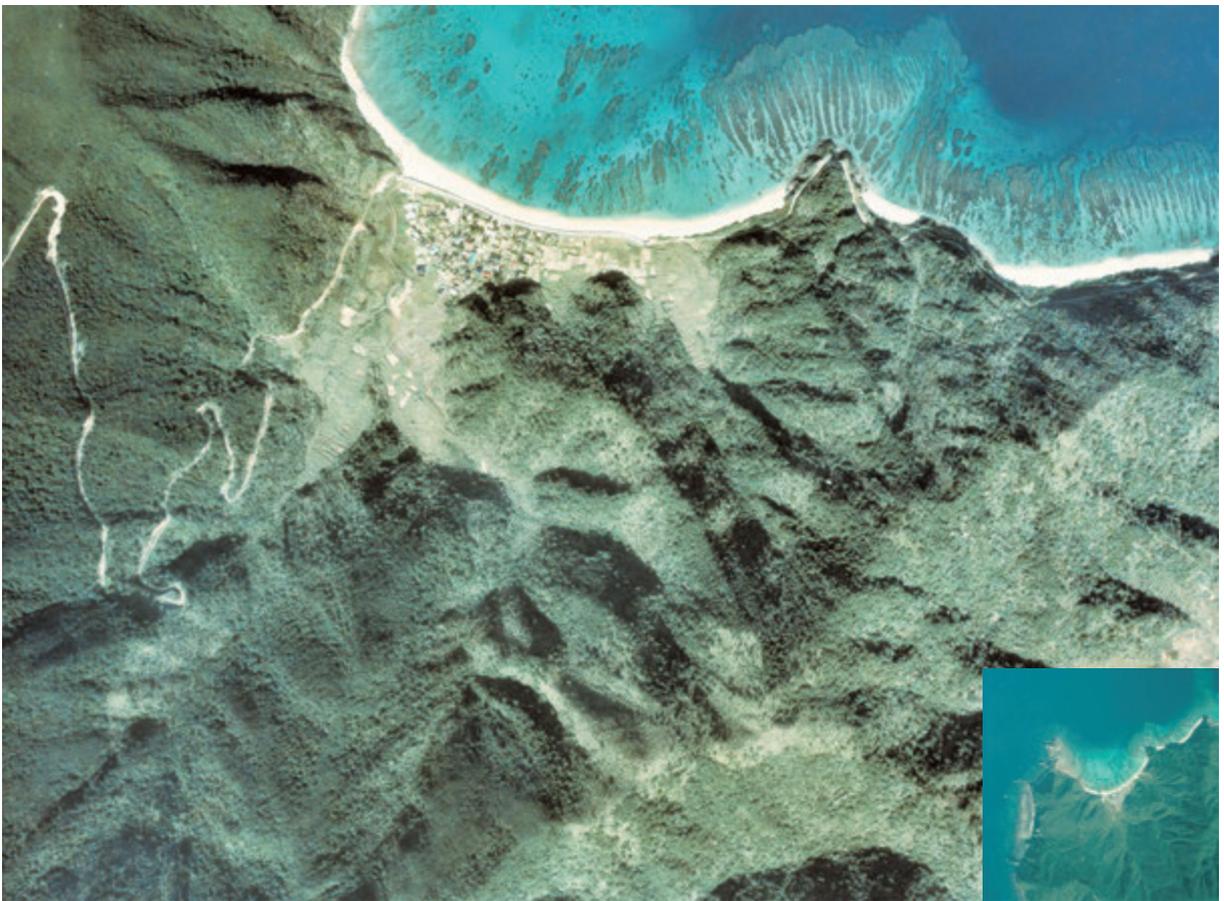
食料残滓の貝としては、奄美・沖縄の遺跡に見られるように多くの貝種が見られ、マガキ貝が圧倒的に多いものの巻貝製品としてはマガキガイの量は他を凌駕していないことが注目される。

獣魚骨の食糧残滓についても奄美・沖縄の遺跡に見られるものがほとんどであった。出土量が少なく貝類に依存した状況であると思われる（第 章）。

その中、ウシの骨が 層～ 層にかけて出土しており、先述した陶器の出土と重なるようである。そのため、これも古代のものと思われる。奄美諸島においてウシの骨が古代の層から出土した例はなくこれも注目される。

今回の発掘調査からは、古代のものと思われる陶器、墨書貝製品、火打金、ウシの骨といった奄美諸島初の出土であるものがあつた。これらを奄美諸島の古代の歴史を解明する中でどのように位置付け、何故東シナ海に臨む湾の入り口にあたり、外洋よりも波の穏やかな海岸に位置する屋鈍遺跡にこれらが入ってきたのか搬入ルートや社会的背景についての解明等の課題を得た。

写真図版



上：烧内湾（遺跡遠景）
（宇檢村教育委員会提供）
下：空中写真（国土画像情報）



上下：遺跡近景



上：調査前風景
下：基本層序



VI層出土状況



9 出土状況 (VI層)



貝符出土状況



Ⅲ層出土状況



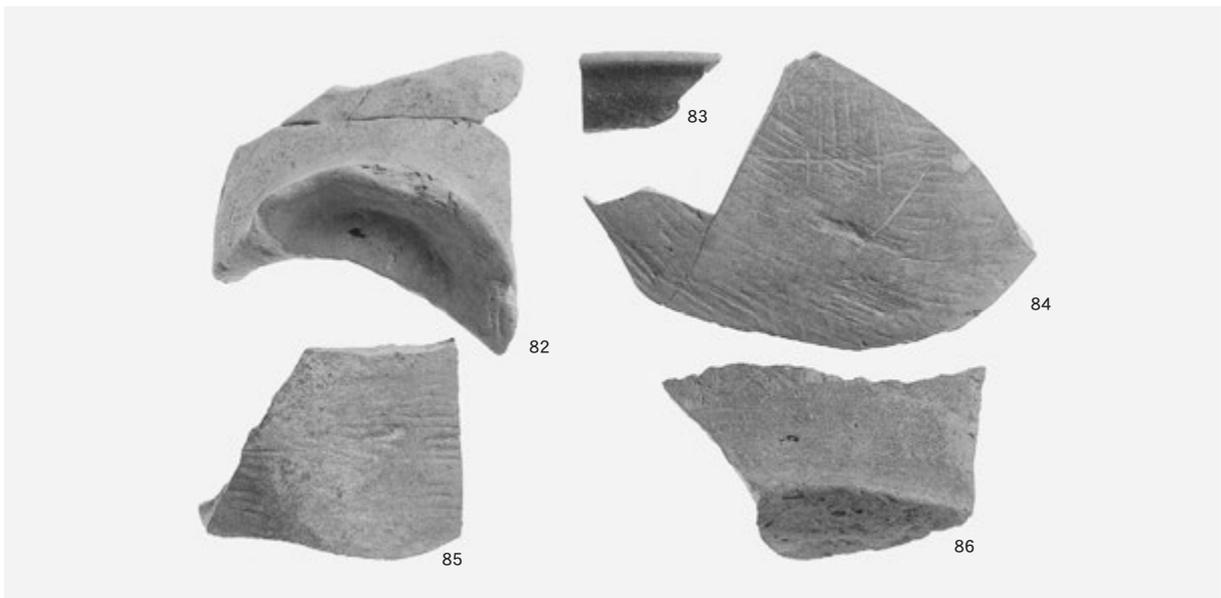
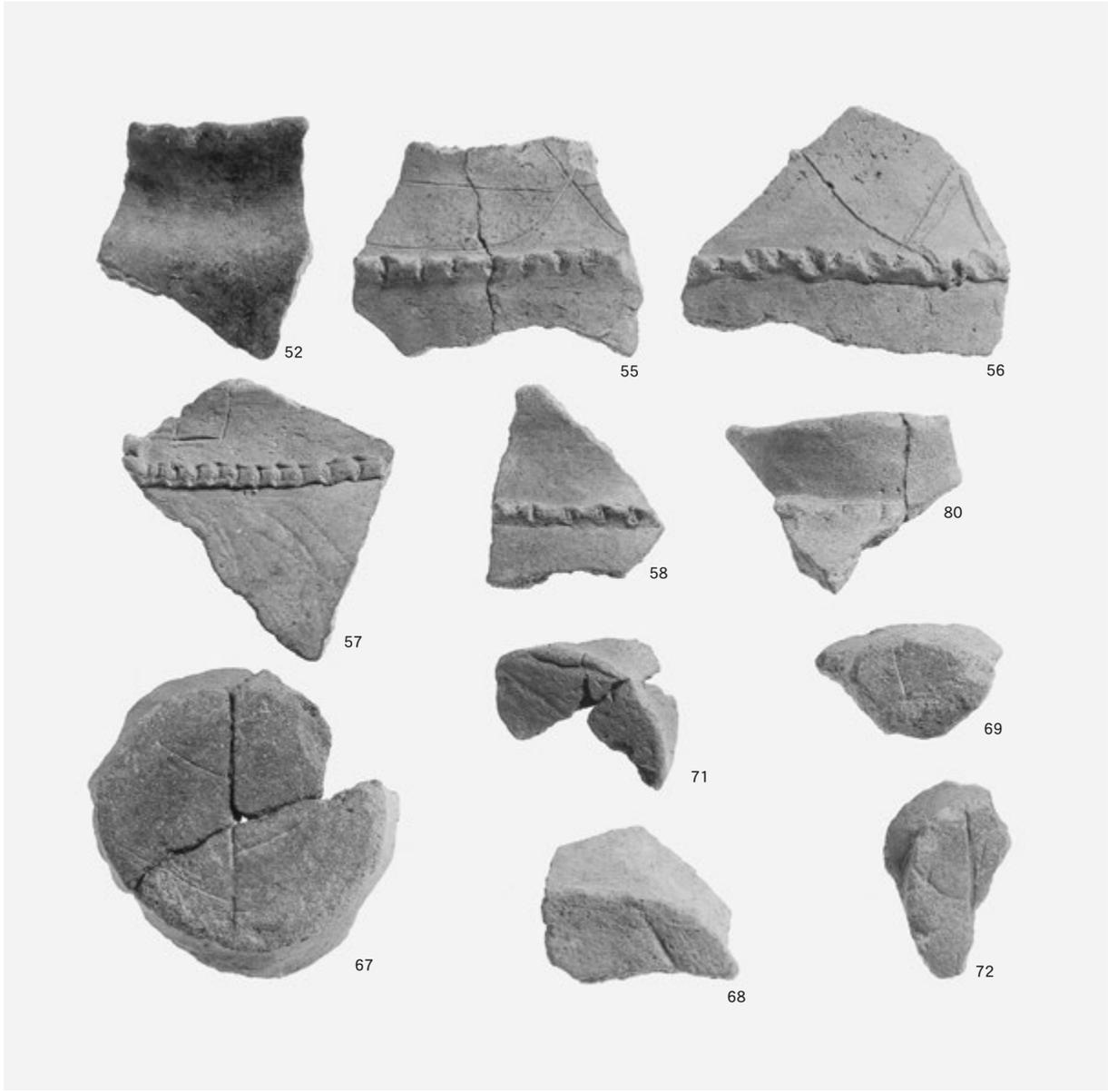
土師碗, 須恵器出土状況



陶器出土状況



第1文化層出土の土器・石器



第2文化層出土の土器・土師器・須恵器

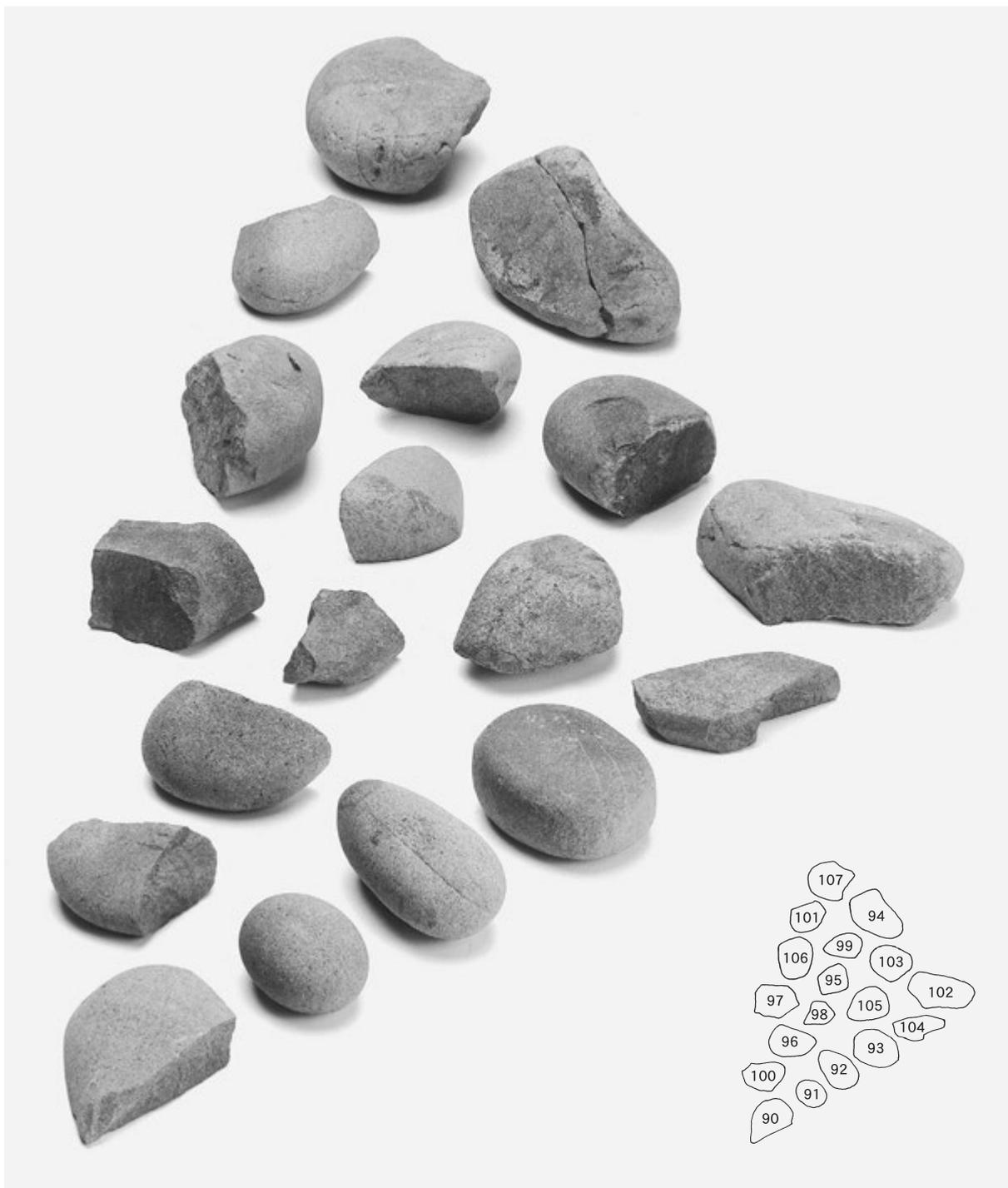
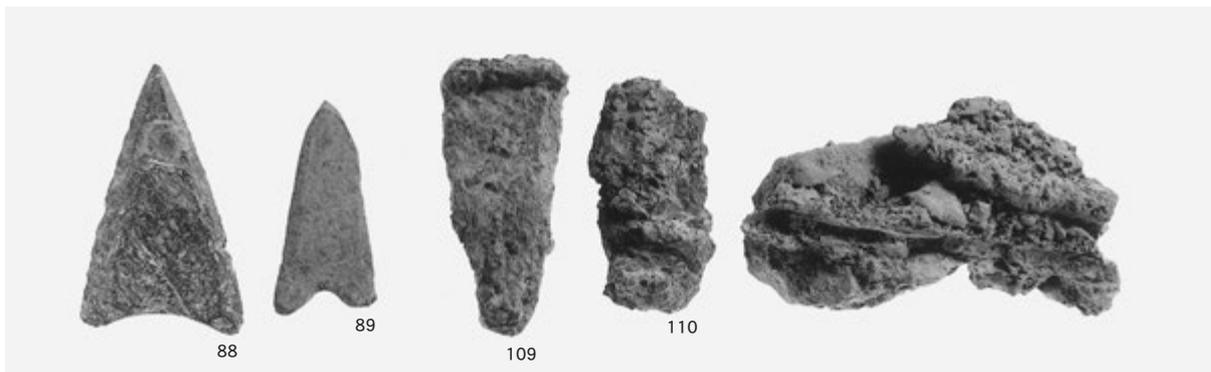


第2文化層出土の陶器(1)

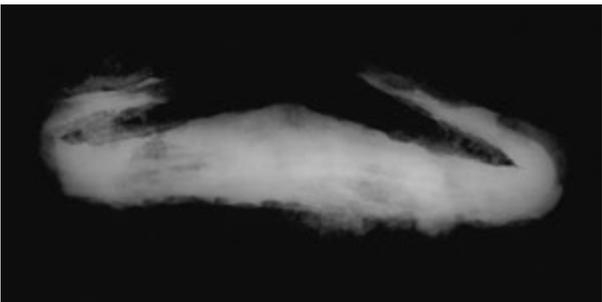
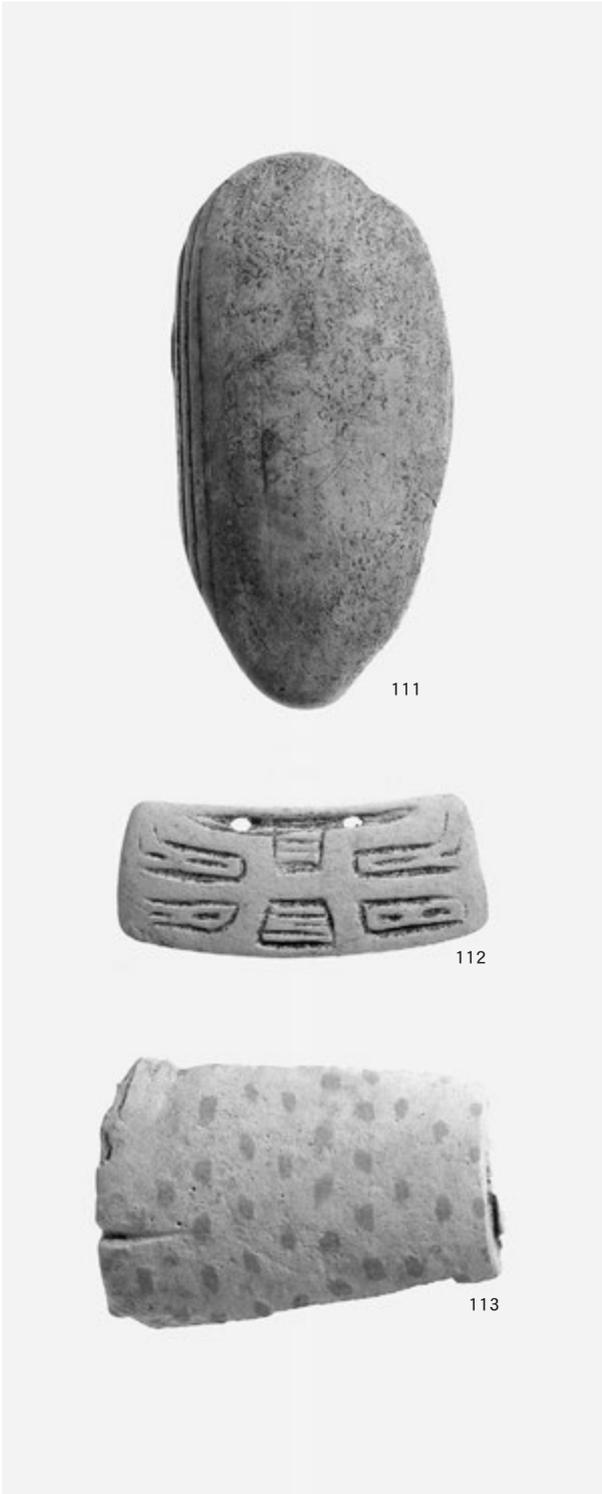


87裏

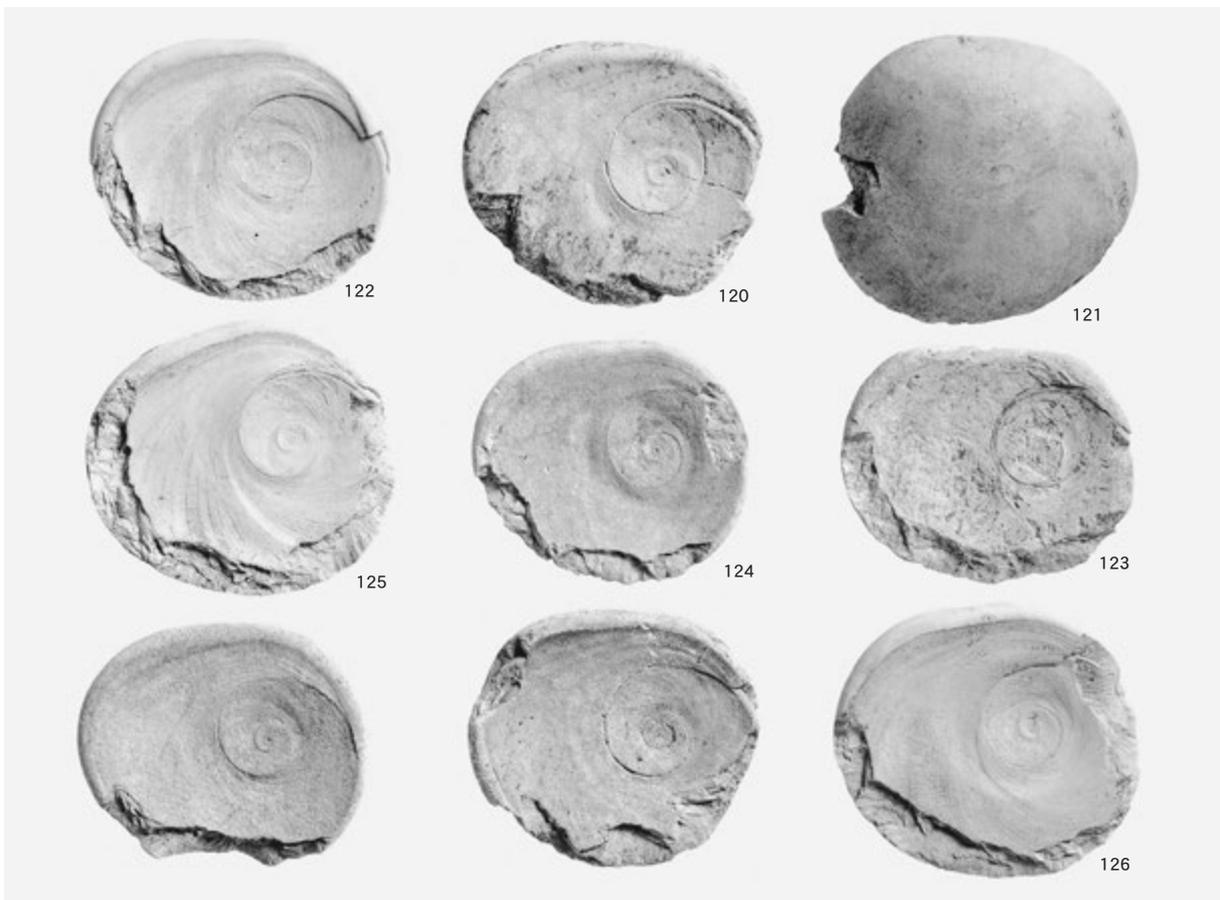
第2文化層出土の陶器(2)



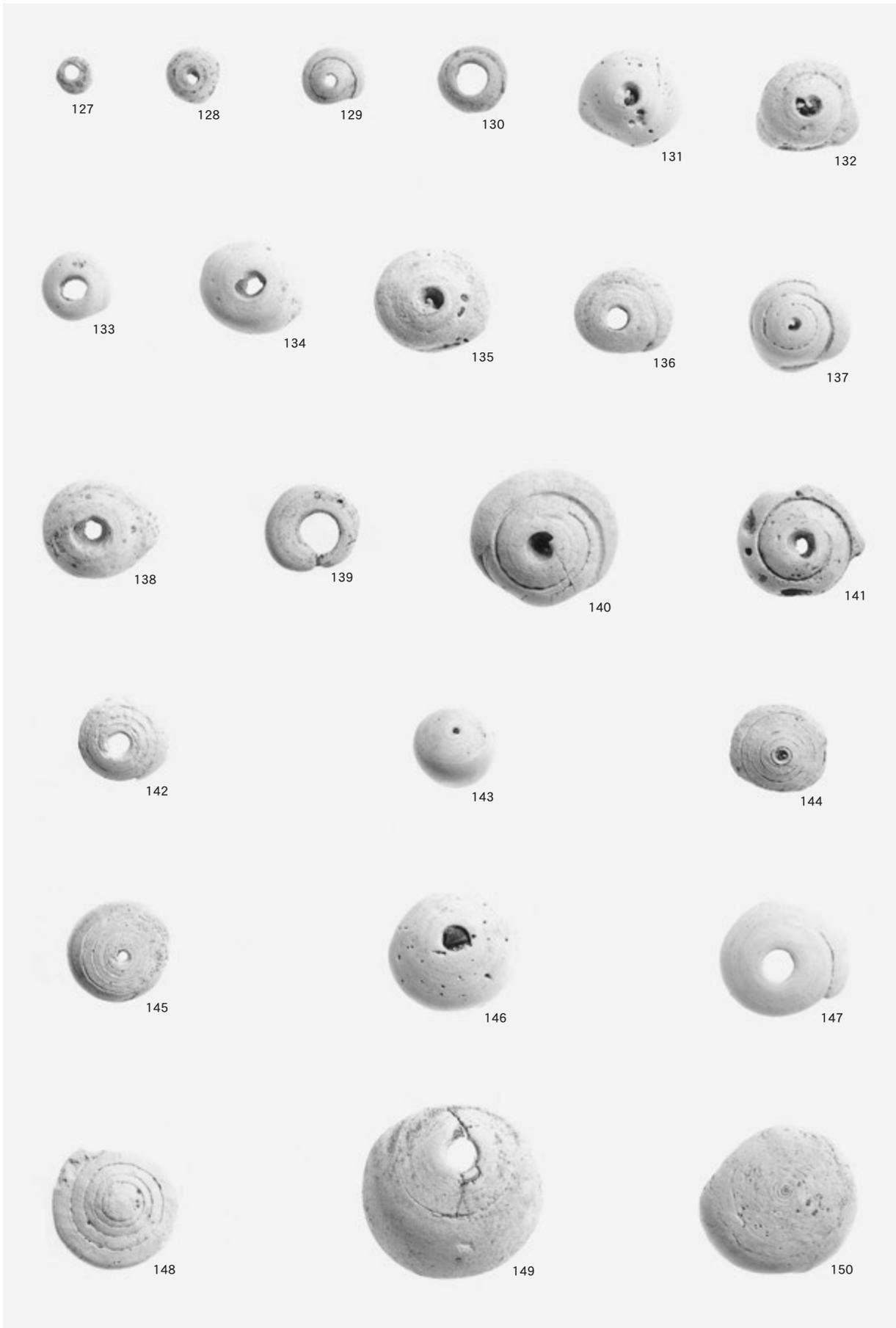
第2文化層出土の石器・鉄器



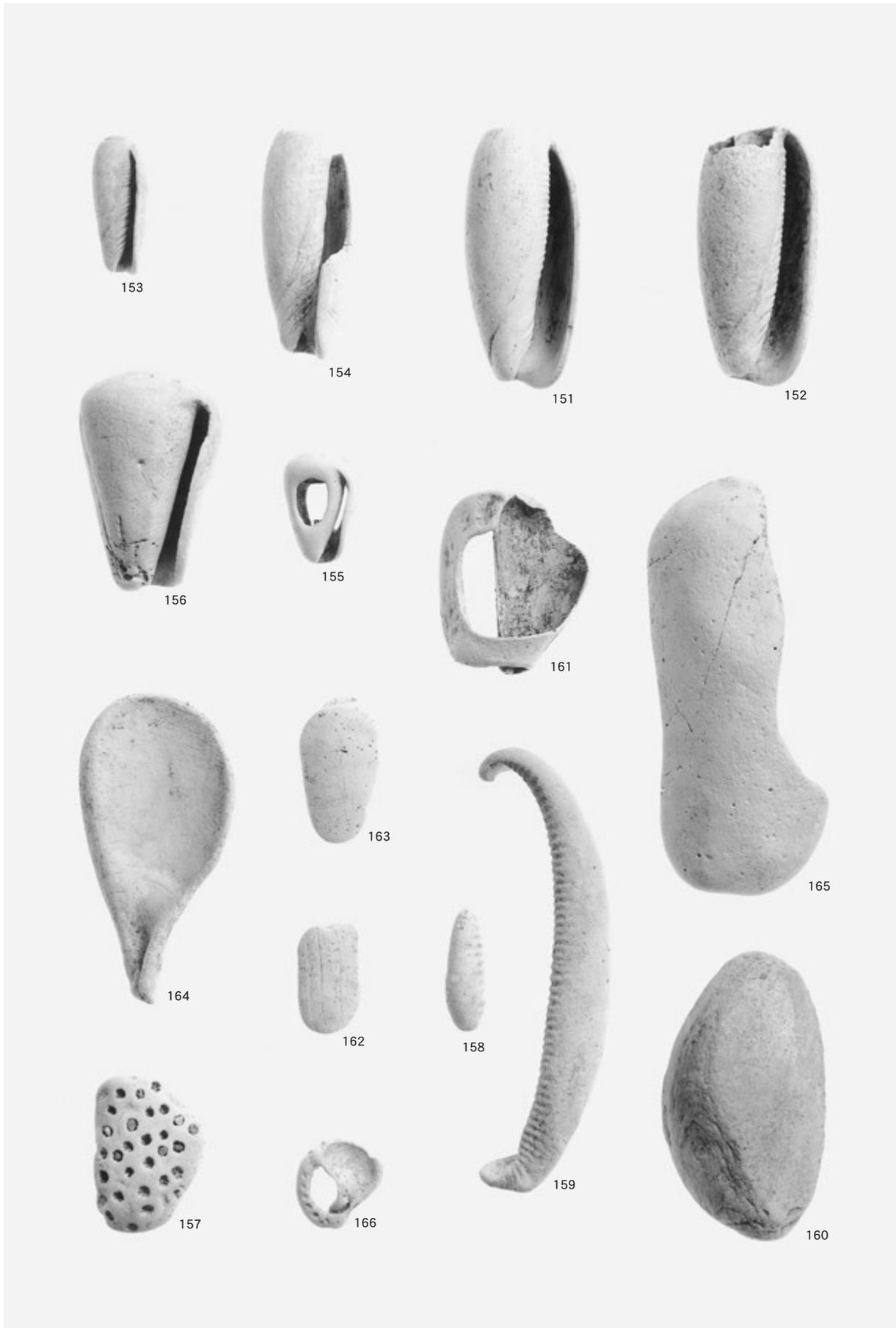
第2文化層出土の貝製品・鉄器



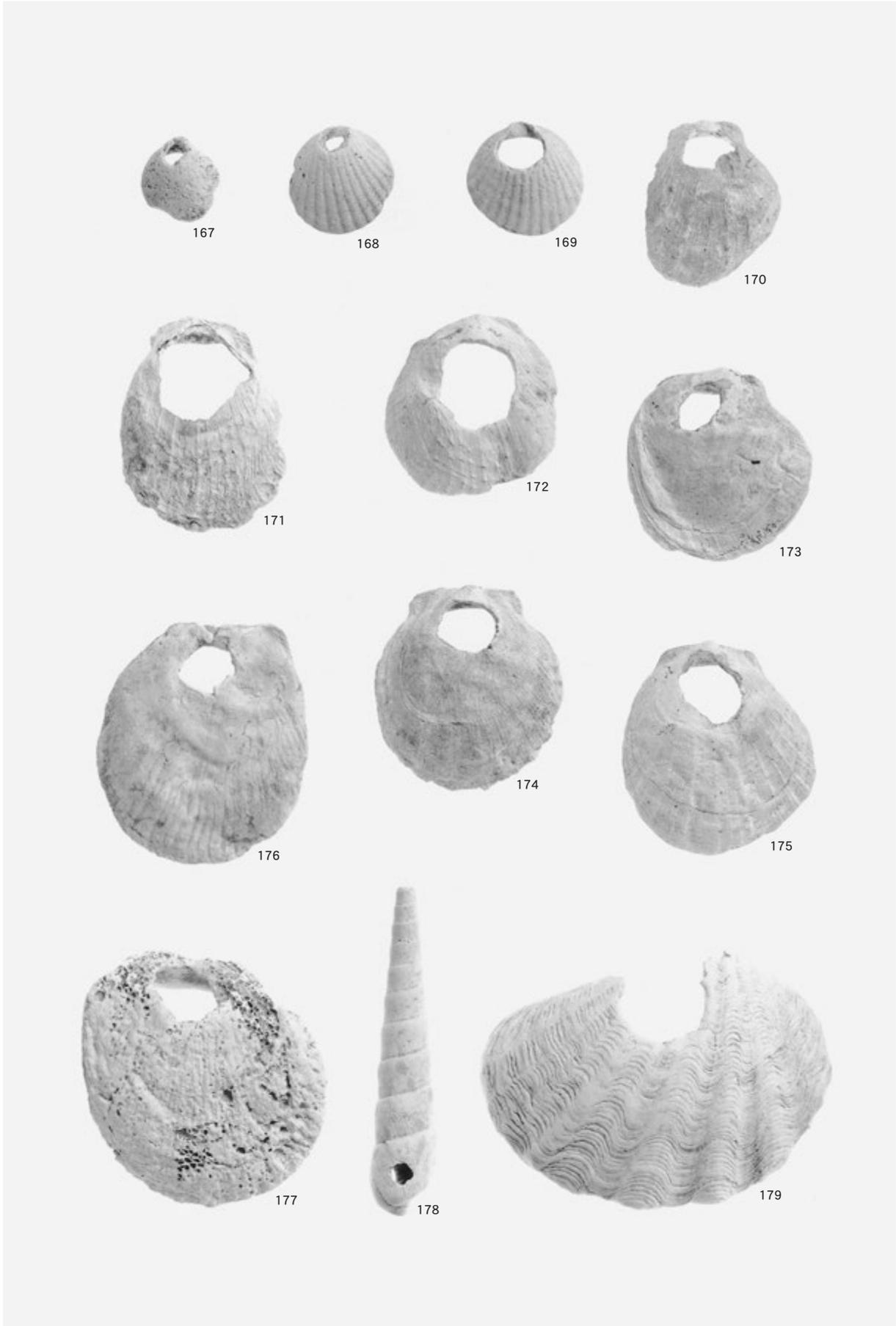
第2文化層出土のヤコウガイ製品



第2文化層出土の貝玉



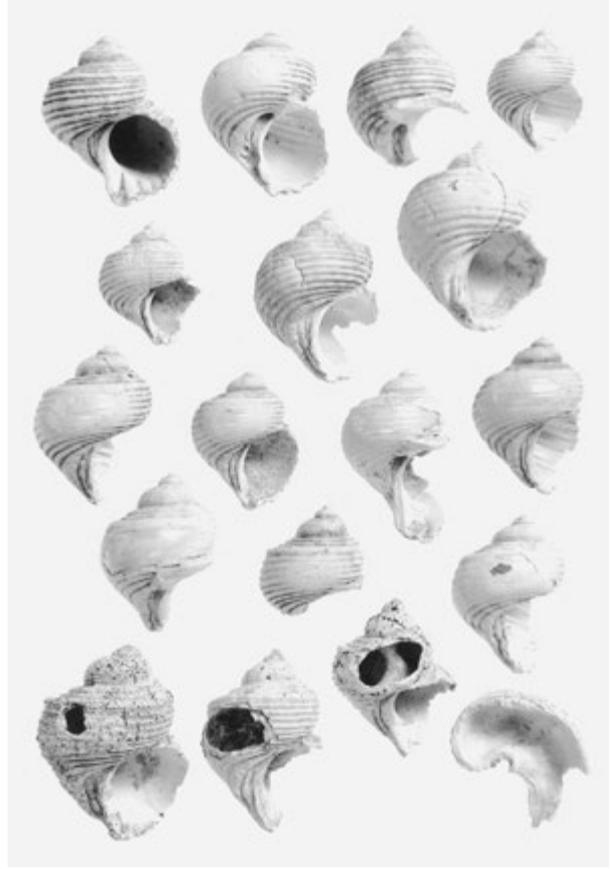
第2文化層出土の巻貝製品及び用途不明品



第2文化層出土の有孔貝製品



ヤコウガイ残滓



チョウセンサザエ



二枚貝



二枚貝

第2文化層出土のその他の遺物

あ と が き

1月～3月初旬の発掘調査は、南の奄美大島とはいえ東シナ海からの北風が吹きすさぶ厳しい気象条件なかでのものとなった。

そのような気象条件の下、遺物の出土に一喜一憂する作業員さん達の様子や休憩時間の心温まる郷土料理、集落での出来事等の語らいのなかで無事終了することができました。

また、調査にあたっては宇検村教育委員会、奄美市笠利町歴史資料館の支援・助言を頂きました。

調査の結果、奄美大島でこれまで数例の報告しかない土師器や須恵器、貝符、貝符未製品、初出土となる輸入陶器や墨書のある貝製品等多くの成果を得ました。

なお、2月24日に実施した現地説明会には宇検村住民をはじめ島内外から多くの見学者があり、改めて島の歴史への関心の深さを知ることとなりました。

この度、力不足ながら屋鈍遺跡発掘調査報告書を執筆させて頂きました。報告書の作成にあたってはたくさんの方々にご指導して頂き発刊のはこびとなりました。地域の方々が先人を振り返り、学術的な研究を行う際の一助となることができれば幸いです。



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (143)

県道曾津高崎線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

屋 鈍 遺 跡

発行日 2009年3月

発行者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899 - 4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
T E L (0995) 48 - 5811

印刷所 株式会社あすなる印刷
〒899 - 0041 鹿児島市城西2 - 2 - 36
T E L (099) 214 - 3757